「自我機能」と「現象的自己」の2つの枠組による人格適応の研究 3

教育

ロールシャッハ法と自己評価法の統合的使用を試みる累積的研究

斎藤久美子

「自我機能」と「現象的自己」の2つの枠組による人格適応の研究

―ロールシャッハ法と自己評価法の統合的使用を試みる累積的研究―

齋藤久美子

序　論

教育心理学の一部門として存在する教育臨床では、その理論及び実践の両面を通じて、個人の人格適応が中心的な問題となっている。私もこれまで8年以上にわたり、この分野で、常に、この適応の問題を課題として、理論的理解とその実証的研究そして具体的な診断と治療的働きかけの各側面から、これとり組んで来た。適応的人格、健全な(healthy)人格、更に進んで最適な人格(optimal pearsonality)とは、心理学的にどの様なものを指しているのであろうか。本研究で取り挙げる人格の「適応」概念にかかわる理念を述べるとすれば、諸家により掲げられている数多くのものの中から、Rogers, C.R.の"十全に機能する(fully functioning)"[137]人格、Allport, G.W.の"成熟した"[9]"(mature)人格、Smith, M.B.の"最適な人間

的機能"（optimal human functioning）[52]，そして、Freud, S. の精神分析学の基底に存する「深層を洞察した心身統一体的自由人[65]」の各考えを、代表的なものとして選びたい。そして、又、Maslow, A. H. の"自己実現的"（self-actualizing）[114][115]人格，Fromm, E. の"生産的構えを持つ、正常で、成熟した、健全な[68]"人を志向するものでもある。結局、本来の心理学的機能が、主観的及び客観的な見地で、どの程度自由にかつ統合的に発現しつゝあるとみなされるかによつて、こゝでの人格「適応性」は規定されるものと考えたい。ではかゝる適応性をとらえようとすれば、どの様な方法をとるべきであろうか。その方法の中には、たゞ単に現時点での診断に終るのみならず、後の治療的援助の段階をも予想してその個人を本当に（really）理解しようとする観点も含まれて来なければならない。この様な考えから、私は個人の適応性を理解する仕方として、次の様なやり方を発展的にとりつゝある。

1）人格適応の理解にはその個人の内的枠組、即ち現象的自己のあり方をとり挙げることが必要である。

2）しかし、その様な「現象的自己」の背後には、そうした主観的枠組を生成せしめている主体的な機能が考えられねばならず、その機能がどの程度健全に発現しているかを、客観的な外的枠組からとらえることが必要である。

3）「現象的自己」は主体的機能、即ち「自我機能」の最も重要な生成物であり、この機能の客体的反映であると考えられるが、この2つの枠組を相補的にそして綜合的に用いる方法を考えることが、人格適応の理解を、より正確にかつ妥当にするであろう。

この様な私自身の立場から、本研究は試みられた。上記の2つの枠組及び両者の関係についての理論的考察とそれに関する実証的な累積研究を発展的経過の順に一応提示しつゝ現段階までの結果をまとめてみたい。

目　次

第1編　理論的研究

第1部　本研究における2つの枠組とその背景　4

〈第1章〉「自我」と「自己」2つの枠組の基本的区別　4

〈第2章〉「現象的自己」について　14

〔1〕その内容及び研究の諸側面　16

〔2〕その人格内での位置づけ及び適応的意義　32

〔3〕その形成について　48

〈第3章〉「自我機能」について　52

〔I〕自我概念発達の歴史的展望　52

〔2〕自我心理学における自我概念のまとめ　68

1）力動的側面　70

2）発生及び形成に関する側面　83

3）構造的側面　88

4）エネルギー全済的側面　91

5）心理－社会的側面　96

〔3〕超自我と自我理想 108
〔4〕自我の健全性と適応 113

＜第4章＞「自我機能」と「現象的自己」との関係について 136
〔1〕「自我」形成と「自己」形成について 144
〔2〕「自我」と「現象的自己」との構造的関係について 149
〔3〕「自我」と「現象的自己」との機能的関係について 152
〔4〕両者の関係のあり方と適応について 158

第2部 本研究の問題 166
＜第5章＞研究目的 166
＜第6章＞研究仮説 169

第3部 本研究の方法について 172
＜第7章＞対象及びテスト手続 172
＜第8章＞「現象的自己」のテスト 173
＜第9章＞「自我機能」のテスト 187

第2編 実証的研究
第1部 質問紙法による「現象的自己」の分析 208

＜第10章＞ 〔実験Ⅰ〕 矢間法 -その1- による N.P 両群の比較研究 208

〔1〕 目的 208

〔2〕 方法 208

〔3〕 結果の整理と考察 210

〔4〕 まとめ 210

＜第11章＞ 〔実験Ⅱ〕(=〔実験A〕) 新矢間法 -その2- による N. P. S 群の比較研究 212

〔1〕 目的 212

〔2〕 方法 213

〔3〕 結果の整理と考察 217

〔4〕 まとめ 229

＜第12章＞ 〔実験Ⅲ〕 客観的尺度として用いられている既成の矢間法 -Barron, F. の "Ego-strength" スケール- による実験 230

〔1〕 目的 230

〔2〕 方法 231

〔3〕 結果の整理と考察 236

〔4〕 まとめ 243

＜第13章＞ 〔実験Ⅳ〕(=〔実験B〕) 改訂矢間法 -その3- による実験及び「矢間法 -その4- による構成概念妥当性の検討 245

〔1〕 目的 245

〔2〕 方法 247

〔3〕 結果の整理と考察 253

〔4〕 まとめ 262

＜第14章＞ 第Ⅰ部の総括と結論 263

第2部　ロールシャッハ法による「自我機能」の測定　274

<第15章>〔実験I〕=(〔実験A〕) N, P, S 3君年のロ・テスト反応の比較　274

〔1〕目的　274
〔2〕方法　275
〔3〕結果の整理と考察　276

<第16章>〔実験II〕=(〔実験B〕) N, P, S. 3君年の「自我機能」の分析　280

〔1〕目的　280
〔2〕方法　280
〔3〕結果の整理と考察　281

<第17章> 第2部の総括と結論　293

第3部　「自我機能」の全体的な健全性と「現象的自己」との関係から見た適応的統合性の研究　296

<第18章>〔実験A〕における2つの資料の関係の分析　296

〔1〕目的　296
〔2〕方法　299
〔3〕結果の整理と考察　299
〔4〕まとめ　309

<第19章>〔実験B〕及び〔実験A〕を合わせた資料の分析　310

〔1〕目的 310
〔2〕方法 311
〔3〕結果の整理と考察 311
〔4〕まとめ 334

〈第20章〉第3部の総括と結論 338
（本研究の総合的考察）

（あとがき　要約と今後の課題） 371

第1編　理論的研究

第1部：
本研究における2つの枠組とその背景

〈第1章〉「自我」と「自己」二つの枠組の基本的区別

「現象的自己」(「Phenomenal Self」)と「自我機能」(「Ego Functioning」)の2つ概念を互に明確に区別して定義することは、従来の理論的研究の厚史をたどってみても少ずしも容易でないことがわかる。自己と自我即ちSelfとEgoは、現実にかなり未分化な混乱した形で説明されており、本邦の文献においても、SelfとEgoの訳語が、自己対自我に統一されるどころか両者が任意に交代して当てられている。しかし、このあいまいさに直接焦点をあて、明確化を試みる研究をいくつか見ることができる。ここでは、それ等の研究を展望し乍ら二つの概念の基本的区別を行い、本研究でと

り挙げた2つの枠組についての基本的な概念規定を行いたい。

Allport, G. W.[8] は彼なりに自我（Ego）と称する概念を分析して、次の8つの主要な側面をとり出している。

1）知者（the knower）としての自我

2）認知の対象又は内容としての自我

3）原初的（primitive）利己心としての自我

4）優越衝動（dominance-drive）としての自我

5）心的過程における受動的機構としての自我

これは Freud, S. の解く自我（Ego）に相当し本能的衝動、外界の現実，超自我の三者間の葛藤状況において消極的調停の役割を果す機構を指す。但し、Freud, S. の自我概念の中でこれは，後に明らかにする如く，かなり初期の考えに匹敵するものである。[55]

6）目的追求者としての自我

7）行動体系（behavioral system）としての

自我

これはゲシュタルト心理学で説く自我に相当し、全体的な行動の場の中で已剛凝集されて客体としてな在する自我を指す。

8）文化の主体的体制としての自我

即ち、社会や文化の価値基準の内面化されたもの。

これ等の中で、1)、5)、6)、と、2)、7)、とは、主体的機能対客体的表象として各々了解されて来るが、丁度、Hall, C. S. & Lindzey, G. が大別している"過程としての自己"(Self-as-process definition)と"客体としての自己"(Self-as-object definition)の2つの概念が、それぞれに相応するように思える。(75, P468) ここですでにAllportとHallらに"ego"と"self"の個人的用法が見られたわけであるが、Hallらは客体としてのselfを、自己についての態度、感情認知、評価を客観的に示すものとし、又、過程としてのselfを、思考、記憶、知覚作用等の能動的諸活動から成る執行者(doer)とし

ている。Allportの"Ego"の中，3)，4)．は第二章の中で述べるが，精神分析学における衝動の面からの説明が可能で、本能衝動から派生し変容して自我機能に役立つ動因となるまでの過程のどこかに位置づけ得る動因と解される。又，8)．は同じく精神分析学での超自我乃至は自我理想に対応する面を持つ。但しこの8)は第三章で述べる理想的自己に匹敵する面をも同時に持つと考えられるのでその点Hallらの述べる客体としてのselfにも含めて考えることが可能であろう。この様にEgoやSelfの概念規定に含まれる錯綜した複雑な問題はAllport, G.W.の説1つの中にもすでに見られる。そうした中で現実に行われて来たことは，Hallらの説にも見た様に，用語は別として，客体として存在するものと，主体的機能として考えるべきものとの2つを区別してとり挙げようとする試みである。それ等の諸説の中には，上記2つのいずれかにより大きい比重をかけて論じているものもあれば又，

たいその2つを大別し対照させているだけの説も含まれ、論究の深さも様々である。

James, W.[90], Mead, G. H.[118], Lipps, Th.[112]等は意識的体験の方にむしろ焦点を合わせ、客体的自己の生成ほびその内容の説明に力を注ぎつつ、しかしもう一方に主体的機能を考えあわせていたと云えるであろう。即ち、James, W.は、現象的意識的自己("Self")を、「最も広義に述べるなら、およそ自分のもの(his)と呼びうるところのすべてのものの集まり」として定義し、それを構成要素、自己感情(Self-feelings)、自己探究(Self-seeking)、自己保存(self-preservation)の3つの側面から論じているがその構成要素のところで"純粋自我"(Pure Ego)なるものに触れ、それに先験的主体的機能と思える意味を持たせているが、それは、"思考の流れ(the stream of thought)"と結論しているのみである。これはAllport, G. W.の先述した自我の諸側面の中、1)に近いものと考えられる。Mead, G. H.は、客体的自己meを

の形成を社会的観点から、態度、役割の主観的とり入れから説明し、この"me"を行動を起す上での基準と考えたが、その際行為しつつあるのが主体的な自分"I"である。そしてこのIは行為の瞬間には意識されず、事後的にmeの中に存在しうるものであるとした。この様に、消極的で大雑把な仕方で作り、主に社会的行為の背後になする主体的機能を考えている。Lippitt. も一次的自我、二次的自我を夫々、二次的諸自我(Ich)に意味を与える根源的作用体と、直接体験される客体の範囲とする。たゞMead等とは異なりこの一次的自我は、意識体験を行いつつある主体として常にともに意識的に把らえられているとしてこれを意識的自我("Bewußtseins Ich")とも名づけるが、この辺りは本来の主体客体の概念が重複してやゝあいまいになっている。これに似たものに、Koffka, K.[101]のEgoとSelfがあり、彼はゲシュタルト心理学の立場からEgoは全体的な主観の場の中の区別されたあ

る領域として蓄積され融合して形成されるものであるとする。そしてこのEgoには意識的領域即ち"Phenomenal Ego"と呼ばれるものと無意識的な領域とがあり、又、Lewin, K.[111]の人("Person")の概念に中心部と周辺部との分化が考えられていてこの中核的部分に"self"という名称が与えられる。更に、この様に客体視されているEgoが、同時に緊張体系(tension-system)として環境と相互作用を行う執行者(doer)だとしている点がそうである。

これ等の諸論に比して、上記の客体主体の2側面を互に明確に区別しようとするものに、Symonds, P. M.[159], Bertocci, P. A.[15], Chein, I.[26], Hilgard, E. R.[82]等の理論がある。Cheinは、selfを内省的自覚(awareness)の内容とし、Egoを動因-認識構造(motivational-cognitive structure)を有する執行者としselfを支持し高める働きをするものと見ている。これに対し、Bertocci[15]は、用語が全く逆転していて、知覚、思考、記憶等複雑な活動を綜合的につかさど

る主体的機能をself，このselfによって知られる存体をEgoと称している。そして，selfはその基礎に遺伝的条件をも含み持っていて環境との間に不断の適応的関係を展開させ乍らその個人に独自の人格を生ぜしめるが，環境との交渉を通じて能動的に内在化させて行く社会的文化的な価値基準をEgoは主に反映しているとする。Bertocciにあっては，この称に，Cheinと用語が逆転しているのみならず，SelfとEgoの各々に附せられた意味の比重も，Cheinと違って主体的機能である'Self'の方にかけられている。Symonds[159]は，Egoを，知覚，思考，記憶等の群からなる欲求充足達成のための一連の行動をするもの，Selfを，自分自身に関する主観的体験のあり方として区別している。そして，SelfはEgoの様態のあり方によってその内容が規定されてくるものでもあり両者間には相互的関係をも考えている。これは，後に第四章でも触れるところであるが，Hilgard[82]も同様な着目の仕方をして

いる。即ち彼は，Ego として Freud 派精神分析における如き主体的機能の概念を想定し，そのEgo の働きによって生成せしめられる自己像（Self-image，Self-picture，Self-concept 等の呼び名が与えられている。）をこれと区別している。しかし，この自己像の規定に関しては，Ego の無意識的防衛活動による影響を重視して慎重かつ正確であろうとする所から，内省的意識的所産としての自己像はとりあげず面接的資料から推定する“推論された自己”（inferred self）なる概念を提唱している。

とにかく，この様にして，いろんな研究者がそれぞれの仕方で，主体客体2つの側面をほぼ区別しようと試みている傾向を見ることができる。即ち，Ego-as-process 乃至は Ego-as-doer とでも云うべき主体的機能的なものと self-as-object とでも称すべき客体的所産の2つは一応概念的にまず二大別されて来る。両者の関係は別に後章で述べるとして，私は混乱した用語の中から，2つの側面の中主体

の方にEgoという用語を当て、「自我」という訳語をそれに対して用いる。そして、客体の方をSelfとし、「自己」という訳語を当てることにする。この様に本研究で用いる「自我機能」と「現象的自己」とは、上記の如く基本的に二大別される「自我」及び「自己」という概念を基底としている。従って、"自己"は、哲学的にはもとより心理学的にもかなり広大な概念であり、例えばJung, C. G.[94),95)]の"Self"の様に心的全体性(psychic totality)に向って統合的に機能していくものや、Fromm, E.[69)]や禅の心理学で述べられる"True Self"、"the Great Self"等[1(4),1(5)]や人間の生物・心理・社会学的な総体的可能性を極限的に開発したもの、更にそれが一個の人間内にとどまらず大自然・宇宙的次元にまで高まった概念など相当規模の大きいものがなたするが、それ等に比すれば本研究における「自己」は上記の如くかなり限定されたものである。現段階では一応この様に範囲を限った2つの概念を用

いて人格適応の研究を試みた。

〈第2章〉「現象的自己」について

「現象的自己」（"Phenomenal Self"）はSnygg, D.[53]; Combs, A. W.[47]; James, W.[90]等の用語でもあるが、この概念の定義は「自己」に関する諸理論の展望と考察を通じて明確化することにする。

第一章で述べた様な客体としての意識至験的自己に関する研究の歴史的至過については、我国では北村[99]が、その中に上記の「自我」に相当するものをもいくらか混在させ乍らではあるが、かなり詳しくたどっている。そこでは、1700年代から1800年の初め頃にまでさかのぼって、連合心理学、作用心理学、ゲシュタルト心理学における各意識的現象及び自己に関する意識的把握の研究、更には哲学の現象学的立場における主観的意識的世界の自然な流れと統一性の研究が「自己」の研究に

重要な関連を持つものとして展望されている。又 Wylie, R. C.[167] は、James, W. (1890)[90] に流れを発し、Calkins (1915)[22] の自己心理学 (self-Psychology) に数って形を得た後、行動主義、客観主義の隆盛によって停滞し、やがて1900年の半ばに近くなり主に非指示的心理治療法が発達して来るに伴って再び自己心理学が重視されるに到る経過を概観しており、その間機能主義者達によって内省的方法は捨てられずに来たこと、又、ゲシュタルト心理学によって現象学的立場が維持され一般心理学の中にそれが注入されて行ったこと、そして又精神分析学派の中でも主に新フロイト学派に属する人々によって「自己」が重視され理論的展開が行われて来たこと等を含めて、結局アメリカを中心とした所謂「自己心理学」の流れをたどっている。ここでも、むしろ Wylie[167] の述べる如き流れに属する形になるが、本研究での限定された「自己」の概念に直接的な関連性を有すると思われる研究の中から主要

なものを概観することにしたい。そして，それ等についての整理と考察を次の様な諸観点から行ってみる。

1）「自己」の意味する内容についてはどの様に述べられているか．又どの様な側面から把えられているか．　2）人格内での位置づけ，適応上の機能的役割についてはどうか．3）又その形成についてはどうか

［I］その内容及び研究の諸側面

「自己」の基本的意義については第一章で大雑把に述べたが，個人の内的世界．主観の世界を重視してそれを一つの研究の枠組にしようとする現象学的接近法を基調としている。Snygg D. & Combo, A. W.（153, p58, p78, p111）は，「個人がいろんな全経験に際して知覚し把握しているところの全現象的場（phenomenal field）の中で，自分（I）に関係あるものとして自覚しているすべてのものから成っているのが現象的自己（"Phenomenal Self"）である。」と述べ，又，「現象的自

（p.〜 p.111）

己」はその個人だけが有している内的枠組であり，その個人が知っている自己そのものである。他人がその個人をどんな風に見ていようと，個人にとって完全な現実感を与える自分は，この現象的自己である。」(153, p.179)と述べるが，第一章で述べたJames, W.(p.179)の考えと照応できるものである。又Rogers, C.R.も，個人は不断に変化している経験の世界の中心に存在するものであり，この経験の世界即ち現象的場の把握は，必ずしも完全に意識化し尽されるものではないにしても，その個人自身のみによって行われうるものであり，それこそが，当人にとっての現実に他ならず，そこから，自己に関する認知が，次第に，me, I, myself として分化して来て自己概念（"Self-Concept"）を形成すると述べている。(136, pp.481-524)(p.483)

Selfはこのように経験的な現象の場から自分に関する主観的現実として分化生成するものである。しかし，このselfに関して，意識化の度合をどの程度に考えるか，又周辺部と中

核領域とを明細化して考えようとしているかどうか等については各研究者により差異がみられる。即ちまず前者に関して云えば、かなりはっきりと意識され自覚されている「自己」のみを考えようとするものに、Stephenson, W.[156]の"自己内省という1つの行動によってその人が語る自分自身"、Stagner, R.[155]の主観的な"自己像"("self-image")"自己概念"("the concept of self")、Chein, I.[24]のごう直接感知され自覚された内容としての"自己"("self")、Sarbin, T.R.[143]の認識構造(cognitive structure)としての"経験的諸自己"("empirical selves")、Lipps, Th.[112]の先に述べた、直接知覚され体験される"二次的諸自己"、Cooley, C.H.[28]、Mead, G.H.[118]の対社会的関係を通じて等習的にとり入れられ形成されるところの自分を具体視した"鏡映的自己"("the reflected or looking-glass self")や"me"、又Jersild, A.T.[92]の"その人に知られたその人"("the individual as known to the individual")つまり内省的

自覚によって対象化された"自己"があり．又，James, W.[90]の"自己"も，自己感情（Self-feelings）等感情的側面をもとり挙げているところからすれば，単に明瞭な意識のみならずもうすし広い"ア"への拡がりが予想されるが，先述した如き定義等からは意識面への焦点づけが明らかであろう。Lundholm, H.[113]の"主観的自己"（"Subjective self"）や，Sherif, M. & Cantril, H.[150]の"自我態度"（"Ego-attitudes"）とおする自己評価や社会的価値のとり入れに基づいて生成する客体としての自己，又，Bertocci, P. A.[15]の価値の集合体としての客体的自己（"Ego"）等は多少その説明が不明瞭で，無意識面をも自ら含めた自己が想定されている様に受けとれる箇所もあるが，やはり，それほどはっきり限定されてはいない乍ら，意識化されている自己を指していると受けとっておくべきであろう。又 Snygg, D. & Combs, A.W. の現象的自己は，"自覚（awareness）のレベルに低いものから高いものまでの巾がある"[153, P58]とされている

以上記の諸説より詳細な述べ方がなされているが、〝完全に無意識化してしまうことはない〟として意識の範囲にとどめられている。(134) こうした諸説に対して、明らかに無意識面への拡がりを考慮しているものには、Rogers, C.R. Symonds, P.M. Hilgard, E.R. がある。Rogers の場合は、全経験というものは彼の概念である有機体("organism")の中で瞬間瞬間に生じているあらゆる事柄であり、それを意識的に感知して、象徴化(symbolize)することによって現象的場(phenomenal field)が生成されるわけであるが、それが全全経験を写し出すことは不可能ではないにしても常にそうだとは限らないと述べる。(135), (136) 自己はその現象的場から分化して来るものである故、従って、明確に意識されたものである場合もあれば、又、漠然と不鮮明な場合更には無意識的な場合もあるとする。故に、現実の自己全経験がどこまで広くかつ正確に象徴化されて把らえられているかということが重要な問題になるが、当面研究

対象とされるのは常に、経験されそして知覚された（perceived）自己であり、現象学的接近法を忠実に守る形でかかる自己への焦点づけが行われている。Symonds[159]、Hilgard[82]は、意識的な自己像が、「自我」の防衛作用により無意識的に歪曲されてしまう可能性に注目して、意識的にある自己概念を抱いていても、無意識的には反対の観方を自分自身にしているかも知れないこと、又個人が現に有している意識的自己についてそれが防衛的所産であるという点までは自覚し得ないのではないかといった点を論じている。殊にHilgard[82]は先章でも述べた通り、意識的自己像の持つ意味に疑問を提出しており、それは無意識的な要因に規定される面が大きいので、非内省的な資料から間接的に、本当の自己概念を推論すべきだとしている。その他比較的最近の傾向として、意識的自己のみならず"投影された自己"（"projected self"）[166, p252]、知らず識らずの自己評価"（"unwitting self evaluation"）[168, p255]

"基本的な自己概念"("basic self-concepts" 167, p254)等 Wylie, R.C. のいう非現象的な自己("non-phenomenal self-concept" 166, pp250-274)の操作的実証的諸研究がみられる。

この様に、「自己」に関する諸説には意識的レベルから無意識的レベルに到るまでのいろんな段階のものが含まれており、その中で無意識レベルへの研究を操作的方法を通じて進めて行こうとする1つの流れがある事は確かである。しかし、一方目を転じて、精神分析学の分野でいくらかとり挙げられている「自己」理論を見ると、その内容については次に取り挙げるが、精神分析理論そのものがそもそも広範にして深い無意識に関する研究を詳しく進めて来たものであるだけに、そこで触れられている「自己」は、無意識的力動性を背景にしていながら、却って意識的に定義されることによって、理論全体の中での特別な意味が与えられている。勿論、精神分析学派の「自己」は、所謂自己心理学にくらべると

全体から見た理論的比重が、「自我」や無意識に比しごく軽いものでありまたその説明も不十分だと云わねばならないが、この様に「自己」がむしろ意識的なものと見られているのは興味深いことである。この点については後に第四章でも考察するが、本研究で対象とする「自己」は、上にみた意識から無意識レベルの中では、意識的現象的な自己に限っている。

次に「自己」に周辺部と中核部を考えようとする理論に関しては、Snygg[153]、Combs[27]、Rogers[135),136)]、それにKoffka[101]の場理論的考え方、更にはJames[90]が挙げられるが、それ以外では、特にこうした明細化を行っていないものが多い。

Snygg と Combs[27),153)]によれば、先に紹介した彼等の「現象的自己」の中でよりよく分化しより恒常的な部分から成っているものとして自己概念（"self-concept"）を考えている。従って現象的自己がかなり周辺的なものであり、その時々の状況によって変動し得るものであるの

に対して，〝自己概念〟の方は，より重要な意味で「自己」と認知されたものから成っており体制化されている度合の高いものとして考えられている。Rogersも現象的場には図にあたる領域と地になっている部分とがあると述べ[136, p.501]，この差異は先にとり挙げた意識化の度合とも対応しているが，図的な部分ができるだけ客観的であり現実の「経験」をありのままに受容したものであることが，適応上重要視されている。又Koffka[101]の場合，第一章でみた通り，客体と主体との考え方が比較的未分化であるが，現象的な内部領域を一応「自己」（但し，〝phenomenal ego〟という呼び方がなされている。）と考えておりその中でも中心部と周辺部とが分化していて，中心部こそ，客体的自己でもあり同時に主体的執行者（〝doer〟）でもある〝Ego〟にとっての重要な中核をなすものとされている。更にJamesでは「自己」がある階層をなしていると考えられており，身体的自己など物質的（material）

なものを基盤とし，精神的自己を最も上層に置いている。又，その精神的自己の中で，知的過程等より欲求や意志決定など所謂力動的な要素に中心的位置が与えられている。(90, pp291-296)

以上の如き中心的周辺的という観点からすれば，本研究における「現象的自己」はより中心的なものを指しており，その点Combs[27]やSnygg[153]の"現象的自己"とは異なるものである。

次は「自己」の内容ほど研究的観点について諸説を纏めてみる。

Rogersは，「自己」として自覚されているのは，結局，自己の存在（being）と機能（functioning）などとしており(136, pp497-501)，大きく要約すればこの二つにまとめられることになるが，この各々に該当すると思われるものがもっと詳しくいろんな研究者によってとり挙げられている。そのとり挙げ方は研究者により必ずしも組織的であるとは限らず，又詳しさの点でもかなりの差異がみられるが主なものの中からいく

つかをみることにする。Jamesは「自己」の構成要素として3つを挙げていたが、1）物質的自己としては、身体や衣服、家、財産など具体的な所有物に関するその個人の認知の仕方を考え、2）社会的自己として、仲間からどの様に見られているかに関するその個人の意識的受けとり方を、3）精神的自己としては心理学的な能力、諸傾向、例えば知性、感覚情緒、欲求、意志などについての自己の特性に関する認知のあり方を考えている。(90, pp291-296)

これとや、似通ったものにSarbin(143)の1）身体的自己（somatic self）2）感覚受容器と運動的遂行器（receptor-effector又はsenseorgan-musculature）の「自己」3）社会的自己があり、発達的に後者程、遅く形成されると述べている。又Stagner(155)も、「自己」の内容を成すものに、体格、知能、気質等本来的に備わっている属性とそれに加えてJamesの2)やSarbinの3)の様に社会的対人関係を媒介にした外的評価のとり入れによって作られる自己の

重要性を指摘しているが，このように対社会的関係の反映として生じて来る自己内容を重視する人にはCheinやBertocci等かなり多くがあげられる。Mead等が論じている如く本来，「自己」はそのどの様な内容においても対人的社会的な関係を通しての形成が考えられるわけであろう。従って，社会的自己に関しての み対人的評価や他人の認知を考慮するというのではなく，ここでは，社会的な在としての自分のあり方に関する意識を〝社会的自己〟の意味するところとした方がより妥当ではないかと考える。こうした「自己」の内容について，2893人の男女生徒学生を対象に自由記述式の調査を行った結果から詳細な分類を試みているものにJersildの研究がある。それは十分系統だったものではないにしても，内容を大巾に把らえ網羅している。即ち，身体的諸特性，健康から，衣服，家等物質的な面，家族・学校での対人関係からもっと一般的な社会的行動様式や態度，知能，成績及び趣

味、特殊な才能、宗教、人生観等に関するもの、更に人格特性として、情緒的諸特性や自己統制のあり方等が含まれている。(92, pp 22-84)

本研究における「自己」の内容は上記の広い範囲にはぶものから出発して、次第に人格の機能的な面に集中する方向をたどっている。これは第四章でも触れるところであり又、第二編で詳しく示す通りである。

次に、「自己」はどの様な観点から研究されているか又、どの様な側面から問題にされるべきであろうか。これは、次に述べるところの人格における「自己」の位置又はその適応的役割の問題と密接に関連して来るものであるが、「自己」がどう云う側面から重視され問題にされているか、それ等の諸側面をとり出しておく。

自分自身を客体としてみることは畢竟自分を認識的な又感情的な意味において評価(evaluate)することであると云っても良いのではなかろうか。これは「自己」が社人関係的所産

であることからも考えられる。自己に関する観方（view）は、常に何らかの相対的評価の意味あいを含み持つものであろう。従って「自己」のあり方として問題になる観点と云うのは結局この自己評価を基盤にしたものになって来る。

まず"自己受容"(self-acceptance)はRogers[135) 136) 138)]をはじめとして非常に多くの研究者により「自己」のあり方の重要な観点として理論的又治療的実践において、更に実証的立場から研究されてきている。これは、現実のありのまいの自分("actual self"[166, p61)], "real self"[87)]又操作的に厳密な意味では"perceived self"[138)])をどこまで自分自身が受け容れて観ているかに関するものであり、微妙な意味あいの違いは有するものの、"自己尊重"とか"自負"("self-esteem"[169, p40)], "self-regard"[169, pp39-110)], "self-respect"[1)], "self-appraisal"[169, p94)])、又、"自己適当感"("self-adequacy"[27), (53)])、"好ましい自己感"("self-favorability"[169, p40)])、"自己満足"("self-satisfaction"[167, p40, pp58-2

)等に通じるものである。これ等が主観的現象的枠組から問題とされ、"現実的自己"(perceived self)、"理想的自己"(ideal self)[169, pp280-284]、他人がみていると思う自己"('social'-self)、"一般の人々が持っている「自己概念」"(generalized others' "self concept")[169, p276]又、"楽観視した自己像"と"悲観視した自己像"(optimistic self, pessimistic self)[169, p95]等をいろいろな測定法によってとらえ、各々を分析すると同時にこれ等各側面の相互関係をみることによって上記の自己受容のあり方や、自己尊重の程度等が研究されようとしている。

この様に、「自己」がどの程度受容的に評価されとらえられているかということに次いで多く研究が試みられている観点は、「自己」がどの程度客観性を有しているかという"自己客観視"(self-objectivity)[12, p.369), 169, p.275-316)]に関するものであろう。これは、他人の観察に基づく資料(この他人や観察法にはいろんなものが含まれてくる。)投影法等自己記述以外のテスト法

から間接に推論される自己像と当人の「自己」報告（self-reports）との照合によって研究され，殊に，他人による評価や他人に対する評価と自己評価との関係は，この様な自己像の客観性や，所謂洞察的自己把握の観点からのみならず，"自己受容と他人受容との関係"や，"社会的望ましさ"（social desirability）[12, p349]"自己明示"（self-disclosure）[12, p358]等の問題としているいろ研究が試みられている。

その他，"自己発達"或いは"自己形成」（self-development, self-organization）[12) 21) 117) 166)]の問題又，"自己統一性"（self-consistency）[169, pp111-112]，"自己恒常性"（self-stability）[12, p368, p372]，更に又ごく稀に，"自己の分化"（self-differentiation）[93), 169, p113)]も問題にされている。

以上が，主観的内省的に把らえられている「自己」について問題とされている諸側面であるが，その他に先にも述べた様に非現象的な資料により無意識的自己を，防位性（defensiveness）の問題として或いはこの自己こそ真に

重要な自己態度（self attitude）だとして間接的に推論しようとする立場がある。[12)27)28)167)]

以上「自己」の内容を成すものと、研究上問題となる諸観点を挙げ若干の考察を加えたが本研究では、自己評価を主に"現実的自己"、"理想的自己"に関する評価からとり挙げ、それを自己受容乃至は自己肯定の観点と自己把握の正確さ、客観性の観点から問題にすることになる。尚、上述した如き諸観点に基づく具体的な、「自己」研究法については後章で述べている。

〔2〕その人格内での位置づけ及び適応的意義

所謂"自己心理学"及びその他自己重視の立場においては、人格理論が「自己」を中心として展開されている。Rogersは「自己」をその人格理論全体の中の中核的概念とし、行動理解のための最も便利な観点が、その個人の内的枠組即ち「自己」に他ならないと述べる。[135)136)]

○ Snygg, Combs も現象的場がすべての行動を規定するものであり、その中で中核的な「自己」は個人の行動に重大な又強力な影響を与えるものであることを力説する[27, P:127]。その他、Gerald, Rainy, V. C.[127] 等同じ観点に立つ人は多く挙げられるが、彼等は皆、「自己」を個人が持つ唯一のユニークな枠組であり"当人にとってのへの完全な現実(complete reality)"を性成せしめるもので、その個人にとり頼りになる判断や行動の基準となり、精神的健康、人格適応上鍵となる働きをなすものであると主張する。こうした系列の人々以外に Sullivan, H. S.[157] は"「自己体制」("self-system")なしの人間存在を考えることはできない"と述べ、その他 Horney, K.[87)88)] Adler, A.[1)2)] Fromm, E.[67)68)] 等新フロイト派に属する人々に、それぞれの仕方での「自己」重視が認められる。更に、正統派精神分析学の自我心理学においても、必ずしも十分な研究が尽されてるとは云えないまでもいくつかの理論的実践的研究をこの「自己」に関

してみることができる。即ち、Hartmann, H.[80]の"自己表象"("self-representation")及び、自我(Ego)組織に属し自我の有目的的な機能にとり重要な方向づけを与えるものとしての"自我興味"("Ego-Interests")が大部分意識的な「自己」に近いものとして挙げられる他、Schilder, P.[148)149)] Federn, P.[37)]等の"自己至験"("Self-experience")、殊にFedernの"自我感情"("Ego-feeling")、"自我境界"("Ego-boundary")又、Erikson, E. H.[35)36)]の"自己同一性"("Self-Identity")がそれである。これ等については後章で詳しく述べることとし、ここでは自己心理学的な流れの中での「自己」重視の意味を考察したい。

1) まず「自己」は人格全体に統一性を与えるものとされる。

Stagnerは"「自己」はその中にうまく統合されない至験を除外して人格全体にある一定の姿傾向性を与える。そして人格の中心として人格全体に安定性を与える"と述べる。Lecky, P.[110)]

も、"自己の統一性"("Self-consistency")なる概念を用いて、「自己」の人格全体を個性的に統一しようとする機能を証明して"人が努力する目標は、統一的組織を維持しようとするところにある"としその中核に「自己」を置いている。Rogers, Jersild等も読くところであるが、「自己」は自らの統括範囲内にある至験、即ち自らの構造内容と一致した(congruent)至験はその中にとり入れ蓄積して行くが、自らと矛盾する至験はそれを排除し意識化(136, PP.481-82)しない。これはSullivan(137)(138)の"選択的無関心"("Selective-inattention")であり、又ComboとSnyggの"外界認知の選択と歪曲"である。この作用によって、その時々の外界の状況とは独立した、およそ一定した「自己像」や「自己感情」を存続させうるのであると述べられている。このことは、必然的に

2)「自己」の恒常性乃至は持続性と可変性の問題につながって来る。

SnyggとComboによれば、「自己」は、①安

定した持続性（stability）と②可変性という一見相矛盾した2性質を有するものである。[153, pp83-96] そしてこうした2性質の背後には，Snygg, Combs, James, Jersild Lecky等の述べる“自分自身の「自己」を維持しかつ高めたいという基本的欲求（basic need）”又，“自己開発（self-seeking），及び自己保持（self-preservation）という基本的欲求”が考えられている。[90, pp307-308] 従って「自己」を維持し存続する傾向は，先述した統一的作用とSnygg, Combs, の説明する“あらゆる組織体が持つ一種の慣性”[153, p85] によるものと結論されるが，それのみならず，一面変化しうる性質のものでもあり，発展的成長的な方向への可変性として，「自己」のもう一つの性質が論じられ，“行動の変化，人格変化を起させるには，自己概念の変化を生ぜしめるのが最も効果的でてっとり早い”[110] ことになる。ではこの変化はいかにして生じるか。それは，“社会から期待されている自己のあり方と現実の自己との違いを自覚することにより

又，自己にとって異質的な至験を敢て受容することによって起る。"[150, pp92-93] 又より詳しくは，"「自己」が自分に合わないとして至験を意識から除外している状態，即ち不一致の状態（incongruency）にある時に生じて来る不安を一つの信号（signal）として受けとり，その不一致そのものを自覚することから，その至験の受容を果し，意識に象徴化（symbolize）して「自己」の枠を拡げる"[136, p510-515]と云う形で生ずるのである。これは広義の学習と成熟の過程として考えられるであろう。しかし，かいる成長的な「自己」の変化は決して容易に生じるものではなく，もう一つの特性である存続傾向がこの変化にとってブレーキにもなっており，かいる変化に抵抗しそれを強く防ごうとして発達させるのがいろんな防衛型である事も述べられる。

3）「自己」は上の二性質を担い乍ら，人格の中心に位してその行動に指針を与えるガイドとしての役割を果している。即ち，個人は

自らの「自己」を唯一の枠組とし基準としてすべての行動を，或いは少くとも努力して行こうとする大切な行動のすべてを起す。(「自己」によらないで起す行動に言及する自己研究者もいるが，それ等の行動はおおむね周辺的なものと考えられている[150]か又は，その個人にとって脅威や不安を与える様な有機体的反応と考えられる。) 従って行動全体にある統一的な一貫性のある姿を与えしめる。しかも，ただ単に指針を与えるのみならず，〃行動をその方向に向けて統制し，かつ活性化する(energize)。非自己的動因よりも一層効果的に行動を導く(motivate[150])。〃そしてこの様に自己を維持存続させる方向のみならず更に，「自己」をより高め開発させていく方向へも個人を動かしうるのである。そして，

4) 人格の適応性と「自己」のあり方との関係は次の様に結論づけられている。

Rogers[27], Combs[92], Snygg[110], Jersild[135], Lecky[136][153][168]等の説をまとめると，人格の心理学的適応にとって

あるべき「自己」の姿としては以下の様な事項が要求されることになる。

① まず、現実全験がすべてできるだけありのままに認知され、意識から排除されないこと。即ち過度な防衛がなく常に新しい全験に対して開かれており、現象的場自体においても「自己」が、ありのままの自分をできるだけ漏れなく正確に写し出していること。

これは換言すれば、自己客観視、洞察的自己把握の問題であろう。Rogersによれば、有機体(organism)の感覚的、臓器的全験の中で、現在の「自己」組織とそのまま一致しえない全験をも知覚し吟味して、意識への象徴化(symbolization)[136, p515]が包括的に正確になされることであり、有機体の全験と「自己」との不一致によって生じる脅威(threat)や不安が処理されうることにあたる。Gross, L.[73]は自己の洞察的把握(insight)を、"それを受けいれることが情緒的に抵抗をもたらし、又自尊感情に反するものであっても、自分の中にある特

性又同時に欠けている特性をも意識に許容することである"と説明している。又この自己客観視に関しては，allport[6)9)]やadler[1)2)]等もその重要性を論じている．

②その様に意識的に象徴化された全験が「自己」とできるだけ一致しうる様な，広くかつ柔軟性を有した「自己」であり．そう云う「自己」が全体として受容され．肯定的に価値づけられていること．

これは，自己受容．自己尊重の問題であり．これは「自己」のあり方として，適応上．最も重視されている点である．Rogersの"十全に機能する人[137]"，Combs[27]等の"適当な(妥当な)人柄"(adequate person)の不可欠な条件としてこれを挙げているのはもとよりであるが．Jersild[92]も．①及び②は．現実の自己が有する潜在的資質を発達させ．生活全体に調和した統合的な形で個人がそれを用いることを可能ならしめるものであり．健全な自己愛．自己受容は精神的健康にとって不可欠な条件だ

とする。その他新フロイト派のHorney[87]は、神経症が補償的に形成している"仮幻の自己"(idealized self又はpseudo self)をとり除き、ありのままの自分に直面させ、"真実の自己"(real self)の成長を促進することを治療理論とするが、そこで、ありのままの現実の自分に対する尊重の念を重視している。又Adlerも自分の状況を正しく詳細し認識することから優越・重視を求める努力を生産的に発現させて、劣等感情を克服し自信(self confidence)を得る方向に動いていくことを適応的成長とみている[163]。これ等は、この自己受容、自己尊重の問題に関連づけられうるだろう。

③上の自己受容の中に社会性の問題が付加される。即ち、次にも見る通り自己の形成を考察すれば、自己の中にはすでに対人的社会的要素は包含されているわけだが、「自己」がただその個人のユニークな枠組であるのみならず、それが本来社会に向けて開かれたものであることが、ここで再確認させられる。即

ち自己肯定が，単に孤立的個人の枠内に止まるのでなく他人と共なする社会的存在としても，好ましい価値のある人として肯定視されていることがそれである。[27]

これ等の3要件に纏められるものを「自己」が備えていることに人格の適応が帰せられており逆に人格の適応は「自己」の中にこの様な形で反映されているとも云えるわけであろうが，上の3要件中最も多くの人々によってとり挙げられ理論的実証的研究の積まれているのは②であり，③を特別にとり挙げている人は最も僅かである。又①に関しては実証的研究が自己心理学の枠内ではもう1つ充実した形で行われておらず，方法的にも狭く限られた点や無理があって適応との関係が実証されにくいことはwylie[16](p.275-279)も指摘するところである。しかし，②のみならずこれ等①および③も大切な要件であることは，後の第3章および第4章における考察を通じて次第に明らかになり，これ等を合せることによってよりよく理

解される。

以上，「自己」の人格内における位置とその適応的意義について諸説を参照しながら考察したが，要約すれば，「自己」は個人の行動における唯一の現実的枠組として，人格の中で最も重要な位置を与えられ，特に自己心理学においては，「自己」は中核的な座にあれば君臨しているとも云え，人格全体に統一性を与えるとともに，その持続性，可塑性の鍵を握るものであり，行動全般のガイドとしての役割を果すとみなされている。そしてこうした働きを効果的になしうるための「自己」のあり方についても述べた。即ち，客観性，受容的肯定的価値づけ，社会的適応感が，そのための主なる「自己」の要件となって来るのである。

この様に「自己」の重要性がかなり詳しく論究され，全体としての意味は理解できたが，ただ，これ等が正常な或いはそれ以上に健全な適応機能の方向にのみ志向されすぎている

嫌いがあり、不適応的方向へのもっと突っこんだ考察がほしい気がする。即ち、例えば、「自己」の持続性、可塑性の問題に関しても、不適応的「自己」に固着せざるを得ない様な閉鎖性、又可塑性についても、後退的な変化の起る可能性、むしろ後退することによって辛うじて安定を保つより仕方がない様な状況についての考察なども必要ではないかと思える。この点本研究では、自我心理学の面から、この方向への理解を補うことにする。

〔3〕その形成について。

「自己」の形成については、かなり大雑把ながら、自己心理学的説明がなされている。

まず、「自己」の源を先天的に求めるのではなく、対人関係を通じて発達する社会的至験的所産と考えている(12)92)135)。そして、乳幼児期における養育者(mothering one)との関係の重要な至験から、その後の対人関係の拡大及び深まりを通じて、社会的文化的環境の学習とともに

に形成されるものだとする。勿論、その他に生れつきの素質も無関係ではなく、更にその素質の発達がかかわって来るとの考え方も含まれてはおり、例えば、Jersild は知覚、想像力、概念化、価値の評価等の諸能力とその発達も、「自己」の発達を規定する諸要因だと述べる。しかし、社会・文化的環境との相互作用がもたらす影響力の方をより大きく考慮するのが全般的傾向である。この様な観点で、自己概念発達のための重要な基盤やその大雑把な過程に関しては次の様な考察がなされている。まず、「自己」発達の大切な基盤となる時期は乳幼児期の前言語的段階(pre-verbal stage)に始まる(43)。身体的経験がそれであり、他の人の体と異なった自分の体の認知、身体像(body image)或いは身体的存在としての自己概念(a conception of his physical person)がその出発点となり、これが自他の区別のはじまりとして重要な意味を持つ(157)。この様に前言語的段階ですでに自己概念の形成が開始

されていることは、子供の行動から、子供自身が自分で何かをやり遂げた時に喜びの表現を観察できること等から確かめられると述べている[12, p345]。その後言語が発達するにつれ、「自己」形成は進むわけであるが、それがどの様にして行われていくかについての典型的図式ともいうべきものが、最初の重要な他人(significant other)即ち養育者との関係に見られる。子供の行う自然な欲求表現は養育者によって必ずしもすべて受け容れられるとは限らず、"良い"(good)或いは、"いけない"(bad)のいずれかに分類される。"良い"としてくれる時の養育者は"良き母"、そしてその時の自分は"良き私"(good me)となり、これは是認と優しさの至験、換言すれば所謂"ユーフォリア"の状態でもある。これに対し、"いけない"とする養育者は"いけない母"、その時の自分は"いけない私"(bad me)となり、この方は、否認と緊張・不安の至験である[12, p73]。これは、Combs[27]によれば、"適当さ"

(adequacy)の至験．〝不適当さ〟(inadequacy)の至験となる。この二つの両極的至験がSullivanの云う安定への欲求(security-need)に結びつき，「自己」形成，人格形成の全過程を貫いて行くことになる(158, p6)。特に前者の至験は自己発達の母体となる重要なものである。これに対し，後者は，前者に対してこれの対置されることが，自己形成に不可欠な意義を持つものではあるが，前者に比してこちらは意識化を拒否される傾向がある。そして又，その至験が再生されることも仲々困難だと説明される。これ等が先にも述べた〝選択的無関心性〟でありそして，〝意識の分離(dissociation)〟である(157)(158)。この二つの作用によって「自己」は一応の安定を得ているのでもある。

この様に「自己」は，養育者及びそれ以外の人々をも含めた家族内の人間関係，近隣－学校－社会等の諸集団における友人同僚から年長及び年少者そして異性等との様々な人間関係を通じて，身体的又心理的な成熟の過程に

沿って段階的に形成されて行く。現段階がどれ程望ましく充実した形で成就されるかにより次の段階における成長が規定され，その意味で乳幼児期など極く初期の対人関係のあり方は極めて重視されている。(27, pp134-144)（但しこの点に関する詳しく深い理論的掘り下げは主にネオフロイディアン等精神分析学派の領域になる。(163)(164)）結局，「自己」の形成は素質的特性やその発達に規定される面を無視することは許されないが，対人関係を通じての社会的文化的価値づけにより次々肉づけされる形で進んで行くものとして理解される面が大である。

以上，「自己」について，その研究に関する全体的な歴史の流れ，「自己」の内容ほび理解の諸観点，人格内の位置づけほび適応的意義そしてその形成の各問題点から諸理論をまとめて考察した。本研究で「現象的自己」と名づけた概念は，各箇所でその意味内容を規定した通りであるがもう一度まとめて見ると以

下の通りである。

まず、「現象的自己」という呼び方は、これが、Jamesに始まる厂史性を有した一般的な用語であることから採用したものであり、この語を用いている幾つかの研究の中特にどれかの理論・概念規定をそのまゝ当てて用いたものではない。

意識化の度がかなり高く、かつ周辺的よりは中核的であるところの、自分自身に関する平均的な自覚のあり方をこの「現象的自己」は指している。これに含まれる内容は、結局その個人の存在(being)及び機能(function)全般であるが、次中に人格機能そのものについての自覚のあり方に焦点づける方向に研究を進めた。又研究の観点としては、[2]で述べた如き適応的意義を問題とし、〝現実的自己〟〝理想的自己〟の二つから自己評価のあり方をとり挙げて、これを自己受容乃至は自己肯定性と自己把握の客観性の側面から主に検討することにした。但し、これは後述する如く

「自我機能」の研究と合わせて行うものである。

結論として，自己心理学的立場からすれば，「現象的自己」が個人の行動における唯一の現実的枠組として人格内で最も重要な位置づけがなされており，これが適応上決定的な役割を果すものとして，適応研究上最も重要な枠組であると考えられている。この様に主に正常な人格内で，「自己」が果している積極的な役割については一応明確化されているものの，それでは不適応者の肯定的な或いは不正確な「自己」がどの様にして生じ，又それが人格全体に対して有する機能連関がどの様なものであるかについては余り論究されない。結局，適応，不適応が，直ちに，「自己」なる意識的現象像に敏感に反映されたものとして把えられており，あくまで現象的関連性が検討されようとするにとどまっていると云えよう。勿論これは現象学的接近法に添った研究法の特徴であり限界[51]であろうが，「自己

」を客体として生せしめている主体的過程については、大よそ「自己」と区別されるべきものとして言及されながら、2つの機能的関連性については十分触れられず、漠然と、執行者(doer)的なものが背後にあると考えられたり、或いは主体的機能が一種の動因概念として片づけられているのがせいぜいである。ところが一方では、先述したように、比較的最近の傾向として、無意識的な防衛の作用等を問題とし、そうした要因に左右される以前の無意識的自己の把握に関心が寄せられているが(27, pp439-466), (67, pp250-258)、自己心理学的立場から理論的研究も不備なまいにこのような方向に進むのはどうであろうか。事実方法上の問題や実験結果の解釈上の問題で(67, p274)、この研究にはあまり捨りがみられていないが、私自身は、「自己」の問題を現象学的接近法と呼ばれるやり方の一つの大きな利点である"個人にとっての至験的な現実性"の理解を重視する立場をとりたい。従って、「自己」に関しては、上述したように、あくま

でも意識的なものを問題とし、又別の枠組から主体的機能についての詳細な検討を試みたいと思う。

〈第3章〉「自我機能」について.

〔1〕「自我」概念発展の歴史的展望

「自我」即ち人格の主体的な機能について最も本格的な詳しい研究がなされたのは精神分析学派によってである。そこでは多くの実践的理論的研究の歴史が積まれ詳細な解明が試みられつゝ、今日の自我心理学(Ego. Psychology)に到っている。尤も、Freud, S. の仕事は主に精神の無意識内容や衝動のあり方の究明を中心とし、それに比すれば自我は第一義的に重視されず研究が相対的に遅れた点が認められるが、ここではそうしたFreudの業績の中でとくに「自我」の研究に焦点を合わせ、それ以来の自我概念発展の過程を概観し整理しておきたい。

精神分析学の発達に関する歴史的研究はいくつか見られるが[78) 79) 132) 163)]、それを「自我」に焦点づけて行おうとしたものは少数で、主に、Hartmann, H.[76) 79) 80)]、Rapaport, D.[132)]に代表されると思う。両者はそれぞれの仕方でFreudによる「自我」研究をほぼ3段階に分け、更にその後の発展、現段階における自我概念を説明しているが、ここでは両者の段階わけを参照してまとめてみる。

第I期

1887年頃から大体1900年に到る以前の段階で、ここでは自我機能(Ego)がいくつか偶発的に記述され、Hartmannも述べる如く、Freudの自我研究の萌芽期ともいうべきものであろう。しかし、ここでは、「自我」はまだかなり未分化であり、人(person)、他人に対する自分自身(one's own person)、意識等時としていくつかのものを指した[18) 48)]。たゞ、自分についての自覚(awareness)という現象学的な意味には用いられず、その後もFreud

は自分についての主観的経験は自我の機能によるものではあっても自我そのものではないとの考え方をとっている。又Freudは当時すでに哲学的用語として、主に、意識とか自由意志とかいった意味あいを担っていたこの語を臨床的経験と直接につながりにくいものとして引用符つきで用いたりもする[80, p282]。"結局まだはっきり定義されない"ら、自我は生理学的には'神経の集合体'(a group of neurones)又心理学的には'観念の集合体'(a group of ideas)と考えられた。その機能に関しては、防衛、現実吟味(reality testing)、知覚、記憶、思考、注意(attention)、判断(judgment)がごく大雑把にとり挙げられたが、この中彼は防衛の機能に最も注目した[48]。即ち当時の考えでは、個人による外的現実(external reality)の把握がそのまゝ、観念の優勢な集合体(dominant mass of ideas)即ち意識となってなたするが、これと矛盾する経験はすべて意識から分離され、記憶・想起が不可能になるとされ、又その経験

に関連する感情(affects)は外的現実ばかり当人の意識に受け容れられない苦痛に満ちたものとして溜り、"不安"を形成すると述べられている。これは当時、Breuer, J. 等と共に盛んに行ったヒステリーの臨床的観察や治療を通して主に得た発見であり理論づけである。[18] たゞ受け容れられずに溜って行くものが感情であり衝動備給(drive cathexis)でない点は現在の自我心理学と異なるが、外的現実の重視や、防衛自体が無意識的に作用することへの洞察がなされていたこと、又一次過程二次過程の区別が行われ始めていた点等が注目される。この様にFreudの自我研究の萌芽を可能ならしめたものは単に臨床至験のみならず、心理学、哲学による影響がHartmannによって指摘されている。即ち、極く簡単に云って、Herbartから主に"抑圧"(repression)の概念を、Schopenhauerや Nietzscheから無意識過程に関する考えを、Breuer, Janetから無意識の防衛機制を、Meynertから一次過程二次過程、自我形

成，自我の統御機能等広汎なものを含んだとされている。[80, p275)]

第II期

1900年頃より1920年過ぎまでにほぼ相当する。第I期では外的現実を云わば不動のものと考えていたが，分析経験を重ねるに従い，患者の報告が現実の経験ではなく空想（fantasy）である場合を発見すること等から，その空想を生ぜしめている機構（agent），ひいてその活動過程に興味を転じ，その結果本期最大の特徴である本能的衝動（instinctual drives）の発見と研究が行われることになる。即ち簡単に触れると1910年頃までは殆んどリビドー理論（性衝動のエネルギー）に終始し[49) 50) 51)]，このことからFreudの理論全般が汎性欲説（pansexualism）と見做されてしまうほどであるが，この性本能（種族保存本能）を極めて重視する第一次本能理論[51)]の中にも，もう一方に自己保存の本能と称し自我にかかわる本能的衝動の概念を[51) 54)]

対置させる。但し後者は人間にとり無害であるのみでエネルギー的にも規模の上でも弱小なものにすぎない。しかしその後1914年から1918年迄にかけて多くの戦争神経症を治療の対象とすることから、性的衝動以外に破壊乃至は死の本能に基づく攻撃衝動を考え第二次本能理論を展開しようとする。そして旧本能理論から快楽原理(pleasure principle)を後者から反復強迫の原理(repetition-compulsion principle)を発展させ、この2つによって人間の行動を説明しようとしたのがそれである。[52] この様な本能的衝動理論の陰になり乍らも、「自我」に関する研究は前期よりいくらかでも進んだ形で認められる。それは、1)二次過程(secondary process)についての概念,[52] 2)現実原理(reality principle)[52][53] 3)抑圧過程(repression)[55]に関する研究である。

1)、これが後の自我心理学への発展にとって持つ意味は防衛の概念と同じく極めて重要とされるが、現実関係(reality relation)をつか

さどり本能的衝動に課題を提する意識的過程に他ならない。自我がこうした過程に従って機能し衝動に対し意図的有目的々な働きかけを行いうると云う後の理論的展開のための基礎的考えをここでうかがうことができる。

2) 1911年の論文[52]でFreudはリビドーが快楽原理により一次過程で活動することを再び強調する一方、自我はむしろ現実原理に従うことを指摘し、現実に適うため現実吟味を行うとともに統制的な働き(control)をすることに触れている。

3) 抑圧過程を分析し、これを精神エネルギー的又力動的な観点から、現在の自我心理学における様に意識にとどまるだけのエネルギー充当が減退して無意識に後退してしまうことであり、前意識的備給(hypercathexis)が後退しその問題となっている衝動に対する反対(逆)備給が永続的に確立されるものと考え、更にこの反対備給が対抗的に働く作用も無意識的だとした。[55] (註 hypercathexisは過重或いは過剰充当と訳されることもある.)

この様に自我に関係したいくつかの重要事項が研究されたが、この期の自我は衝動に対抗する有力な独立的執行者（doer）としての役割を十分担ったものではなく、むしろ本能的衝動の紅星とでも云うべきもので時には衝動の影にかすみつつ、現実原理の影響下に辛うじて受動的闘争を試みる程度のものに考えられていた。ただこの期には自我も衝動やリビドー的な面とのつながりにおいて理解しようとする所が前期の自我概念と根本的に異なる点とされる。即ちこの期にFreudはリビドーの発達を段階的に詳しく研究したが[52]、そのリビドー発達の継起に従って自我も現実吟味の機能等を次第に発展させていくことに触れており、これは彼の門下のFerenczi, S.[40]によってもより詳しく研究されようとした。Freudが、ナルシシズムに関する理論[54]で、"自我本能"（Ego-Instincts）や"自我リビドー"（Ego-libido）の概念を提示した[56]のもこの一連のものと解されるが自我を本能的なものと考え、リビドーやその

他のエネルギーを担いそれによって発動するものとされておりその点現在の自我の概念が中性化された衝動のエネルギーを自我備給（Ego-cathexis）として有するものであるのとかなり似通った面を持つが、現在の概念にくらべれば非常に未分化なものである。衝動と自我との間の葛藤も互に本能的な性質のものが同列で相争っているという風に述べられている。しかし、リビドーの障害が自我のエネルギー的備給（energy cathexis）に影響しその結果起った自我の異常な方向への変容が逆にリビドー過程の障害を二次的に惹起せしめることを精神病患者の分析から洞察したこと[53]。利己主義（egoism）と自己愛（narcissism）の区別及び両者が自我に対してリビドー充足的な形での動因的力（motivational forces）を有すること。又自我は対象に対するリビドー備給という形において機能するが、この対象備給（object-cathexis）よりも自分自身に対するリビドー備給（self-cathexis）の方が先行するとの

考え等はこの期で注目に値するものである。但し後者の自己備給は自我備給（Ego cathexis）と重なり合っておりナルシシズムに関する理論は不明確なものを後まで残している。[80, p287]

以上の如くこの期では本能的衝動面に関する考察がかなり進められたのに比し自我に関しては新しく興味深い研究がいくつか行われ乍らも本能的衝動から分化した独立的なものとしてその組織や機能が概念化されるには到っていない。

第Ⅲ期

1920年過ぎ（大体1923年頃）以後である。1920年を過ぎると超自我概念の導入等により全体的な人格理論が形成され始めた。[58] 1925年頃までは Freud にとって理論拡張の時期だとも云われている。そして1923"自我とイド"[59]において彼は全人格の構造及びその機能的過程に関する理論を発表し，イド（衝動の集積），自我，超自我の各概念を明確化し三

者の力動的関係を明らかにしようとした。その内容はあまりにも有名であり改めて述べるまでもないが、簡単に要約すれば下記の様になる。即ち、構造的には、エス（無意識）、前意識、外界につながる意識の3領域が考えられ、快感原則を担った衝動の集積であるイドはエスの領域で云わば沸きかえる興奮の総体の如き様相を呈して存在し、自我は無意識から意識の領域にかけて、又超自我はエス領域から自我の領域にまたがるどこかある部分を占めて存在する。この三者の中で自我はイドと超自我そして外界の現実を調停する働きをつかさどるものであり、イドがその本能に従って欲求を充足させるべく自我領域に侵入しようとすれば、それが超自我によって許容されるか外界の現実に適合するかを検討し危険のない限りにおいてそれを認め運動機関を道具として使用することにより欲求充足を果させる。だがかかる危険のない程度ということが現実には非常にむずかしく、大抵の場合、

自我は、イドの快感原理を至上命令の様にした執拗な強い攻勢と超自我の厳しい管理，更に外界の現実的要請という3者の力関係の中でもまれ続け葛藤状態に身をゆだねているとされ，衝動を外界の基準に適合した形に昇形して解放するという積極的な解決策を生み出し得ない場合、抑圧．制止（inhibition），反動形成（reaction formation）等の防衛機制を衝動に対して行使すると証明する。

又3者の発生及び形成を概略すると、まずイドは人間誕生の最初から存在し云わば生命的エネルギー発動のための発電装置の様なものである。（生物学的色彩が強い。）これに対し、外界との接触即ちまず身近な人（養育者）等への同一化により欲求充足のための現実的手段を学習することから自我形成が始まり意識領域も次第に形成される。又この自我形成とほぼ同じ時期に超自我もでき始める。つまり、欲求充足の現実的手段の中には文化的規範，社会的価値基準が含まれ．これが両親

のしつけや訓練を通じ、厳しい両親像等として具象化され、同一化の形で個人の中にとり入れられ、この様に内面化された社会的モラルが一体となって超自我が形成され、これはかなり複雑な形で死の本能に通じる破壊的な厳しさで以って自我を拘束する。

以上がこの段階での自我とそれをとりまく精神的諸構成要素との間の力動的又構造的な関連の大雑把な点であるが、ここでの自我概念の不十分な点として Rapaport, D. は次の様な指摘を行う。[132, p9)]

① 自我は依然として、イド、超自我、現実の諸力に結果される合力的なもの（resultant）であり又衝動を馬と例えるなら自我はその無力な騎手として馬の望むところに進むことを余儀なくされる存在でもある。[59, pp82-83)]

② イドについてはある独立した遺伝学的基盤が与えられているのに対し、自我はイドから分化して来たもの以上に与えられていない。

③ 又、イドに含まれる性本能的衝動（リビド

ー）や死の本能（タナトス：Thanatos）的攻
撃衝動[57]に関しては、その変遷（特に前者についての）が理論的に完明されているのに対し、自我発達については、漸生説的（epigenetic）な概念化がなされていない。
④自我の持つ防衛機能があまり一般的な理論として十分展開されていない。
⑤意識の構造的概念化が十分もりこまれていない。

こうした諸点が挙げられていたが、1925年以後になると次第に自我概念も充実する。まず不安に関する考察がすすみ初期の不安の概念と大分異なり、自我が不安の唯一の座（seat）だと考えられる様になった。即ち、自我、イド、超自我、外界の関係によって不安が生じてくるとこの不安を自我が危険信号として用い主導的に防衛を行う[61]。更に、発達が進むに従い、受身的に至験した不安を適応のための予見として能動的に用いる様になると述べる[61)63]。自我は従来の様に過小評価されな

くなり，衝動的なエネルギーを用いて（但しそのエネルギーをそのまゝ用いるのではなく非性化（desexualize）或いは非攻撃化（deaggresivize）の形に変容して）自我は独自の機能を果すものであること．自我が称々な防衛を掌把しており衝動によって促進される行動が現実との関係を危険にする時衝動に対する手段として，それ等を無意識裡に行使することと等を理論化し，防衛機制を自我の働きとして正当に位置づけた。[61] 又後に自我心理学において明らかにするところであるが，自我は自らの目的追求のために，単に現実原理のみならず快感原理を用いることを指摘しているのも興味深く，第II期では本能的衝動の方に中心的役割を譲っていた外的現実（external reality）が再び重視されるに到った。[61][62] 結局この段階においてFreudはこれまでの各期に試みた概念化を最終的に達成したとも云えよう。即ち自我は現実と本能的衝動或いは超自我との関係において，単に諸力の調停者ではなく調和的な

解決をもたらそうとするものであり、より大きな独立性を持った執行者（doer）とされる。[64)65)] 二次過程や現実原理についても更に考察が進められ、自我は主に現実との関係から発達するものではありながらもそこに生れつき存在する生物学的基盤も大雑把ながら仮定され、自律的統合機能（synthetic function）も暗示された。[61)65)]

Freud, S. はこの様に自我の概念化を発展的に果して行き第Ⅲ期において一応最終的段階に達したが、この期の完成は Freud, A. によってなされたと云えよう。[66)] 即ち、彼女は精神分析学の理論的実践的興味をはっきりと「自我」の機能そのものに据えた。深層のエスや超自我の内容及び力動性（dynamics）の理解はそもそも自我を通してしか行われ得ず、心的過程はすべて自我がかかわることにおいて展開する。従って精神分析学はもはや深層心理学ではなく自我研究の学問であり、精神の構造や過程は自我に焦点を合わせることによってお

のづから最も有効な形で理解されうることになった。そこで綿密は「自我」について防衛の概念を詳細にしかつ組織化するとともに、自我にとって感情(affection)が有する役割を研究することにより Freud, S. が精神分析学的自我心理学のために敷いた基礎を拡げた。

以上、概括的に、Freud 理論における「自我」概念の発展過程をみた。精神分析学の専門的用語は殆んど説明を加えないままに用いたが、次の自我心理学理論のまとめの所で必要に応じ適宜簡単に説明しておく。

[II] 自我心理学における「自我」概念のまとめ

精神分析学における「自我」重視の必然性が認識されたが、Freud, A.[46)47)] により方向を定められた「自我」研究は、その後約30年間に、Hartmann, H.[76)77)78)80)81)], Rapaport, D.[128)129)130)131)], Kris, E.[105)106)], Federn, P.[37)], Loewenstein, R. M.[81)], Erikson, E. H.[32)33)34)35)36)], Jenichel, O.[38)39)], Schafer, R.[146)147)], Nunberg, H., 等により進めら

れ、自我心理学（Ego Psychology）として現在に到っている。これはもともと正統派精神分析学（フロイド流）に属するものである故、新フロイド派や、上の第II期に出たJung, C.G.やAdler, A.等初期の傾向者の理論の様に分派したはおらずフロイド理論を正統的に基盤とするものではあるが、これに属する上記の如き各研究者の理論内容を見るとかなりのちらばりがあり[163][164]、具体的に分派した理論と重なる面もかなり有しており[100]Klopfer, B.もJung派理論との比較において指摘するごとく、自我心理学の諸理論を綜合すれば、他派の理論と近似したりあの普遍的な、人格機能に関する理論が描かれて来る様に思える。それだけに自我心理学における諸理論はかなり統一性を欠いており整理が容易ではないが、現段階における「自我機能」の考えを一応ここでまとめておき、本研究でとりあげる「自我機能」の概念の明確化を試み、問題点をしぼりたい。上に掲げた様な人々による自我の諸研究を

私なりに綜合してみると，それ等は次の様な諸側面から行われていると考えられる。

1）力動的側面　2）発生的（genetic）及び形成（formation）的側面　3）構造的側面　4）エネルギー至済的（economic）側面　5）心理－社会的（psycho-social）発達の側面

大体これ等の諸側面が，適応及び心的健康（mental health）の観点から考察され，正常者から精神障害にわたる対象範囲について理論的展開がなされている。上の5つの側面は必ずしも整然と分類し得るものではない。互に重複し合う場合が多いので以下の説明も十分整理のついた形ではなく，時には繰り返しや，又いくつかの側面をひとまとめにして行っているものが含まれるかも知れないが，要点を述べてみる。

1）力動的（dynamic）な側面

自我により独立的そして能動的役割が附せられるに到ったことはすでに述べた通りである

が，本能的衝動（性的衝動と攻撃的衝動をやはり一応二本柱として考えている。）が，自らの主として生物学的な生命実現のために活動し現実的に欲求充足を果すに到る過程において超自我ほど外的現実の要請を考慮し衝動の目的遂行のために妥当な手段を行使するのがこれである。従って自我はエスの中に存在するいろいろな衝動（これは後の構造的側面においても再び触れることであるが，衝動は最も生々しい形においてただ2種類なだけではなくて，次々と衝動の派生物 —— drive derivatives (80) (129) ←—— が生じ各々の派生衝動が自らの欲求充足を求めて自我を刺激する。）を常に全面的に受けいれその発現を見守るのではなく衝動を操作しており，それによって超自我，現実との均衡を得させる。この操作が無意識的に行われる防位であり，従って防位は葛藤状況に置かれた自我のとる病的な非常手段ではなく，正常な自我が衝動に対処する手段であり，自我組織を形成して行く上で不可欠な

ものとされる。そして防衛の型についても、Freud, S. の様に抑圧のみを重視するのではなくいくつかを分化させ詳述する。その主なものは、① 抑圧 (repression) ② 拒否 (denial) ③ 逃避 (escape) ④ 退行 (regression) ⑤ 分離 (isolation) ⑥ 仕切り (compartmentalization) ⑦ 反動形成 (reaction formation) ⑧ 打消し (undoing) ⑨ 投影又は投射 (projection) ⑩ とり入れ (introjection) ⑪ 合理化 (rationalization) ⑫ 観念化 (intellectualization) ⑬ 置き換え (displacement) ⑭ 昇華 (sublimation) 等である。(46), (70), (100), (146)

これ等の詳しい説明は有用するが、②, ⑨, ⑩ 等かなり原初的 (primitive) で未成熟だとされる型のものから ⑫, ⑬, ⑭ 等かなり高等な又 ⑭ 等理想的型のものが型別に大雑把に比較されたり、又、④, ⑤, ⑦, ⑫ 等を強迫的防衛機制 (obsessive-compulsive defense mechanism) として一括されたりするのを見るが、(146) 答えどのものが、自我形成過程を通じ一時的にしろ或いはかなり持続的にしろ出現する可能性があること、

又そうしたいろんな防衛機制の行使が自我形成に参与し、結局、エネルギー全済の所においても触れる様に、あまりにもある型の防衛が自我形成途上で持続的に用いられすぎ多量の精神エネルギーを消費しつゝその個人の中に強く固着してしまうと自我が疲弊し以後の発達が制限されたり生産的機能が障害されたりする結果になるがこの様にあまり盛んに用いられすぎず、防衛がむしろ一時的な形で成功的に用いられるとそれにより自我機能が豊かに発展していく。例えば、拒否は乳幼児期にこれが用いられる場合は、外部の条件が快的なものから不快な或いは苦痛の方向に変化してもそれを無視し相変らず快的状況が持続しているものと防衛的に思い込むことにより欲求充足を自分に適った持続的な形で得ることができ、それによって自我発達のための土台となる基本的安定(basic security)(3.6) (80) (100)を達成できることになる。又投影も、妄想等の病態化傾向のみならず、社人的共感性や敏感な

現実吟味(reality testing)の能力にかかわる面を，とり入れは，破壊的衝動発現の阻止のみならず同一視による社会的適応法の獲得を可能にする面を，更に観念化は情緒の締め出し，エスとの内的疎通性の遮断のみならず論理的思考の発達を促す面を有する等，いろいろと積極的な意味を有している。この様に，防衛機制は本来否定的な意味あいのものとは毛頭考えられていない。たゞ，Eissler, K. R.[30]も述べる如く，"防衛機制は自我を保護するか破壊するかいずれかの道をとる。"わけであり，云わば両刃の剣とも云うべき性質を有し結局成功的(succesful)に用いられるか不成功な使用に終るかの観点から問題とされて来るわけであるが[84)100)146)]，この点は2)でも述べるところの，生れつき遺伝的に備わった自我の一次的な自律装置(primary autonomous apparatus)の働きの成熟と生活史を通じてかかわって来る環境的条件との力動的関係によって規定される

20×20

上の様に、衝動の発現をそのままの形では認めない環境に対して、自我が、その環境から否定されることにより不安や恐怖が生じたり精神内界に葛藤的緊張が生じるのを避けるために衝動の側に防衛機制をいわば安全工作として構じ、その結果環境への適応に成功することによりその防衛機制は適応的な合目的性を獲得して自我の自律的機能に転じる。これが 2) および 3) でも述べるところの、自我の二次的な自律の機能 (secondary ego autonomy) であり防衛と適応の両目的を同時に遂行するが、Hartmann, H.[77) 80)] によれば、この様に、環境に対して自分自身を変化させることによりどちらかと云えば順応的適応を果すやり方 ("fitting in", "Autoplastic") のみが人間の適応様式ではなく、同時に環境そのものを適応的に変化させ自分自身の独立性を恒常的に維持する能動的な面 ("Alloplastic") をも有するとする。この後者に関係の深い自我機能が、やはり後述するごとく、一次的自律機能であり、一次的な自

我の自律装置が内的に成熟して行き乍ら同時に環境からの肯定を受けることにより一層発達を促進され安定した反復的自動的な機能となり、前者とは異なり、後天的な葛藤至験とは本来的に無関係な形で発展して行き能動的適応を果す上で重要な役割をする。勿論、先述した通り、この一次的自律の機能は二次的自律の適応機能の発達にも自ら加担しているわけであり、この2つが自我の力動性にかかわっている。

しかし、自我の力動的働きとしては、これ等適応的自律性の確立（automatism）ということの他に、随意的に柔軟な弾力的機能をとりあげねばならない。これは構造的側面と密接に関係するものであるが、Kris, E.[106] Schafer, R.[107]等による"自我の働きに基づく一時的、部分的な退行"（"temporary and partial regression in the service of Ego"）及び、"精神機能のレベルの移動"（"Shifts in the level of psychic functioning"）の概念によって説明される。

ここでは Freud, S. の如く意識，前意識，無意識と云う局所論的見地に立たず意識性（awareness）と云う考えを用い[131]，無意識から意識までを連続的なものと見做しており．健康な自我は適宜自在に自らの連続した層的組織のいろんな段階における機能をなしうると考える。後述する如く，二次過程的な機能から，一次過程の方に一時的に退行して機能し再び二次過程に戻って退行状態から現実水準への回復を果す。殊に創造的思考が行われる過程では必要条件と考えられており．Freud, S. も芸術家の創造性に関して既にこれに触れていた[52]。大切なことはこの退行が非可逆的永久的な退行ではなく，一時的なものであり・根本的には自我の制禦下にあって，再び二次過程の方向への移行（progression）を伴ない自我の生産的機能にプラスすることである[106][107]。退行によって生々しい原始的な衝動に触れ，それを生産的機能のための本能的源として利用し，自らの統制下でそれを解放せしめる通路を与え

二次過程によって社会化され洗練された枠づけを行うと云うことがすべて自我の機能的過程に属するものでなければならない。これは又，成熟した情緒を伴う生産的仕事による自己実現（self-realization）[60]に他ならない。これをどの程度行いうるかが，自我の力動的均きの健康さ，能動的適応性の基盤として重要な関係を持って来る。自我の行使する防衛機制が衝動を押える上に効力を持たなくなると，衝動に巻みこまれた形の退行を行ったまゝ上への移行（progression）が不可能となる。又，衝動との間に葛藤的緊張を持ち続け常に防衛をゆるめることができない状態にある時は，自我が随意的に退行して下層部と疎通を計る裕り等なく自然な衝動になじむことは自我にとって非常な危機をもたらすか敗北を結果することにもなりかねない。前者は自我の健全度が相当ひどく損われて精神病的な病態化に向う場合と関係が深いか，防衛法としては投影や拒否又はどい強迫的機制等が最後のあが

きとして行使されたりする。後者には抑圧や観念化等の極端な形が関連づけられ内的疎通性の著しい制限や拒否が認められる。Rapaport, D. は、"環境からの自我の自律性を保護するのは衝動に他ならず、他方衝動から自我の自律性を守るものは環境に他ならない"という含蓄ある論述を行っているが[129]、衝動と親密な疎通性を自我が能動的に有することは自分を創造的に実現して行くという積極的な働きと同時に環境から来る様々なストレスやその激しい衝動から自らを守り、常に環境に左右される受身的な被影響性の強い存在であることから個人の独立的自律性を保障する働きをも果すことになる。従って自我のこの弾力的機能は単に芸術的な創造のみならず、もっと一般的な正常で豊かな精神生活或いは行為に関係するものであり、例えば機智やユーモア、新しい事柄の工夫等を可能にする。又、同じくRapaport, D. は"豊かな情緒生活こそ強い自我機能を示す。"[130]とするが、情緒(

affects) とも深い関係を有する。即ち、自我が弾力的に疎通できるということは、自我組織の各層における様々な派生衝動の活動に伴って生じる情緒の様々なニュアンスに通じていることであり、それ等を敏感に受けとめうることになる。[38) 129) 130)] 更に、その情緒を時には自我にとって危険信号としても受けとめることができ、自我の安全性がより万全に保たれうる。

最後にここでもう1つ述べなければならないものに、綜合的機能 (synthetic function, integrative function, organizing function, harmonization 等といろいろの呼び方をしている。)[3) 4) 14) 34) 36) 44) 72) 77) 80) 103) 107)] がある。これは5)とも関係が深く再び触れるが上に述べた様な、対外的、対内的な力動的働きすべてを含みそれ等を統一的に綜合するとも云うべきもので適応機能の最たるものだとされる。これはHartmann, H. によれば、"調和させること" ("fitting together")、"平衡" ("equilibrium") 等とも称され、精神機構の複雑さから、その中にはいろんな種類の平衡が

考えられねばならないとして次の様なものをあげている。①個人と環境との間の平衡，②本能的諸衝動間の平衡（vital equilibrium）③精神諸組織間の平衡（structural equilibrium）④全体的な平衡……②と③は所謂精神内平衡（intra-psychic equilibrium）でありお互に関連の深いものであるが，①もこれ等にかかわって結局3者は相互依存的なものである。④は最も高いレベルの平衡とされ，この機能は自我組織の上ア部の〝自我興味〟（Ego-interests）と結びつけて考えられるが，更に諸自我興味間の葛藤をも綜合しようとするもので適応とは，丈④の平衡即〝真の適応〟とも云える程密接不離な関係にあるとされている。結局，①～③の平衡をつかさどるのはそれぞれの綜合的機能であるが，更にそれ等諸種の綜合機能をも含めた全体を統合する最も高度な綜合機能が④でこれこそ最も典型的な意味での調和（fitting-together, Anpassung, Zusammenhang）だとされる。77),80)
従って平衡にはいろんなレベルのものがあり

又常に破られては再生に向って動く過程的なものと考えられている。従って Hartmann は Cannon 以来ホメオスタシス (homeostasis) と呼ばれているものと似ていることを認め、そのあるレベルを表わすものとも考えている。(80, P329)
この様に平衡のレベルがいろいろあることについては、Menninger, K. A.[103] も正常な水準から神経症更に精神病の種々の段階から最後に非可逆的な破局に到る崩壊の水準までホメオスタシスを各々分数し、又 Beres, D.[14] は綜合的機能に非常に原初的 (primitive) な段階から次の後の自我発達により高度な段階が考えられると述べ、この綜合機能の発達には、他の自我機能の発達 (例えば、衝動の制禦や、二次過程の発達等) が関係するとする。他に、Nunberg, H.[122], Glover, E.[72] も綜合機能に言及するが、全体としてこの機能に関する説明は不十分であり、又諸説間に内容的な或いは機能的レベルの上での差異も認められる。ただ、精神内界および外の環境諸間の平衡を全体的につ

かさどり、統合的な適応を目指す自我の機能を不完全ながらも考えようとしているところは興味深い。

2) 発生及び形成に関する側面

Hartmann は自我機能に2種類の自律性を考える。自我は出生後、発達の最初の段階ではエスと未分化であり、その未分化な母体から次第に分化して発達して来ると考えられるが[81]この最初の段階にエスの本能的衝動とは異なった独立の源が既に存在するとし、これを一次的自律の自我装置[77][81][85][103] (ego apparatuses of primary autonomy) と考える。ここには遺伝的素質(従って身体的素因との関連も深い。)が含まれ、知覚、記憶、知能、運動機能等の他に、感覚、衝動の閾(threshold)が関係して来る。これは個人が生れ落ちた典型的な環境(平均的な、予期しうる環境 — average expectable environment — 換言すれば、その個人をとりまく生物学的、心理的、社会、文化的環境のいわば伝統的パターンの様なもので、細かい差異

や変遷は一応含めないでおく。これに対し、予期しえない環境 —— the average not expectable environment, atypical situations —— が対置させられる。)に対して系統発生的に保障されている適応の手段である。[77, p.23] 最初から葛藤的至験に先立ってな在するものであり、葛藤を解決した結果得られる適応機制と異なるより基本的なものである。一次的装置は出生後の身体的成熟(特に中枢神経組織の成熟)とともに次第に成熟をとげて行き、環境との相互作用を通じ乍ら、学習的に"葛藤外の自我領域"(conflict-free ego sphere)を形成して行く。この様に一次的に自律した自我機能の発達があることにより、エスは外界に対する独立性と能動的適応が保たれる。Freud, S. も1937年には、自我の根源的な個体差が遺伝的素因としてな在することを予見している。一次的自律の自我機能が、生物学的成熟を常に基盤とし、母-子関係という生命的共生の世界及び原初的な人間関係の世界を至験し更

にこの対人関係を拡げて歴史的社会的な世界を至験することを通じて、発達して行く具体的な過程は例えば、Gesell, A.[71] や Spitz, R. A.[154] 等の乳幼児の詳しい観察にみられるところである。

二次的自律性（secondary ego autonomy）は、これにたいして、先天的な自我装置に直接関係なく、先述した防衛機制が適応的に葛藤解決を果すことにより衝動から相対的な自律性を獲得し、二次的に自律した自我装置（apparatuses of secondary autonomy）を作って行き、"葛藤外の自我領域"を拡大する[77][81][85][103]。この様に葛藤状況における防衛機制が転じて衝動の中に再びまきこまれる心配のない、適応的な自律機能に転じることを、Hartmann は"機能の変化"（change of function）と称する[80, p 123]。但しこの二時的自律性は一次的なそれと異なり、衝動の活動と相対的な関係にあるものであり、例えば思春期の様に衝動が動揺する時には一時的に自律度がかなり低下したり又壊れること

も生じる。かいる自律化（automatization）の他に，〝機能の変化〟に含まれる諸側面として．〝中性化〟（neutralization），即ち．非リビドー化（desexualization）及び非攻撃化（de-aggressivization）[79) 80) 128) 130)]が挙げられねばならない。機能の変化は同時に衝動そのものを生々しい形からより中性的な環境に対してスムースに発現していきやすい形に変容する仕事を果していることにもなり、従ってそうした衝動の活動に伴って生じる情緒（affects）も衝動の変容に応じてより中性化されて微妙さ繊細さを増し所謂洗練された形に変容する。この過程を Fenichel, O.[38)] は〝taming〟と呼んでいる。この様に中性化，自律化の過程を通じて自我は，衝動を自らの機能に役立ちうる様変容して自らの目的に使用しうるように次々と エネルギーの貯蔵を行って行く他，衝動の圧力から相対的に独立した適応機能を自動化して備えて行くこれ等が一次的自律の自我装置と絡み合って発達的に 2 的な自我組織のヒエラル

キーを形成して行く。ここで大切だと思うのは，衝動が中性化され，エネルギー的に自我に備えられて行くのみならず，中性化された衝動はもとの衝動の派生衝動として自我組織の中にとり入れられ，各々自我にとっての動因（motives）となって行くことである。[7) 80) 129)] これに関して詳しくは構造的側面に関連づけて述べる。

こうした自我組織の形成について個人差は如何なる点から生じるか。それは結局，一次的な自我の自律装置の違いと，個人をとりまく生物的心理・社会的環境の特殊性及びそれとのかかわりあいにおいて生じる圧験の違い（ここでの圧験とは精神内界におけるもの及び対外的なもの両方を含む）によって説明されよう。そして一次的な自我の自律装置の発達的成熟は生物学的基盤によってのみならず，対環境との関係における学習的圧験によっても規定されるものであり他方，後天的圧験のあり方（例えば，どの防衛機制をどれ程持続

的に使用するか．或いは環境に対してどの様な反応を選ぶか）は．一次的自我装置によって基本的に決定される面を多く含む。従ってかゝる一次的装置の基盤の上に立って衝動を自我になじませ．役立たせる形で統制して行きながら（taming）二次的自律装置を形成して〝葛藤外の自我領域〟をできるだけ広く開発して行くことが自我発達上の課題となろう。[77)80)81)85)129)]

3）構造的側面

自我は一次的自律及び二次的な相対的自律の装置をあわせ持った葛藤外の領域であるが．発達的形成過程をそのまゝ内包した層的な構造を有するものであることは上述した通りである。構造の内容は下戸部から上層部に到るに従っていくつかの面で変化している。まず変容されて組織内にとり入れられ自我にとって動因となった派生衝動の中性化の度合は上戸部に到るほど高度であり，又上層部ほど意識度が高いから，それ等の動因がその個人に

よって内有的に自覚されている程度も高まっている。従って上層部に行く程、自我によって社会的価値基準により適合する形で中性化され統制的に変容された形の衝動がかなり鮮明な意識的自覚の下になたする。これが"自我動因"(Ego motivations)或いは"自我興味"(Ego interests)と称されるもので、Rapaport, D. は個人の精神的構え(attitudes)，希望(wishes)，目標を目指す精神的努力(strivings)，価値感(values)等がこれに属するとする。(77) 80) 129) 131)) 又、Hartmann, H. によれば、自我興味はエスに含まれる本能的衝動の特性に根ざしていることは確かであるが、だからと云って容易に逆戻りしてエスの法則に従って働くのではなく、これ等は自我が衝動と現実と超自我間に調停を達成することによって生成せしめられたものであり、従って自我の目的のために中性化されたエネルギー(neutralized energy)で作用するものであるとされている。(80, pp136-138)

次に、自我構造の下によって自我が機能する

仕方が連続的に異なった様相を呈する。これは所謂一次過程，二次過程の概念によって説明されうるが，下層部に到るほどより一次過程に近い仕方で自我は作用し，又逆に上層に近づく程，より二次過程的仕方で作用する。ここで，これ等2つの過程に関する説明を簡単に紹介しておくと以下の如くである。(41) 77) 81) 129) 146)

一次過程（primary process）は本来エスが活動する仕方であるが，ここでは，生々しい衝動が，快楽原理（pleasure principle）に導かれて，即時的な欲求充足を求め奔放かつ流動的に活動し続ける。（fluid-free drive energies）自我の統制力は及ばず，思考様式も現実性や論理的法則性を持たない。(80) 128) 129) 自他の区別が不十分で固着が混同されている。これは精神発達的にみて初期の段階に属し自我機能の未成熟な状態である。

二次過程（secondary process）では上と異なり衝動が自我によって中性化され統制されている。従って，衝動（この場合は生々しい衝動

よりも派生衝動が対象になる。）の欲求充足は、快楽原理よりも現実原理（reality principle）に従って迂回的間接的な仕方で果されることになる。思考様式も現実的論理的であり、自己内省的自覚を伴う。そして自他の境界が明確である。[37) 128)]

以上の様に自我心理学における自我は発達的尸的な組織を有するものであり、合理的自律装置の学習的成熟とそれに加え、衝動・超自我・現実の諸関係がそのまゝ盛りこまれながら衝動を中性的に変容し得た手段（即ち防衛機制が成功して自律的な適応的自我機能に二次的に転じたもの）、中性化した衝動の内容（即ち動因）及びそのエネルギーをとり入れて連続的に構造を築き上げていく発展がうれている点が興味深い。

4）エネルギー経済的側面

自我は、リビドーや攻撃衝動のエネルギーを生の形でではなく中性化して用い、それによ

って機能することはすでに述べた通りである。従って、中性化されたエネルギーをすでにどの程度備えているかということとその絶更に中性化しうる能力が問題になるわけだが両者は相互依存的なものであろう。そこでHartmannはまず一次的自律装置の如何、(例えば欠陥があるか否か等)と初期の自我発達のあり方(精神分析学では最初の養育者との関係が後の自我発達の土台をなすものとして非常に重視される。)がこの中性化の能力に重大な関係を有するものと考え、最初からこの能力が低く中性的エネルギーの貯池が下なければ次の中性化を遂行する能力も当然低くなり自然自我発達が阻害される場合(ある種の精神障害者等)も考察している。(80, pp182-206) 従って、基盤となるべき中性化の能力やその結果生じたエネルギーの備えは根本的に重要なものとなるがエネルギー全済の観点からすれば次のことが問題とされるべきであろう。

ある防衛機制を反復して固着的に行使し続け

る場合自我はそのために多大の中性的エネルギーを消費し続けることになる。これが衝動に対するエネルギーの"逆備給"(或いは反対充当とも云われる。counter-cathexis)である。この逆備給は、専ら攻撃的衝動のエネルギーの変容を行って(deaggressivize)これにあてられるが、この変容能力に関係するのが上述した基本的要因ほど、超自我の欠陥(未分化な破壊性等が指摘されている。[14] 80)とされるが、ともあれ、逆備給が続けられる程それだけ"自我備給"(Ego-cathexis これは対象関係—object relation—ほど自己内省や精神内界と弾力的にかかわる時の云わば能動的な、自我のエネルギー使用を指す。従って、未分化な或いは退行的なナルチシズムとは異なり、後者はもう一つ不明瞭な味が方なから、Self-cathexis とも云われる。[80])が減少し積極的な自我機能が減退する。こうして対象関係が制限され縮少して来ると、防衛活動は本来外界との関係において衝動に対し行われている

ものである故、外部との関係が弱まるにつれそれだけ次第に脆弱になり不安定化することによって抑えられるべきエスの衝動が自我領域に侵入し、中性的エネルギーよりも非中性的エネルギーに呑みこまれてしまう（flood）。これによって現実吟味力等自律的な対象関係をつかさどる機能は全体的に低下し（部分的にはいろんな形で残存するのが普通である。）、現実関係の障害においては現実喪失（break with reality 或いは reality-loss）が結果されることになる。[1(), 37), 60), 80)] この様に防衛と対象関係等積極的な自我機能が相互に悪循環的に弱化し、この両防衛はたゞ不安定に脆弱化するのみならず、種類の上でも"投在""投影"等、より原初的未成熟なものに変転して行くとされ[80)]、結局、逆備給、自我備給とも減退しエネルギー的にも疲弊して自律的な自我機能全体が次第に解体に向かう。この様に、防衛は二次的自律機能に転じる積極的な面と逆に中性的エネルギーを過剰に消費して自我全体を危機に

瀕せしめかねない面をあわせ持つものであり、殊にエネルギー充満の観点からは後者が問題とされてくる。(80, pp191-196) 又、Federn, P. は"自我境界"(Ego boundary)なる概念を提出し、更にこれについて、外界との境界を形成する"外的自我境界"(outer ego boundary)とエスや超自我など精神内界における非自我(non-ego)との間の境界である"内的自我境界"(inner ego boundary)の2つを考えたが、上記の如き自我備給の減少はこの境界に対するエネルギー備給(boundary-cathexis)の減退を表すとする。(37) その結果、外的境界の備給が減ることによって外的現実の吟味能力の低下、自他の区別の不鮮明化、外界に対する興味の減退及び現実感の喪失を来たし、内的境界備給の減少により衝動の侵略が生じて妄想や幻覚等が起り全体としてやはり自我組織がくずれて行くと説明する。

5) 心理-社会的(psycho-social)な発達の

側面

自我の形成が力動的な現実関係を通して進められることはすでに述べた通りであり、外的現実即ち、生物的・心理的・社会文化的な環境の重要性が強調されるが、この環境との関係そのものはあまり詳細に論じられておらず、又自我発達は精神内界(intra psychic)に焦点を合わせて自我組織の機能的発展としてみられてきた。これに対し環境そのもの及びそれとのかかわり(現実関係≒対人関係)方をもっと詳しく研究し、社会的な在としてのあり方から自我形成を把えようとするのがこの立場である。Hartmann や Kris, Loewenstein[27)28)] 等は、例えば先述した〝平均的な予期される環境〟等の概念によりかかる観点からの理論化を試みようとしたが、結局それ等の理論は Erikson, E. H.[32)33)34)35)36)] によって補われねばならないとされる。Eriksonの説はもう1つ全体として組織化されてはおらず、又いろんな用語や概念がそのまゝでは伝統的な自我心理学の中に明確

に位置づけられにくい点などが指摘されうるが、Freud, S. の生物学的心理学的なリビドー発達に忠実に並行させながら心理・社会的な発達を段階的に詳しく論じており、Freud の心理・性的観点（psycho-sexual point of view）を更に社会的に拡張発展させたとも言われる。ここで何度か用いられる心理・社会的という言葉は結局社会的な現実との関係を意味しており、そこに含まれるのは殆んど対人関係と考えてよい様である。

彼の環境概念はほぼ Hartmann 等のものと同様であり、生物学的欲求充足にかかわる面、心理的な意味での人間関係、文化的価値基準を担った歴史的社会的面のすべてを含むものと考えられ、人は生れつき自分をとりまくこうした典型的な環境（平均的な予期しうる環境）に対して消極的積極的な意味で適応しようとする傾向を有するとされる。この環境との関係において展開される心理・社会的発達の段階を心理性的発達段階に準じてよっに分

け．これを〝生活周期〟（life cycle）或いは〝漸生説的発達図〟（epigenetic diagram）各段階における特徴的な重要な対人関係のあり方社会的存在を適応的に実現していく過程を詳しく追究する。[36] それは段階的な各時期における環境を代表する重要な人々（care-taking persons）とその時期特有の心理・性的成熟に基づく特別な欲求（phase-specific needs）を担った個人が関係しあうことにより その環境に伝統的な社会文化的基準に照して本来の心理・性的存在としての必然性を実現する手段を学び獲得していく。これが同一視（identification）及び同一性形成（identity formation）と呼ばれるものであり．同一視による役割の獲得がそのための基盤をなしているとも云える。各時期の解決はそれぞれ前時期の解決の仕方に強く影響され又同時に次の時期における発展的な課題解決に影響を及ぼす。この様な理論的展開は所謂新フロイド派の文化論者のそれとかなり似通ったものとなるが[157] [163]、異なる特徴は次の点で

あるとされる。即ち文化論者によれば個人は本来発生学的な意味では非社会的(asocial)な存在であるのに躾によって社会性を与えられていくと考えられるのに対し、ここでは、個人は発生学的に社会性を身につけている(一次的自律の自我装置に関連づけられる)と考えられ、社会環境との出会いによってその発現法を学び、発現の仕方について影響を受けて行く事により(2)で述べた"機能の変化"と関連づけられる。)社会のメンバーとして根を下ろして行くとされる点がそれである。発達段階は、心理・性的発達段階である①口愛期②肛門期③男根期乃至は小児性欲期④潜伏期⑤性器期に対応させ乍ら、但し⑤を思春期と性器成熟期に2分し更に⑤の後者に3段階を附して計8つに分けられるが、その各期における心理・社会的な重要課題(psycho-social crises)又対人関係で重要な意味を持つものがとり挙げられる。それ等を一部紹介すると、(1)幼児期では、基本的信頼(対)不信(Trust vs M-

istrust)，母親的存在(maternal Person) (2)児童初期(early childhood)では自律(対)ためらい，疑惑(autonomy vs shame, doubt)，両親(parental persons) (4)学令期では，生産性(対)劣等感(industry vs interiority) 近隣及び学校の人々 (6)青年期(young adult)では親密さと連帯(対)孤立(intimacy and solidarity vs isolation) 友人，異性，競争相手，協力者が各々その時期に解決されるべき課題であり・環境を代表する重要な人々及び機関(institutions)とされている。(36, pp50-100)

そして思春期頃までに大体重要な人々との関係を通じての同一化による社会的な適応手段のとり入れは一通り済まされるがそれ等を統合して真に自分のものとして身につける本格的な同一性形成は思春期末より始まり19才～24才頃はその形成をめぐっていろんな葛藤や危機的状況が顕在化して来ると述べられるが様々な同一化から同一性形成に向う経過は大体次の様に説明される。("同一性"の意味は

まだ十分明らかにしていないが、その形成至過を概略的に述べながら最後にまとめたい。(36, pp 101-164)

)

○乳幼児期

母親的役割をつとめる人(mothering adult)との相互関係において子供は主に口唇を中心とする感覚器官及び筋肉の働きを通じて"とり入れ"(introjection 食物の摂取)と"投出"(projection 食物の吐き出し及び肛門期に達成される排泄)を至験する。母親的環境(maternal environment)はこの様にまず生物学的次元で感覚的に豊かな満足を与える(sensual enrichment)から子供の生存を支持しはじめるわけであるが、かゝる感覚的至験が恒常的に安定した形で与えられることが環境に対する基本的信頼感(basic trust)を生み、逆に、こうした環境側の同一性が安定した自己感情即ち自分がいつも同じであると云うこと(sameness)、まわりから支持されていると云う感情(infantile narcissism)を子供に至験させ

る。この様に母親の体ほび気質に関する初期の感覚的経験の同一性と連続性の如何は、基本的信頼感、幼児自己愛を規定し、これがその後の自我発達、自我の同一性形成の決定的な基盤となる。基本的信頼感に基づいてこそ、欲求充足を果させてくれる母親への同一化が生じ、それによって母親の用いる手段を自分の中にとり入れ行使するようになり、能動的な活動を少しづつ自己選択的にマスターし、自・他の区別が明確に観念化されていく。そして、環境に是認された一個性的存在であるとの所謂自尊感情(Self-esteem)が確立して行くが、かいる基盤が成立しない場合は、自他に対する不確実感・不信感が基本的な問題となりその後の発達に重大な支障をきたす。

○幼児・児童期

子供は遊戯年令や学令を通じて、家族、近隣、学校で年少児から大人に至る様々な年令、世代の人々と接触することにより実験的な同

一化をいろいろと行いながら、価値を認められている役割を暫定的に試行してみる。こうした経験を多く持つことにより将来の自分のあり方を期待しはじめ、そのあり方の心理・社会的な適合性を経験的に確証していくことによりそれを自己同一性の一部とするに到る。

○思春期以後の同一性形成

これまでの発達過程で得た同一化群を集大成し(assembly)又選択も行って社会人として受け容れられる様な新しい自分のあり方を結晶させる(crystallization)。思春期に始まる本格的な同一性形成は容易な仕事ではなく、この期の末頃には一時的に危機化した様相すら呈する。これまでに一応確立されていた可愛い少年少女(little boy or girl)としての同一性が心理・性的成熟等を基盤として破壊され、飛躍的に、もっと成長した子供或いは大人的な存在であるよう周囲から要求される。この様にこれまで比較的なだらかな経過をたどってい

た心理・社会的発達がここで不連続化することにより精神的危機がもたらされる。この期にはこれまでの各発達段階における課題解決への努力の様式と、同時に各段階で残されている問題性が共に一度に再現して来る。勿論、新しい同一化を達成することによりそれまでのすべての少年的同一化群をそこに統属させ一人前の社会性を確立するという難事業が即座に果されうるわけではなく、おのずからある猶予的な中間期間(intermediary period)が暗々裡に認められており、その間に試行錯誤的な或いは遊戯的な同一化の試みが慌ただしく繰りひろげられることにもなるが、これ等の事は、過剰同一化(over-identification)や同一化の葛藤(identifications conflict)又同一性の拡散(identity diffusion)等を生ぜしめがちであり、神経症的な同一性の葛藤(identity conflict)、無政府状態的に病的同一化の出現する精神分裂病、更に又、反社会的性格異常者等の、価値に反逆した形の否定的同一性(negative

identity) 等を結果する温床にもなっている。かいる深刻な危機を、ただ単に一過性の青春期特有の徴候として脱し去ることができるためには、乳児期以来の各段階における同一化の課題が解決されていなければならず、同一性形成は常に安全な土台 (safe pole) から土台へと云う一段一段を築き上げる形で行われるものである。

以上、大雑把に〝同一性形成〟の過程を述べたわけであるが、これは結局自我が、その素質 (Ego · apparatuses) に基づいて衝動を環境の基準に照して変容させつつ、適応の能力を発展させ、社会的な在としての自分を開発していく過程に他ならない。従って〝生物学的意味も多大に含んだ〝とり入れ〟(introjection) に始まる同一化の機制に負うところが大であるが単に同一化群の総和ではない。Erikson は同一化による社会的適応手段の獲得のみでは十分機能的な人格は結果されず、同一化の機制が持つ有用性には自ら限界があるとしてい

る。同一化群の中からその個人にとって有意義なものを選択しそれ等をユニークに合理的に凝集した全体的な形態に変化させ(configurate)恒常化するのでなければならない。"同一性"は自分自身の中に個性の連続があること(persistent sameness within oneself — self sameness —, or continuity of personal character)そして他人と共に、ある本質的な性格を一貫して担いあっていること、この両方を含み持つことにより自我に、個性の連続、人格の統合(synthesis)への無意識的な努力(strivings)を行わしめるとともに、集団の理想及び集団の持つ一貫した特性(group's ideals and identity)からはずれないようそれ等との内的連帯性及び帰属性(inner solidarity)を維持させる意味を有するものである。この様に、同一性(identity)と云う言葉そのものにはあるあいまいな響きをまぬかれない、点が指摘されるが、要するに、上記の如き生活周期における各期に特徴的な心理・社会的危機を至験しながら

自我が開放し又獲得して行く、社会的現実関係における、順応的及び能動的両方の意味での適応性を指していると考えられる。そしてこれは、身体的素質(constitutional givens)、持ち前の衝動的欲求(idiosyncratic libidinal needs)恵まれた能力(favoured capacities)、重要な同一化(significant identifications)、一貫した役割取得(consistent roles)、効果的な防衛(effective defenses)成功した昇華(successful sublimations)等を徐々に綜合又再綜合(resyntheses)して発展的に構成して行く(configurate)形で確立されて行く。

同一性の感覚に満ちている時は前意識的に心理・社会的な幸福感(well-being の感覚)、身体的なくつろぎ(at home)の感覚、安心して前進できる(knowing where one is going)感覚、確かに人から是認されているという感覚をもたらすとされる。これ等の感覚は絶えず失われたり得られたりするものでもあるが、思春期以後、同一性確立を最大の課題とする危険な

時期（先述したほぼ24才位まで）を無事至過して行くことにより次第に連続的なもの恒常的な感覚となって行くとされる。

又、同一性は自我の主体的な社会的適応機能の側面から見られた場合、"自我同一性"（Ego-identity）と称され、又、意識的な客体化された、自己像や自己感情的な側面からとり挙げられる時、"自己同一性"と称され、この二つの明確な概念化、区別はなされておらず任意に交代して2つの言葉が用られているが、同一性に自我的側面のみならず自己的側面をも考えようとしている所は興味深く、自我と自己との関係を考察する章でもう一度問題にしたいと思う。

ともあれ、"同一性"は個人のユニークな社会的価値及び、心理・社会的な発達の歴史につながるものであり、適応的な、相互的対人関係の発展にとり基石となる重要な概念である。

以上、自我心理学における現段階までの自我

概念を，私なりに5つの側面から纏めてみたが，超自我（Super Ego）及び自我理想に関する考え，及びそれ等と自我との関係を次に簡単に補足しておく。

〔Ⅲ〕超自我と自我理想

自我心理学においては超自我そのものの形成及び機能に焦点づけた理論展開はなされていないが，Freud, S. は，社会・文化的影響が永久的にその個人内に内在化されて働くのを超自我或いは自我理想の機能として次の様に述べている。即ち，〝子供の超自我は実は両親を模範としてではなく，むしろ両親の超自我に基づいて作られ，超自我の同じ内容をひきつぎ，結局，長年にわたる価値，伝統の担い手となる。……この様に古代から古代へと伝えられることにより，人類は完全に現在において生きるのではなく，超自我の観念は過去を不朽にする。種族や民族の伝統が，徐々に現在の影響を受け新しい発達に屈服していく

ものではありながらも、それ等が超自我を通じて働くかぎり、人間の生活に重要な役割を演ずる。〃そして又一方、〃自我理想は集団心理学的理解への重要な道を開くものである。これは個人的側面と社会的側面とを持っており、家族、階級(class)、国家(nation)等の共通の理想でもある。〃(62)(65) この様に超自我と自我理想は、Freudにおいては、特に明確に区別されず、同義的な用い方もなされているが、これ等が精神構造内で無意識から意識の領域にかけて連続的に存在する中で、無意識的な部分を前者とし、主に意識的な部分を自我理想と云う風に区別したり、又、種族発生的な面を強く有する方を超自我、個体発生的な方を後者とする等、両者を区別して考える立場もあり、殊に最近の傾向では自我重視の立場からも両者が区別されようとしている。(80)(121)

超自我は、両親が有している〃…せねばならぬ〃,〃…してはいけない。〃を同一化を通じてとり入れることにより形成されるが、これ

は罰による両親の愛情喪失への恐れに基づいて、むしろ自分の中に両親の態度をとり入れてしまうことにより、両親によって与される幼児的な万能の状態(omnipotence)を再獲得しようとする機制から形成されていく。そして無意識領域に存在し、それ自身で力を有し自我の衝動に対する対処の仕方を厳しく管理する。時として、自我の自由な活動を拘束し、衝動に対する消極的な防衛体制を強化させ、神経症の中に見られる如き、自我機能の開放を制限する過度に強い超自我作用の例も存在する。それが権力を行使する仕方は、愛情喪失の不安や罪悪感を生ぜしめることである。この様に、超自我は個体発生的に初期のとり入れ(introjects)と関連して形成されるが、云わば、"盲目的"(blind)な道徳性を、頑固に報復的に懲罰的に担う内的な機関(agency)であり、その中には未分化な原始的内容が含まれるとされる。

これに対し、他方、自我理想は、やはり"一せ

ねばならぬ”という良心（conscience）に相当するものではあるが．そしてまた，その形成の基盤を超自我のそれに置いてはいるものの．特定の厂史的時期の理想ともっと可塑的に結びついており個体発生的な要因をより多く担っている。両親以外に，その後の成長過程で出会う重要な人々（significant persons）との同一化を含み超自我より柔軟に，各発達段階に応じて修正されていくものであり自我の現実吟味（reality testing）の能力と密接な関係を有する。自我にとってあくまでも積極的な意味を持ち，超自我が自我に対して衝動の抑圧を強いがちであるのと異なり，むしろ昇華を助長するものである。又，超自我と異なり意識的である。[5,8,80,121] Eriksonは自我理想を自己同一性と比較しているが，[36] それによると，自己同一性は，各発達段階における心理・社会的危機を通して形成された”自己表象”（self-representation）を吟味，選択し統合したものである。それは，社会的現実の中での現に多少

とも達成されているがしかし永遠に修正されて行くべき、自己の現実感覚（sense of the reality of the self）である。[36, P.149] 他方自我理想は、それに向って努力されるべき、しかし永遠に完全な形では達成され得ないところの、自己にとっての理想的目標であるとされる。従って、上述した自我の層的構造において正層部を構成する意識的な自我動因と非常に関連の深いものであり、場合によってはその中に含めて考えてもよいものではないかと思われる。このように自我理想は超自我と一応同じ起源を持ちつつもその後自我がその形成に関与するところ大であり、逆に又自我の社会的適応機能に積極的に加担し推進的役割を果すものである。

〔IV〕自我機能の健全性と適応

自我機能の健全性は結局、上に纏めた5つの側面から把らえられるわけであるが、"自我"がそもそも、外的枠組より行動（広義の）を説明.. 試べく無意識にまで及ぶその心理的機制を仮

定するところから生じた構成概念である故，その機能は基本的にはここで総括した様に論究されるとしてもかいる〝自我〟の機能を発現型としてとらえる時には研究者により(3) (10) (11) (12) (14) (36) (80) (100) (129) (130) (159)その次元等にかなりの差異がみられる。〝自我の強さ〟(Ego-strength)と称するものの概念規定も，結局それは自我機能の顕在的及び潜在的な機能の健全性を指しているのであるが，そこに盛りこまれている側面及び次元が研究者によって多少とも違っている。ここでは，自我の概念についてはすでに総合的に基本的な考察を行ったのでもう少しその機能の発現様式の面から，より具体的に自我機能の健全なあり方及び病理学的な不健全性を示す諸現象を諸家の考えを参照しつつ，まとめて考察してみるが，それによると結局次の様な諸側面が機能的発現の健全性にかいわるものとしてとりあげられて来る。

1) 現実吟味(reality testing)：現実をありのまいに正しく認知し把握する。そして客観

的な妥当な判断を下す。そうした能力であるが、これは Hartmann[80], Rapaport[129][130] 等始んどの自我心理学者達によって指摘される。Baughman, E. E.[12] 等はこれを知覚的技能（perceptual skill）と称する大きな概念の中に含めて考えており、又 Klopfer, B.[100] はこの機能をただ単に知的認識的な面においてのみならず情緒的な面をも、情緒的現実吟味（emotional reality testing）として含めて考えている。

2）対象（現実）、関係の能動的な治深さ：これは、対象関係（object relation）において集中的なとり組み方（concentration）ができること[129][130]、注意のエネルギー充当（attention-cathexis）が十分備わっていること（これは先述した中性的エネルギーの一部である。）外界に対して敏感な感受性を有すること[100]等である。その他、更に、情緒的な面で、現実と接触している感情[14]、強い現実感覚（strong sense of reality）[10]があること、感情をこめた対象関係が持てること（emotional involvement）[80][100]、対人的共感性

(empathy[100]) が生々と豊かになされること、情緒表現が率直であること(spontaniety[100])等がこれに含められる。

3) 制禦機能(control):

Beres, D.[14]の述べる衝動の調節と統制、Baughman, E. E.[12]の衝動の制止(inhibition)等無意識の衝動が自我領域へむやみに侵入して来ることのないよう防衛に成功しているか否か、(2)159)その防衛の種類や、防衛が機能的変化(change of function[80])によって適応的に自律化(automatization)している度合、更に防衛の維持に反対充当(counter-cathexis)のエネルギーが消費されすぎていないかどうか、従って防衛が固執的であるよりも柔軟な可塑性を有している程度がここで問題となる。[80)100)106)147)]故に、エスの衝動を外的現実や超自我の要請などと見合わせて必要に応じて制止する作用を自我がどれ程自律的に失敗なく又柔軟に効率よく行い得ているかということである。この中柔軟性、可塑性に関しては、自我心理学で特に強調される点で

もあるので，特に一項としてとりあげることにする。

4）（制禦機能の）弾力性：

これは先述した“自我の働きに基づく一時的部分的な退行”の機能であり，自我が衝動の接近を反対充当によって防衛的に喰い止める一方ではなく，自ら随意的に衝動に接近することを認め，原始的な衝動を生産的機能のための本質的資源として利用し得るのみならず，この様にエスへの検閲（censoring）を一時的に弱め反対充当を軽減させることにより，その分のエネルギーが，意識化への過重（剰）充当（hyper-cathexis）にも当てられ得，エネルギー至清の見地にも適うと同時に，その過重充当エネルギーを用いて，自我が自ら退行状態を解いて再び現実水準の機能（二次過程）に前進することになる。[80) 100) 129) 130) 159)] このように随意的な柔軟性を有する制禦をどこまでなしうるかも自我機能の健全性に関する重要な指標となる。

5）衝動の分化，迂回的な欲求充足（衝動

解放－discharge－の猶予）法の発達：
これは自我組織の発達と云われ等価であるが衝動が中性化され又社会化されて派生衝動に合化して行くに従い，短絡的（short-cut）に衝動を解放させ欲求充足を果そうとするのではなしに，二次的な快感（pleasure）を長期的な目標設定（long-range goal）の下に迂路的に獲得することを指す．予期（anticipation）の機能や現実原理の発達がこれに関連づけられる。[80)129)] 又Klopfer, B.[100)]の述べる制禦機能の中の外的制禦も，社会的基準を配慮した情緒反応の制禦を意味する以上，衝動解放の猶予，及びその仕方が社会化されていることを指すに他ならない故，ここに含めることができよう．

6）自我組織（Ego organization）の発達：
自律的な自我動因（Ego motivations）や自我興味（Ego interests）のヒエラルキーの出来具合がここで問題となり，又二次過程の発達も含まれる．又Erikson[36)]の考える同一性形成（自我同一性及び自己同一性）がどの程度なされて

いるかという観点からもこれに言及できようが、結局、自我が、その形成過程で最初の基本的な段階から決定的な外傷体験に見舞われることもなくその後の各形成段階を一つ一つ成功的に積み重ね乍ら"葛藤外の自我領域"をより広く形成し自律性を発展させている程度に関するものである。

7）感情（affect 又は emotion）のあり方

"affect"とか"emotion"の定義はいろいろ論議[5) 13) 20) 100) 130)]をかもすところであるが、とにかく、精神力動の傾向（psychodynamic tendencies）を示すものであり、既に述べた如く、自我機能及びその形成・発達に深いつながりを有する。感情は、自我、超自我との力動的関係の中にある衝動の欲求に基づいて生じるものであり、自我はそれを経験させられ、ある機能的要請（functional demands）が感情から発せられたことになる。しかし自我はただ単に受身的にその要請に従うのではなく自ら感情を馴らして行く[38)]（taming）。これが社会化され中性化された派

生衝動の形成，衝動防位の成功からそれを自律的適応機能に転ぜしめることと等にそのまゝ対応するわけで，感情の分化，成熟は即自我機能の分化発達につながる。感情は馴致させられて行くことにより，単に本能力動の副産物であることから次第に直接に自我機能に加担する役割をとるに到り．例えば不安（anxiety）が自我により警報的な働きをしたり．又いろんな感情が状況に応じて自我にある行為をなさしめる推進的役割をとる等する。結局，感情が分化し豊かで生々と主体的に至験されており更に感情の嵐（affects storm）に巻みこまれ圧倒されずにある安定性（inner stability, security）と耐性（tolerance）を有していることが．自我の健全な分化発達や精神内界との柔軟な疎通性（intra communication）を有する健全な弾力的機能を反映するものに他ならない。[5) 80) 130)] Alexander, F. M. 等[1) 5)]は感情（affects）を自我機能全体にかかわるものとして．その信号的働きおよび生命（活力）的働き（vital function

を，現実吟味やコミュニケーション等の対象関係や，防衛，行動を生ぜしめる潜在的な動力（motor potential）更には記憶等の諸側面にわたり詳述している。

8）自覚（awareness），内省的自覚（reflective awareness）：これは二次過程の発達，中性化された自我充当（備給）のエネルギーの量及び圧満を背景とした意識化への過重充当（hyper-cathexis）エネルギー[60]等により規定されるが，Firend, S. や Hartmann[80]が述べるごとく，思考や行動が外的現実のみならず同時に内的な精神の過程の現実によって決定づけられること，即ち，外界と内界が相互に交流し両方の現実（reality）を綜合した形でなされることから，典型的な自我の機能にとって不可欠な条件であり，従って外的現実のみならず内的現実をもよく吟味し正確に把握して，両方を綜合的にフィードバックする働き（或いは reflect back）[129]が大切になる。これが自覚の機能に他ならない。

9) 思考：

精神障害は屢々思考の病理学によって理解されようとするが、現実的論理的な二次過程の思考様式の発達，可塑性，批判性，公共性，偏よりのない調和，分化した詳細さ及び具体性と他面抽象化の能力，観念性を有することと等が挙げられる。[37) 80) 100) 128) 129)]

10) 価値基準の許容的な広さ：

これは先述した超自我もしくは自我理想の要素がかなり関係して来るが，自我があまりにも高い要求水準や価値基準を背負いすぎそれより生じた緊張感や罪悪感に圧迫されていないこと、許容的な道徳性（permissive morality）[10) 37) 80)]健全な自己愛（narcissism）等を指す。

11) 二次的な自律装置：

自我心理学における自我概念で重視される点であり，これも既に述べたが，知能，記憶，随意運動機能，知覚感覚等の閾値，天賦の才能等，所謂先天的に備わった条件（structural givens）及びその成熟がここで問題となる。[10) 80) 129)]

12) 生理学的な安定性 (physiological stability) 及び身体的健康：

上記の11)とも関係が深いと思われるが、特にBarron, F.[10]等は身体的な機能の健全性を自我のそれと関連深いものとしてとりあげている。

13) 全体的な調和及び機能の綜合的な発現

既に80～83頁に述べたところの綜合機能や、平衡の概念が、多少不明瞭ながらこれに該当するが、Klopfer[100]の両拡的な体験型や、能動的現実支配 (active mastery) と自己実現 (self-realization) の両立、又創造性、独創性、成熟等が関係して来る。

以上、自我機能の健全な発現性にかゝわると思われる諸側面を、Hartmann, Rapaport, Klopfer, Federn, Barron, Beres, Erikson, Symonds, Freud, (S.), Alexander, 等による様々な"自我の強さ" (Ego-strength) の概念を参照しつゝまとめて見た。

結局、上記の如き諸側面がどの程度健全な発現の仕方をしているかにより、適応性が規定

されるわけであるが、精神病理学的な適応異常とその自我の不健全化の問題はかならしも理解が容易ではなく、神経症理論、精神病理論も十分統一をみないまゝ、数多く林立する現状である。

まず、正常、神経症、精神病(psychosis)という適応様式に明確な隔差を示す三群を精神病理学的な位置づけも未だ不明瞭で統一的な見解が得られておらず、自我機能の全体的な健全度が単に量的に異なるものとして理解すべきか或いは質的な違いを考えるべきか、又自我の中のどの機能の不健全化が特に問題とされるか等も十分明らかにされていない。しかし、ここでは自我心理学全般における精神病と神経症に関する見解の主要なものをごく概略的に纏めておく。

精神病(psychosis)

衝動の中性化の能力の障害。従って自我備給のエネルギーの減少、貧困化を基本的な問題とする。この事には、一次的自律の自我装置

の欠陥，初期の自我形成の脆弱さや歪曲．更に又．外界の現実的圧力．ストレスが過当に強すぎることも時には関係づけられるが，いずれにしても著じるしい自我備給の減少．中性的エネルギーの枯渇現象という基本的自我障害が推定される[12) 37) 60) 80)]。そこから内的外的自我境界の崩壊[37)]が次第に結果され，即ち，前者は反対備給（充当）の減少による防衛の弱化．又原初的な防衛法への妄償によるエスの侵入，非中性的な衝動（エロス的又攻撃的な）の氾濫による自我の一層急激な障害をもたらし，又後者は対象関係において，自他の区別を不明確化させ現実吟味の能力を損わしめると共に，対象備給の減少から．恒常的な生々した対象関係を不可能にさせ初期の一次的な自己愛の段階（たゞ恒常的に欲求充足をもたらしてくれることのみを受身的一方的に期待する対象関係であり，従って対象は未分化でかなり無差別的）に退行することから対象喪失（object loss）及び現実喪失（loss of reality）を

もたらす。[12) 37) 60) 80)] これ等の結果，幻覚や妄想が形成され，それを現実だと受けとるところの，にせの現実"(falsified reality[38])を築き上げ，空想(fantasy)と現実が全く混同されに自我と非自我(non-ego)の区別も消失して行く。又，生々しい衝動の活動による欲求不満と対象喪失とが関係し合い，病的な同一視の氾濫[36]，即ち瞬間的に移り変る表層的対象関係を次々と作り変える現象等が結果される。快楽原則に支配された一次過程が圧倒的であり，本能的衝動の中におぼれている自我においては，その思考の機能にも障害が著じるしく認められ，観念と対象の識別力の障害，即ち言葉の記号性や代理性がなくなり言葉と言葉が表わしている物との関係が歪曲されたり，言葉そのものが物化してその言葉に突然新しい意味が生じたりするため抽象的思考等が不能になる。又疎通(communication)の意味や目的なしに言葉が用いられたり，先述した"にせの現実"や"誤まった確信(false certainty)"が横行

心に様々な内容の所謂"魔術的思考"(magic thinking)が生じる。(14) 37) 80) 129) 感情のあり方に関して云えば、精神病では現実との関係おいても葛藤が生じやすく安定した状態が保ちにくく。又、衝動との関係でも、不安定な退行的防衛法により生々しい衝動の侵入を余儀なくされている事等から不安は生じやすいが、いたずらに感情がたかぶるばかりで(emotionality が強くなる)それを自我にとっての信号(signal)として使用する仕方には欠陥があり予期(anticipation)の機能に錯乱が認められる。(5) 80) 130) 全般に、"現実との生きた接触の喪失"等と云われる如く精神病では自我と外界との関係の障害が最も重くとりあげられ、それに比し精神内界との疎通(intrapsychic communication)と云う点では自我が本能的衝動の侵入に対する防衛力を減退させてしまっている関係上ある意味では内的現実への洞察を正常者以上に有している(14) 80) 等とも云われる如く衝動と密着した関係にあるわけであるが、これも正しい意味では洞察

とか疎通と云うものとはほど遠く，殊に全体としてはゆがんだまとまりのない目のとなる．正常な"弾力的機能"にたとすれば，退行一方であり前進的(progressive)な機能が認められない．中性的エネルギーの欠乏は意識化や二次過程的機能を促進する過剰充当のエネルギーをも消失させ，従って，自覚や内省をも不可能にする。こうした自我の障害が生じても，全体として均等に自律的機能が損われて行くよりはむしろ，その中いくつかが損われ，又部分的に健康な自律機能が残存する(一次的及び二次的に自律した自我装置の中のいくつかのもの)と考えられるのが普通であり，又一般に損われにくい機能(例えば，記憶や知覚能力等)も存在するとされる[1(4) 37) 80) 103)]。従って精神病では相対的にとび抜けてよく維持されているもの(hyper function)又逆に障害をきたしているもの(malfunction)という風に自律機能が不同であるとされる．そして残存する健康な部分及び先に述べた綜合機能が自我の病的な崩

壊に向って抵抗しており、自我が疲へいし、次第に解体して行く過程の中でもいろんな段階における平衡維持への綜合的努力が自ら試みられていると考えられているが、次第に障害が慢性化し精神の活動全体が不協調化してやがて最終的な崩壊、非可逆的な解体(disintegration)に向うとされる。[103] 以上が精神病における自我の病態化の要点であるが、Hartmann[80]は、超自我や自我理想の形成における欠陥にもごく大雑把に触れている。それによると、あまり明確ではないが、超自我が野蛮な残忍性(brutality)を有し、未分化で一貫性を欠き、自我にとって健全な指針となる様な自我理想の発達が認められず重要な同一化が原始的な支配力を振ったりして自我の現実的な対象関係等をかく乱する場合が指摘されているがこれは次の神経症の場合ともいくらか似通っている様である。

神経症(neurosis)

中性化された衝動のエネルギーによる自我充

当の減少は精神病においてのみならずニにでも問題になるが当然減少度には違いがあり、精神病における如く衝動の侵入に自我が身をゆだねてしまうには到らない。この点では精神病を基準とした程度差としてなりもむしろ正常者との比較において論じられている様であり、中性化の能力の欠陥、自我にとって専用のエネルギー(independent psychic energy)の貯池の減少も精神病の場合の様に一次的自律装置の欠陥や自我形成初期の決定的な損傷(damage)等基本的な障害に規定されるものとしてはあまり考えられていない様である。[14) 36) 37) 80)] むしろ自我違和的(Ego-alien)[37) 100)]な衝動の防位に消費する反対充当エネルギーの過剰な結果対象充当(object-cathexis)の減少と云ったエネルギー至済的見地からの説明がかなり一般的に見られる。精神病の場合外界の現実との関係の障害が中心的な病状を形成していたのに対し神経症では自我と衝動との葛藤が中心的な問題になっているが、このために、自我は衝

動防衛に枯殺され柔軟に防衛をゆるめながらより本能的性質を強く担っている諸衝動（自我組織のヒエラルキーの下層部になする）と随意的な退行によって接近交流するゆとりを欠いており．先述した弾力的機能等はかなり障害されているものと考えられる。従って，Freud, S. 等が"神経症は内界への洞察（insight）の質を異化させている"[60]等と述べるのもこの点に関連づけられるべきことであろうが．他方，反対充当と相対的に対象充当が減少することにより安定した対象関係も障害され，現実の断片化の現象（fragment of reality）[61]と呼ばれるものも出現する。これは精神病の現実喪失とは異なり．外的現実の方が本来衝動よりも重視されているわけであるが正常者の如く現実に対して広く全体的に開かれ得なくなっている。即ち．'精神的健康'人の場合は．①現実を広く正確に考慮し，生々と現実と接触すること（能動的でかつ安定した活潑な対象関係）と②外的現実から引込んで，精神内界

も深く接触すること（より本能的な性質の衝動からなる心的下部組織と疎通すること — intrapsychic communication —）の2つを単一的に（single one として）行うことにより[60)77)]、①は自我に対して、本能的衝動により圧倒されることから身を守らせ退行的傾向からより前進的（progressive）傾向に向って機能することを可能ならしめ[106)107)]、又逆に、②は自我を外的現実より一たん分離（detach）させることにより、環境的ストレスから身を守らしめる。この様に両者は相互扶助的に働き合い、又エネルギー的にも固執的な反対充当を軽減させる等によりお互が相手の機能のためのエネルギーを生み出し合う形になって自我全体の効率の良い健全な機能を支えているわけである。これに比すれば、神経症の場合はこの2つが共に制限される事により互に相手の働きを妨げ合う関係にあるといわねばならない。

又神経症における反対充当エネルギーの過剰消費及び全体的な自我備給エネルギーの貯池

の問題に関して、Federn[37]やHartmann[74) 78) 80)]の次の様な見解も等閑見落すべきでない点ではないかと思われる。即ち、中性的な自我充当のエネルギーの中にはリビドー的(エロス的)なもの(desexualized energy)と攻撃的なもの(de-aggressivized energy)とが適量に配分されていないと都合が悪く、防衛的な反対充当に用いられるのは主として、攻撃的衝動の中性化されたエネルギーであることが仮定され、対象関係の中で対象並的なもの及び対自己(この"自己"は漠然とした意味)関係で健全な自己並的機能や又衝動親和的な弾力性のある自我の働きに用いられるのが、上記のリビドー的要素のエネルギーであることが大よそ仮定されている[37) 28)]。従って、自我充当エネルギーの中、攻撃的衝動の変容されたものの割合が増すほど、固執的な反対充当や対象及び自己に対する攻撃的破壊的関係への充当が増し生産的関係を育てて行く働きが相対的に低下すると推論されている。こうした傾向が神経症独

得の〝自己愛の欠如〟(lack of narcissism)と呼ばれるものを生じしめ，自らの精神内界や更には外界の対象に対する〝親和感情〟(familiar feeling)の欠如，〝しらじらしさ〟(soberness)，〝冷めたさ〟等を結果するとも云われる[37]。又，逆にこうした傾向をもたらす要因に，厳しすぎる超自我形成を考えるのはかなり一般化された見解である。従って罪悪感や，衝動との葛藤から生じる不安感情等，感情のあり方としては云わば陰性の方向に偏よった感情過剰が考えられるがこれ等は自我の働きを積極的に推進する方向に加担するよりも機能を制限する方向に働いている様である。但し，一口に神経症と云ってもそこにはいろんな型が含まれる故，感情過剰よりもむしろそれ等を意識から解離しようとする知性過剰や運動過剰等様々な内容が考えられねばならないであろう[103]。更に，統合機能に関して云えば，神経症では，精神病に比しはるかに高い水準での統合機能が維持されており，又自律機能

の全体的な障害がむしろ正常者との程度差という次元で考えられていることにも基づき，不連全化に抵抗して平衡（equilibrium）や綜合（synthesis, integration）に向おうとする努力も活発だとみなされている[37]。又，Eriksonの心理・社会的観点からは，先の超自我及び自我理想の形成とも関係するが，社会的是認が十分与えられず，それは厳しい自我理想（超自我的意味あいの強いもの）の形成を促進しても，自己愛及び対象愛を充足させる面が不足し自我同一性の形成が障害されることにより，〝生存を環境から是認されているという自尊感情（self-esteem）〟の育成を妨げると考えられており，殊にFreud, S.の伝統に従いエディプス期の葛藤解決等が重視されている[25][36]。

以上自我心理学における精神病（主に精神分裂病）及び神経症についての見解をごく大雑把にまとめたが，両者の中に含まれる病型の差異については言及せず全般的な概略を述べたにすぎないものと云えよう。後に本研究の

対象について実証的研究結果と合わせて再考察する。

〈第4章〉「自我機能」と「現象的自己」との関係について

これまでの第1，第2，第3，の各章では，(1)「自我」と「自己」即ち，Ego と Self とは用語的にも又概念内容においても未分化な錯綜した面を有しつつも、一応前者を主体的機能の過程（Ego-as-process，Ego-as-doer）とし、後者を現実主体が主観的意識的に客体化されたもの（Self-as-object）として考えるべきであり，この様な基本的区別は人格心理学的にかなり一般化された一つの通念ともなりつゝあること，(2)「自己」は自己心理学において現象学的な立場を基盤とした理論的実証的に研究され，他方(3)「自我」の機能については，Freud, S. 以来の伝統的精神分析学を継ぐ自我心理学において理論的及び臨床実践的研究が積まれているのを見，2つの概

念を別々に考察し纏めてみた。しかし、「現象的自己」という内的枠組と、「自我機能」という仮説的な構成概念を用いる客観的外的枠組の2つを統合よい適応理解のために用いることを目的とする本研究においては、両者の関係を理論的に基礎づけることが最初の中心的課題となるが、この2つを本格的に関係づけようとする理論は未だ見当らず、同じSelfでも、Jung, C.G.[94)95)]の述べる称な心的機構全体(psychic totality)としてのSelfとEgo(この場合のEgoは本研究で纏めた自我の概念に比し狭い内容のものである。)との関係に関する研究が却は、精神的健康(mental health)という観点からなされているもの[42)43)]のそれも、で特直接の参考にならない。

ともかく「自己」と「自我」とは全く別個の立場で夫々一方のみが研究され、各立場では一応片方のみが人格における最も重要な概念換言すれば適応機能をつかさどる中心的なものと考えられて来ている現在、両方をただ安

易に合わせて用いようとすることは，本来同一次元で考えられて来なかったもの，起源を異にする2つの概念を，勝手に同じ平面上に持ち込み，それ等をたゞ単純につなぎ合わせるという あやまりを犯すものであろう。しかし，私がここでこれ等2つの枠組を綜合的に用いた研究を試みようとするのは，序論でも述べたところの臨床心理学的実践において治療的立場と診断的立場との間に何らかの統一性を得ようとする期待のみに基づくのではなく，人格適応の理解をより妥当なものとする上で，これ等2つを綜合的に用いることが必然的におもわれ，その必然性は，まず「自己」理論及び，「自我」理論の中に，既に夫々認められると考えたからである。

即ち，自己心理学においては，「自己」と一応区別する主体的機能の過程を云わば漠然と背後に考えるか，或いは結局「自己」と未分化な形で「自己」の中に機能的執行者（doer）の面を混入させて考えているかいずれかの傾

向が諸理論に認められる。後者は、より具体的には、先に「自己」の人格内での位置づけ及び適応的意義に関連して述べた所であるが、「自己」が自らを維持し高めようとする要求(need)を有しており、この要求に基づいて人格に一貫した統一的姿を与え(即ち、「自己」に一致しない至験は意識から除外すると云った選択的無関心性等により)、又発展的な方向に人格を導いて行く(「自己」が自らを高め開発する動きを、機会を利用しつゝとって行く事により)と云う作用、又、「自己」が現実至験をありのまゝに広く正確に認知し意識的に象徴化(symbolize)して行くことが可能であるか否かが、適応にとって必要な「自己」の一条件とされるが、その象徴化の働き等が結局、客体であるべき「自己」の中にいつのまにか含めて考えられているのを指している。従って、本来客体である「自己」をその理論の中でそれは唯一の重要な中心的概念として据えやすい自己心理学においても、主体的

機能の概念が、不明瞭ながらとり入れられてしまっているのを見る。このことには、自己研究において無意識的自己(unconscious self)とか本当の基本的自己像(basic self concept)等現象的な観点を越えた研究が試みられようとする傾向が比較的最近の自己研究の動向として認められることも関連づけられようが、これ等はすべて、自己心理学自体が意識的自己のみに焦点をあてているのみでは事足りなくなっていることを示すものと解される。

又他方自我心理学でも、エスに関する詳しい研究、これや超自我、そして自我内の精神内力動に関する深い研究を積み重ねながら、更に外界の現実を詳しく分析し、結局対外界との関係及び対精神内界との関係を同時に力動的につかさどる自我の働きに焦点づけた研究を発展させるに伴い、無意識Pから意識Pへの連続して層的につながる自我組織及びその形成を考え従来の抑えと無意識を中心としこれを詳細化しようとする研究にかえて意識的

な層にも興味が及び、自我動因（Ego motivations）の意識層に到るヒエラルキーや、意識的な自我興味（Ego-interests）等が研究されようとしている。勿論、これ等の自我興味の力動的意味や有効性（efficiency）については十分研究され盡しておらず、この事はHartmann[80, P.138]も認めているがこの他にも、新フロイト派の本格的な「自己」重視の立場はもとより、自我心理学における"自己表象"、"自己至験"の概念等まだ未発達ながら、意識的主観的な至験への関心が増しているのを認めるのは容易である。又、Erikson[36]やFredem[37]等は最初から自我と自己をかなり未分化な形で用いるが、これは既に見た様にEriksonでは同一性（identity）の概念が自我同一性としても又意識的な主観的側面としての自己同一性としても考えられており両者が交代的に用いられること、又Fredemにおいては、"自我は主体（subject）であると同時に対象（object）である。即ち、自我（Ego）は意識の担い手であり、個人は自分自身

の自我を意識する。---従って主体としての自我は様々な形で至験され，現実的に感じとられるものである。(actual sensation がある。)" (37, 89) と述べているが，自我は個人にとって1つの主観的至験 (ego-experience) であり，それは各人にとっての現実 (reality) として自我感情 (Ego-feeling) 又は自我感覚 (Ego-sensation) とも名づけていることと等がそうである。

この様に自己心理学での意識的現象的な枠組から無意識の方向へ，又自我心理学での無意識的な深層の研究から更に意識的側面をもという傾向を各々の文脈において大雑把に認めてよいと考えられるが，その場合，いずれにおいても，相当未分化な形で夫々，主体的機能の配慮，又一方では，意識的な主観的至験の面への関心が認められ，殊に自己心理学での無意識面の配慮としては，これを自我概念と照合させた場合，ただ自我の防衛機制の一部のみが何らかの漠然と問題にされているにすぎない様であり，自我心理学における意識

面への関心に比すればいかにも発展性が少ないものに思えるが．いずれにしろこの様に未分化な考察の仕方が認められることには研究上の未発達さの問題以外に，自我と自己とが互に明確に割り切り別々のものとしては考えられない密接な関係にあることが関係しているのではなかろうか．従って，上に述べた自己心理及び自我心理の一つの動向は，それぞれ，全く別の次元及び枠組で進んで来たものである故，お互に相補う歩み寄りの傾向を示すものとしては考えられず，又各々が相手側の枠組をとり入れる形でこうした動向を示しているのでもなくて各々の立場はあくまでも各々の立場であるに違いないが，結果的には「自己」及び「自我」の各一方を重視し研究の焦点とするにとどまらなく乃至はとばされなくなって来ているのを認めないわけには行かない。

故に，本研究では「自我」と「自己」とを別個の対立的な概念として扱う段階からもう一

歩進んで両者の関係を積極的に考察する方向に進みたい。これ等2つの関係は既に第2章及び第3章で行った理論的考察の過程を通じていくつか示唆されるものがあったと思うが、自己概念についての理論的実証的研究を見又自我機能全般について理解を進めるという風に両方向からの考察を行ったことにより、却って両者の関連性が自然な形で浮かび上って来ると思われ、次に、形成、構造、機能の3つの観点から両者の関係を纏めて考察してみる。

〔1〕自我形成と自己形成について

第2章の〔3〕及び、第3章〔II〕の2)と5)において夫々「自己」及び「自我」の形成を論じたが、両者の形成は似通った又対応性のある過程をたどることが認められる。Eriksonの[36]同一性形成の理論からもうかがえる様に両者は密接不離な関係(これは次に述べる構造及び機能の面と合わせて論じられるべき問題であるが)の下に表裏一体的に形成されるものと考え

るべきであろう。即ち、乳幼児期から成人にいたる各発達段階において、置かれた環境にふさわしい仕方で欲求充足を遂げる方法を、環境を代表する主要な人物との同一化を通じてとり入れる過程がそうである。それは一面から見れば、環境即ち外的現実の基準及び同時に形成されて行く超自我の要請の下に衝動の活動を制禦して行く方法を体得し、成功的な防衛法を二次的に適応機能に転ぜしめ二次的自律の自我機能として、主に一次的自律の自我装置からなる"葛藤外の自我領域"に加える。この領域(即ち自律装置)を形成して行くこと、又衝動をより社会化し中性的に変容をてそれ等を様々な段階の派生衝動としエネルギー的にも又自我動因としても自我組織を築いて行くこととなる。もう一つの側面から眺れば、「自己」像の形成即ち、同一性を自己意識の面から眺めた自己同一性の形成過程となり、対人関係を通じて他人と区別される個性的なしかも同じ環境に共有する他人と本質的な面

でつながりうる共通的な性格を担った（つまり社会的に是認されうる）自己の諸特徴を自ら全験し，意識的に自覚して自己像を凝結させて行くこととなる。この様に「自己」は発達論的に見ると「自我」の心理社会的適応機能の発達過程を通じ「自我」形成と密接な関係のもとに形成されて行くものであり，云わば「自我」のできばえをそのまゝ反映するものでもあるが，この現象的自己を直接的に生成せしめる機能，即ち自分自身を客体視する自我の機能は二次過程に属する内省的自覚の機能（self awareness, reflective awareness）である。これには一次的自律装置（primary autonomous apparatus）に基づく記憶の機能が大きく関係しており未発達な自我ではこの記憶がすべて衝動のまわりに形成され，幻覚的心像等衝動優位の観念として存在するのみで現実とのつながりを欠く一次過程独特の性質を強く担っている[129]。しかし次第に言語の獲得（欲求充足のため社会化された間接的手段）等に伴

いニ次過程を発達させて来ると記憶が現実とのつながりを持って意識的に概念化されるに到り内省的自覚もここから生じるとされている。この内省的自覚とは換言すれば、自分自身に関する現実吟味（reality testing）の機能でもあり精神エネルギー的には過剰充当（hyper-cathexis）、内省充当（reflexive-cathexis）[37]がこれに当てられる。自我はこの自覚作用により、ともかく自分に関するあらゆる事柄を意識的な現象野（phenomenal field）においてフィードバックし続ける。こうして作り出されて行く「自己」の内容についてはすでに第2章で述べた通りであるが、その中には対象関係及び対精神内界との力動的関係等全般的な自我の機能そのものについての鏡映像（the reflected or looking-glass self）[28]も含まれ、これは「自己」の中でもJames等によっては中心的位置を与えられる重要なものである。自我は発達を続ける限り、自己を生成しそれを維持し更に高め発展させて行く。自己はこの様に自我によってお

のつと生成されるものであり．従って Hartmann が〝自我興味（この中には自分自身に関する目的が含まれそれには「自己」に相当する面が考えられる。）は精神組織の発達を示す。〟(80, p36) と述べるごとく どの様な自己を生成せしめ得るかは自我機能のあり方．健全度によって規定される．尤も自己形成には超自我や自我理想も関係しこれ等は自己批判（self-criticism）等の形で作用することは無視されるべきでないが，超自我の作用は既に自我形成の中に含まれており．こうして超自我作用を含み持った自我がより直接的に自己形成にかゝわるものと考えてよいだろう。ともかく自我はそれ自身の能力に応じて自己を生成して行き，作り出された自己をみずからの映像としてフィードバック的に用いることにより自我自身の機能を整え修正しより発展させて行くのではないかと考えられる。逆に，これを自己の側よりみれば，「自己」は自我によりたゞ受身的に用いられるものと云うよりは．自己自体が，

一旦生成せしめられて後は，それ自体が独立して自律化し，逆に自我に対して強い影響力を有する様になると考えることも可能であろう。これ等については次の構造及び機能に関する側面から更に考察する。

〔2〕「自我」と「現象的自己」との構造的関係について

自我心理学における自我の構造が，Freud, S の[59]精神構造及びその中での自我の領域とどの様に関連づけられるかはもう1つ明らかでない。Freud の精神構造図はただ主としてエス，超自我，自我の，無意識から前意識，意識にかけての精神領域における位置関係を示すものにすぎないとも考えられ，自我自体の構造については殆んど論じられていない。一方自我心理学における自我は既に見た通り，生得的な自律的自我装置を基盤としその成長と共に他方，衝動を手なづけ社会的適応的に変容させつゝ，その変容の手段を二次的に自律化し適応機能として自我装置に加え同時に変容

した派生衝動を様々なレベルでとり入れてそれ等を自我機能のためのエネルギー及び動因として行き乍ら、みずからの組織を作り上げて行く。従って、Freud, S. の自我よりははるかに大規模な、無意識から意識に及ぶ連続した戸的構造を有するものであったが、この事以上に例えばこれを図示するとした場合どの様な構造図となるか等は明らかでない。従ってこの様に十分明確化されたとは云えない自我構造と、他方、意識の鮮明度や周辺—中核の概念によってその構成が考えられているにすぎない「自己」とを構造上早急に結びつけようとするのは危険であり又、無理な問題でもあろう。

それ故、両者の構造的連関については大雑把な推測を試みることになるが、私はまず次の様に考えてみた。既に第3章〔2〕の3)で述べた如く、自我構造は上戸部に至る程、社会化・中性化の度の高い派生衝動がより鮮明な自覚の下に、自我動因、自我興味となったものか

ら構成され，これは Hartmann や Rapaport により自分に関する或いは外部の他人や物に関する目的や希望，或いは又超自我が関与して生じるとされる価値感（倫理や真実に関するもの等）等から成ると述べられるが[80)131)]．これ等をすべて狭義の理論における「自己」の内容として含めることも可能であろう。しかし，そもそも自我興味に関する考察は不十分であり，又この概念と Erikson[36)] の"自己同一性"における「自己」の概念（これは大雑把であるが，身体的；心理的・社会的存在としての自分の認識と規定 — self-definition — とされている。）との関連づけもなされておらず，この2つの概念の中では，「現象的自己」は後者とより直接的に関係づけられうるものと思えるが，いずれにしろ，現象的自己は，構造的には自我の下層部よりも上層部とより密接なつながりを有するものではあろう。だが，そのまま上層部のどこかに，即ち，自我興味の中のどれかに或いは自我興味をその内容に凝集させて

含み持つ、より上位のものとして，直接位置づけ自我構造の中に完全に含ませるよりもむしる．或いは既にまとめた自我構造と非常に密着しさはいても自我にとっての鏡映像的性格から．むしろ自我構造（これ自体が十分明瞭化されていないが）に埋没させたり．強いてどこかに直接位置づけようとしない方が今の段階では無難ではないかとも考えられて来る。自我興味が自我組織に含められる以上，「自己」もこれに関係づけられるべきであろうが．簡単に自我興味と同様な位置づけがなされるべきかどうか．これは今後もっと慎重に詳しく研究したい。しかし．いずれにしても構造上も密接な関連を有し．自己は自我の組織全体の中で重要な位置を占めること．又．次に述べる如く．自我にとって重要な動因となるものであることは明らかであろう。

〔3〕『自我』と『現象的自己』との機能的関係について

自我が．本能的衝動の活動．超自我の要請．

環境の現実的要請の3者の葛藤を能動的に解決することにより生ぜしめた変容された派生衝動を動因とする自律的適応機能の獲得により．その組織を発展的に築いて行きながら．それ自身の姿を自己像に反映させて行くのは既に何回か述べた。従って現象的自己は自我の到達点をそのまま反映するものであり これ自体が，現段階までに達し得た最大限の中性化・社会化の度合を含む派生衝動を自律的動因として含み持つと考えられるべきであろう。現象的自己は，その個人の生物・心理・社会的な適応様式及び適応能力を客体として具現すべき性質のものと考えられ．更に．自我にとっても自律的動因としての意味を担うことにより．自我機能を方向づけそれを活性化（vitalize）する役割を自ずと有するものと考えられる。この点、「自己」は「自我」にとって重要な意味を有するわけであるが，前者は後者に対してどの様な影響力を持つのか．換言すれば，後者が既に有している様々な自律

的機能（第3章で述べた内容のもの）に加えて、前者との関係においてつかさどる機能とはどの様なものか、即ち自我は何のために「自己」を生成し、「自己」を自らのどの様な機能に役立てているかについて考察してみたい。

この問題に関連してとり挙げられるのが、先述した統合機能である。これは結局、対現実関係、対精神内界との力動的関係のすべてを調和的に統一し（fitting together[77]）環境と個体との間、精神組織の諸要素間、自我の諸機能間全体にわたる平衡をもたらす機能とされていたが、このやや漠然とした広範囲に及ぶ機能の中でもう少し限定されたより明確な形での機能を考えたい。それは第3章〔4〕の131頁以降で述べた対象関係と精神内界への統制的でかつ親和的な疎通の機能とを単一化して行いうる基本的な自律機能の健全性を基盤とし主観的客観的に社会から是認された形で個性を一貫して発現し得る状態であることを可能ならしめる機能、即ち適応的な統合機能と名

づけたい機能である。結局、自我はみずからの機能、即ち上述の内省的自覚、自分のことを認知する機能等によって「自己」を生み出すが、この事自体の中に既に、こうした統合機能への志向があるのではないかとすら考えられ、この様にして生成した「自己」にのっとって自我はここで定義づけた統合機能をつかさどるものと考えたい。自我はみずからの機能を維持し更に発展させて行くために「自己」を必要とするのであろう。「自己」をみずからの鏡映像として見ることにより自我はみずからの機能を整えその個体を生物・心理・社会的に統合された存在たらしめ、そしてそこから更により高次の段階へと個人の可能性を開発させて行くと考えられる。「自己」はこの意味で、自我にとって不可欠な存在であり、現段階で自我の適応的統合機能の重要な指針となり今後の自我の発展方向を決定するものである。この様に適応的統合機能は自我の他の機能と異なり、生成された「自己

」と常に対照させ両者の関係に基づいて理解されるべきものと考えられる。自己心理学において主体的な機能を背後の欲求概念或いは動因概念として想定し無意識面への研究を進めようとしたり又漠然と主体的機能者の意味あいをその「自己」の概念に含めてしまったりしていること。又自我心理学において自我組織の意識的な上戸部をもっと詳細に研究しようとしたり又「自己」の概念を自我と未分化な形で想定したりしていること。これ等は共に統合的機能を考えようとする方向に向っていることを示すと同時にかいる統合機能を考えようとする時には主体的機能に関する枠組と客体化された現象的自己という内的な枠組といずれか一方のみでは不十分であることを示すものと解される。

そしてこの様な機能により人格が統合された状態はEriksonの[36]述べる同一性の感情（identity-feeling）に匹敵するものではなかろうか。即ちそれは①心理・社会的な幸福感（well-being の

感情）の様なもの②身体的なくつろぎ（being at home）③安心して前進できる（knowing where one is going）感じ④他人から是認されているとの感情等に裏づけられていると考えられる。

従って例えば、自我が「自己」を拠りどころとし、又「自己」に動因としての役割を担わせたら統合的機能をつかさどり上記の如き統合された適応感を得ている状態と云うのは次の様な形をとるものであろう。

即ちある個人Aが、自らの素質に基づき運動を環境の基準に照して変容させつゝ、適応能力を発展させ社会的是認を得ると共に個性的でもある人格を一貫して発現させて行く現在までの過程で"自分は「有能な指導者」である。"との現象的自己像を形成するに至ったとする。するとこの自己像が自我にとって自律的動因としての意味を担うことになり、Aは一貫して「有能な指導者」であるよう自然にふるまう様になる。即ち自我がこの自己像を指針とし

て様々な行動をそれに向って方向づけ、Aに「有能な指導者」たる一定の姿を与える。そこでAはこの自己像に沿った動きをとることにより上述した同一性の感覚を得て行くこととなろう。

この様に、現象的自己と自我とは、その生成及び形成、又構造的意味において密接な関係にありそして両者が互に表裏一体となって適応的な統合機能をはたすことが考察された。

〔4〕両者の関係のあり方と適応について

以上、現象的自己と自我とが自己心理学及び自我心理学の動向の中にも示唆されているが如く本来別個のものと割り切って考えられるよりも相互に密接不離な関係を有するものとして両者を合わせて考察することの必要性を述べ、両者の関連をその形成、構造及び機能即ち統合機能の面で認めた。特に人格に適応的な統合性をもたらす意味で両者の関係が重要であることを考察したが、これは正常な発達を遂げつつある人格を一応のモデルとしたも

のであり，どの様な『自己』を生成せしめうるかは自我機能の健全性によって大きく規定され，他方又，『自己』のあり方が自我の統合機能に重大な影響を与える。

それを指針とし統合機能を遂行し得る様な「現象的自己」を生成しうる自我はそれ自体の全体的な自律機能の水準が高くなければならず又，Hartmann[80]やMenninger[103]等が綜合（synthetic）機能或いは平衡（equilibrium，homeostasis）の機能と称しているところのどの適応レベルに於いても一応考えうれるべき仂き（これ等の概念は先述した様に本研究の"統合機能"にくらべればもう少し大がかりなそしてより漠然とした内容を指すものと考えられるが）に習って一応いろんなレベルの適応の中に様々な段階での統合の可能性が考えられるとしても統合への努力及びそのための自我のエネルギー備給の面でのゆとりが'基盤になるもの'として考慮されねばならない。従って，自我の全般的な自律機能に次ぐ章[III]で述べた如き程

度差の問題、精神病理学的な意味での健全性の問題が含まれる以上、生成される「自己」にも様々なあり方が考えられ、又更にそうした「自己」が指針となって営まれる統合機能にもいろいろな程度、精神病理学的問題が考えられねばならなくなるであろう。

それでは、結局のところ、自我の統合機能は一応「自己」を介してはいるもののみずからの全体的自律機能の健全度によって全面的に規定されそれと正比例的関係にあるとして片づけてよいだろうか。私自身は、確かに前者が後者によって規定される度は非常に大きいと考えるが、自我が「自己」との関係において営む統合機能は全体的自律機能に直属させられてしまいそれは「自己」を括弧内に括っても同じとするよりは、「自己」は統合機能にとり単に媒介変数として以上の意味を有し一旦生成した後は独立的な影響力を持つと考えたい。これに加え、自我および自己の研究法にはおのずからある限界および未発達な問題が

含まれる故，結局，統合機能の研究には目下2つの枠組が必要となろう。

そして，又適応（序論で述べた様な概念内容のもの）と最も直結した重要な意味を有するのが，自己心理学及び自我心理学における理論展開から見ても，この統合機能だと考えられる。

次に自我のかいる統合機能に役立つ「自己」とはどの様なあり方のものであろうか，その条件はやはり先に纏めた自己心理学及び自我心理学を綜合すれば以下の2つに要約されると思う。

即ち，1）自分自身を正確に写し出している

こと。

2）受容的，自己尊重的感情に裏づけられ，それが狭い個人的枠内のものではなく社会的価値基準による是認の意味合を含むものであること

1）は既に述べた通り自我の内省的自覚に基づ

く自己観察（self-observation），自己検討の機能によるものである。自我は観察者・認知者であると同時に自ら観察・認知の対象ともなる点，2重の役割を有するが，自我が客体化された「自己」を統合機能のための指針とし得るためには自我自体もその中で正確な鏡映像としてとらえられていなければならない筈である。又別の云い方をすれば，自らを正確に客体化しうるだけの機能を持った自我でなければ，それに望ましい統合機能を期待することは無理としなければならないとも云えるであろう。2)は健全な自己愛としかもそれが社会化されたものであることを指している。この条件を抜きにしては，個人の存在を支持し，より適応的な方向への発展を可能ならしめる働きを自我機能にいとなましめることは期待できないであろう。

この2つの条件が「自己」の中でどんな風に満たされているかにより自我の統合的機能は規定されると云えようが，この条件の充足自

体が現象的自己像に関する資料を吟味することのみでは検討し盡されないであろう。即ち特にIがそうだが、客観的な枠組から得られた自我機能に関する資料とのつき合わせが必要となる。又先述した如く逆に自我の側からも統合機能を検討するためには目下のところ「自己」との照合が有力な方法と考えられる。結局、「自我」に関する資料と「自己」に関するそれとをつき合わせる事により「自己」のあり方それ自体が明らかになり又「自己」が自我に対して持つ意味が正しく理解されることになる。そしてこのことにより自我の統合機能を吟味することも可能になると考える。この際、統合機能をより十分に果し得るための自我側の条件は、既に触れた通り、この統合機能以外の全般的な自律機能の健全性に他ならないであろう。

この様な条件を「自己」及び「自我」の側に夫々考え、この点から両者を吟味しつゝ、2つの資料をつき合わせることにより自我の統合

機能を検討すること、それを通してはじめて人格の適応性が的確な意味でとらえられるのではないであろうか。

たゞ、この様な統合の概念（即ち、integrative function と仮りに名づけておくが、対象関係と精神内界への統制的疎通とを単一的に行いつゝ、生物・心理学的な個性を主観・客観的に社会から是認された形で心的な持続的に発現せしめて行く機能）及びこれが適応と最も密接に結びつくとの考えはこれまでの自己及び自我に関する理論とくらべかけ離れたものではないにしても現段階では1つの試論である・従って自己と自我との関係のあり方を統合という見地からみて、具体的な適応状態と結びつけ詳細に論じ、統合、及びこれと適応との関係についての研究のために綿密な仮説をたてるのは容易ではない。だが予め次の事は考えられる。即ち、正常者と、神経症・分裂病等との間には統合機能に明らかな違いが認められ、それは前者が「自己」側及び「自我

「」側の諸条件をよりよく満たすことに裏づけられている筈である。神経症と分裂病との違いについては、前者は「自己」側の条件2)においてより問題となるのに対し、後者は「自己」側の条件が2)よりもまず1)において既に問題となり、そうした「自己」を生成せしめている自我機能の全体的な自律のレベルが神経症の場合より著じるしく低下しているのを認めざるを得ないだろう。いずれにしても、不適応2群では「自己」は自我の統合機能にあまり役立つ形のものではないだろうが、この2群間においても「自己」が「自我」に対して持つ意味には各々特徴的な違いが存することと思われる。結局3群はそれぞれ異なった、「自己」と「自我」との関係のあり方を示し、統合機能に違いが見出されることであろう。しかしこの事は次章で述べる如き本研究の全体的な目的及びそれに続く主要な仮説の下に行った実証的研究の累積を通して詳しく検討して行き最後にまとめて考察じるみたい。

第2部：
本研究の問題

<第5章> 本研究の目的

第1部で行った「現象的自己」と「自我」の各々に関する理論的研究及び両者の関係についての考察更にこれ等2つが密接な関連のもとにつかさどる統合機能と人格適応との関係についての試論を通じておのずから本研究の意図するものを示して来たと思うが、結局こうした理論的探究から、人格の適応にとって最も重要なのは統合機能でありこの機能は、自我がみずからの形成過程を通じて生成せしめ発展させて来た現象的自己像を指針とし準拠枠とすることによって営みうるものであると考えるに至っている。従って、適応の研究により、客体化された「現象的自己」を追究しようとする内的枠組と主体的な自我機能を客観的に検討しようとする外的枠組の2つを合わせて用いることは必然的に必要であること

及びこれ等を合わせて用いる時の用い方に関する観点については、統合と云う見地から理論的基盤が用意されたわけであり、これを実証することが本研究の大きな目的となる。しかし、この研究では、更にこの様な理論的見地から適応の実証的研究を行うのみならず、その基本的方法、即ち「現象的自己」に関する資料を得る具体的な方法及び主体的な自我機能の全般的な健全性を推定する方法そして更にこれ等2つの資料をつき合わせ統合性を検討する方法を得、特に前2者の方法はできるだけ確かなものとして確立することをもう1つの目的としている。これ等の目的を含み持ち乍ら実証的研究を段階的に積み重ねようとするものである故、結局、より具体的には次の様な段階的下位目的に分けられる。

1)「現象的自己」と云う枠組からの資料を適応度を異にする対象群について得た場合、一貫して同じ反応のパターンを各対象群についてとられることができるかどうかを検討し

その結果を次に述べる仮説と照合しながら、第1節で述べた理論に基づいて十分考察すること

2)「自我」の全般的な自律機能(一応統合機能を除外した残りの)について客観的な方法による測定を試み、その方法によって理論に沿った形で一貫してこの機能の健全度が測定され得ているかどうか検討すること

3) 1), 2)の目的が果され、2つの方法が、測定法として信頼できる、又理論的に妥当なものとして得られたら、これ等2つの資料をつき合わせて両方の枠組を綜合することにより統合機能を分析し各対象群の特徴を吟味する。この2つの枠組の相補的な用い方、上の2つの結果の照合法は、統合機能に関する「自己」側の条件、「自我」側の条件を有効に検討しうる様工夫し、この様に各種の枠組を綜合的に用い統合性を検討することが適応研究により一層有効であることを実証する。

そして更に、適応度を異にする各対象群の統

合のあり方を、もう一度「自己」及び「自我」の各条件及び統合的意味に還元して詳しい考察を試みる

本研究の目的を具体的に分割して述べると以上の様になる。

ここでは本研究の理論的課題をもう1度繰り返すことは省き、序論で大雑把に述べたことと及び第1部全般にわたり論究し纏めたことをも全面的に課題として背景に担った上で、具体的に目的とするところを述べた。

〈第6章〉研究仮説

上記の目的の下に実証されるべき仮説は大きく云って以下の様なものである。

1)「現象的自己」について

明らかに適応度を異にする対象群間ではこの現象的自己のあり方に違いが認められるであろう。即ち、適応群は不適応群にくらべて、より肯定的な自己評価を示し、社会的文化的

な価値基準が内在化したものと考えられる「理想的自己」との隔たりがより小さく即ち社会的にも是認された受容的な自尊感情（higher self-acceptance, higher self-esteem）を伴うと考えられる自己像を有しているであろう。又不適応群の中でも適応レベルの違いにより自己像のあり方には何らかの違いが認められるがこれ等は諸実験で一貫した結果となろう。

2）「自我機能」について

適応度の違いに対応して，全般的な「自我の自律機能」即ち，対象関係の能動的な活発さ及び正確な現実吟味の機能，精神内界の無意識的な衝動面の統制とそれへの弾力的な親和性即ち二次過程の発達と一次過程の可塑的利用，衝動の分化，自我組織の調和的発達，感情の分化と豊かな成熟性，知能等一次的自律装置の健全性，超自我の圧力に対する耐忍性等の諸機能を総和した全体的機能の健全度の差異が認められるであろう。そしてこの客観的測定はロールシャッハ法によって行いうるで

あろう。

3)「現象的自己」と「自我機能」との関係について。

適応群は不適応群とくらべ、統合機能のための「自己」側の条件(即ち、1)自分自身を正確に写し出していること。2)受容的、自己尊重的感情に裏づけられそれが狭い個人的枠内にとどまらず社会的価値基準による是認の意味合を含むものであること)及び、「自我」側の条件(即ち、自我の他の自律的機能が全般的により健全であること)が共により十分な形で満されているのを、双方の照合により認めることができるであろう。これに対し不適応群では、こうした条件がいろんな形で満たされず、結局、「自己」が自我の統合機能にとって十分な役割を果しうるものとはなっていないと考えられる結果が得られるだろう。又この様にして分析される統合性が人格の適応を最も敏感かつ的確に反映するであろう。

以上3点が本研究全般にわたる主要な仮説の

総括である。これらの仮説を更に具体的に詳細化する必要のある場合は実証的研究編の各章で実験目的の中に補足的に含めて述べることにする。

第3部：本研究の方法について

<第7章> 対象及び行文ト手続

適応の基準を明確に設定することは容易でないが，正常者群，神経症群，分裂病群の3群を，社会的にほぼ自明な形で適応差が認められている3種の対象として用いた。正常者（normals，以後Nの略号で示すことが多い）群は高校及び大学生又一般社会人として普通に生活している人々から成り，神経症（psychoneurotics　Pと略）群は，精神神経科病院に入院中の森田代神経症患者，又分裂病（schizophrenics，Sと略）群はやはり精神科入院中の

定型的分裂病と診断された人々から成っている。これ等各群を、知能・性別・学歴・年令等の面で、可能な範囲内においてなるべく条件を整一化するよう努力した。各実験はいずれもこれ等2つ(正常者群と神経症群)或いは3つの群を対象としている。

各被験者に対し次に述べる様なテストを個別的に施行した。

〈第8章〉「現象的自己」のテスト

本研究で、「現象的自己」はあくまでも意識的レベルにおいて即ち個人にとっての主観的な現実性を有するものをとり挙げようとしており、防衛的歪曲を受けない無意識的な「自己」を間接的資料から推測しようなどとはせず、「自己」研究に関する限りはあくまでも所謂現象学的接近法の枠を守ろうとするものであること及びその所以についてはすでに述べた。そして研究の観点は、「自己」の個人的な内容にではなく、その在り方即ち「自己」

の適応的条件として理論的考察を行ったところの①現実全験を正確に写し出していること②内在的な社会的価値基準に是認された肯定的価値づけ即ち自己受容乃至は自己尊重，の2条件をどの様に満たしているかを検討することに置かれるが，①は他の客観的資料（ここでは自我機能に関するロ・テスト資料）とのつき合わせにより検討さるべきものである故，意識的な自己そのもののテストでは条件の②を問題とする。従って，認識的及び感情的な意味合を含む自己評価のあり方が自ら研究対象となり，既に述べた如く，「現実のありのままの自己」と「是非こうありたいと思う理想的自己」の2つ及び両者の関係をテストしようとするものである。

意識的自己のテスト法として従来から存する各方法は Wylie[167], Baughman & Welsh[12] 等により詳細に展望されまとめられているが，大別して，Q分類法（Q-sorting or Q-sorts）[12, pp 353-355; 167, p41]，形容詞のチェックリスト法[12, pp 350-352; 167, p65]，S.D.法（semantic differ-

ential method (167, p89), 質問紙法, 評定スケール法 (167, pp65-95), 面接資料を収録して研究する方法 (167, pp65-95), 等である。そしてこれ等いずれの方法を用いる場合でも「現実のありのままの自己」(PS〔> Perceived Self〕と記号する), 「理想的自己」(IS〔> Ideal Self〕と記号する)の2側面からの研究は可能であるが, ここでは評定スケール的な質問紙法を用いることにした。それは次の様な理由による。まずここでの「自己」研究は先にも述べた如く個々人の「自己」の内容を知ろうとするものではない故面接資料を利用するやり方はとらない。又意識化され主観的現実となっている自己像を問題にしようとする故, 投影法やその他外的対象とかかわっている個人の行動観察及びその対象関係の成果(広義の作品ともいうべきもの)或いは夢の内容分析等から間接的に無意識に及ぶ「自己」を正しく把握しようと試みるものではなく, 従ってS.D.法は直接意識に迫ろうとするよりは間接的にいわば無意識面をも含 (166, 12, pp352-356), (167, pp262-264)

み持つ正確な自己感情を測定しようとするやり方である点から除外されてくる。そこで残りの方法であるが，Q分類法と形容詞のチェックリスト法（後者はやゝS.D.法に近い性質を有するが，形容詞そのものの選び方がS.D.法の場合の様に間接的意味内容のものを集めるのと異なり，自己感情，自己観を直接的に示す形容詞が集められる点で違ってくる。）の場合は刺激語として，一般的な意味で肯定的な即ち好ましい自己観を意味する語或いは文章と逆に否定的即ち自らを好ましくない（unfavourable）とする意味のものとが予め用意されてしまっており，テスト結果は，2種類の刺激語或いは文章を各々いくつづつ選択したかの量的比較により肯定的自己評価か否定的なそれかに割切ってとり扱かわれる。従って大抵の場合，この様なやり方によるPS分類或いはチェックのみで「自己」が肯定的に価値づけられているか否かゞ一般化して把握されようとするもとにもなり，ISに関するテス

トを同じく施行してPSと比較するまではなく、「自己」の価値づけ方についての資料は得られた事になる。それと現実にQ分類法を用いてPSとIS等の相関を調べる研究もRogers一派の人達により多くなされているが[138]、Q分類は結果の整理統計数学的処理のためには非常に便利に作られているもののそれだけに却って被験者にとってはテスト施行時の手続が非常に煩雑であり私自身も数年前実際にこの方法を用いてカウンセリング中のあるクライエントの動きの全過をとらえようと試みた事があったが、施行中には被験者の注意がかなり分数手続そのものの方にふり向けられねばならず、従って自己に対する関心を充分保ちながら内省活動を続けその中で自在に自己報告(self-report)を行うという自然な流れ(これこそかいま見る「自己」の資料をできるだけありのままで得る上で非常に重要なことと思われる。)が妨げられ又時間的にも長時間にわたるので被験者を不必要に疲労させる嫌いがある

。これはPSとISの両分類を行わせればなおされのことであり従ってこうしたやり方も避けることにした。そこで，結局本研究で用いることとした方法は，具体的には第二編に示しているが，次の様なものである。質問項目は身体的特徴，気質，性格，能力等にわたる個人の存在(being)及び機能(function)について1人称記述を行った文章から成っており，研究を進めるに従って項目内容は次第に人格の機能に関するもの更に明確化して自我の様々な自律的機能が意識に反映されて自己像を構成するに至ったものに焦点づけて作成された。従って後になるほど項目内容そのものが云わば被験者に広く通用する公共的な意味を持って来うるが，それまでの段階の質問項目も，価値づけの基準は個々の被験者にゆだねるとしても内容が全被験者に広くかゝわりうるものであるよう配慮した。'価値基準'換言すれば項目が意味する'好ましさ'(favourability)の基準を一般化した形で予め設定しないで個

各人に任せるため、"はい"、"いいえ"の2種類に割り切った答えを要求することはせず、数段階の評定スケールを用いかつ段階点以外の位置をも必要に応じて使用しうることにし、できるだけ自由度の高い評定法を用意している。この事と共に、各項目毎にPSとISの評定を計2度づつ行わせて行き、その項目が現実の自分をどの程度指しているか、又"是非こうありたい"と云う理想的立場から見たらその項目がどの程度自分のことを指していてほしいかを相互に考え合わせ乍ら評定させ2つの自己の間の一致性、隔たり具合を報告させることは、結局各人が有している内在的価値基準に基づいてどこまで自己を肯定的に受容し尊重しようとしているかに関する資料を自然な形で提供させることになろう。こうしたやり方は被験者の側にとっても手続そのものが平易であり、又一般的基準ではなく自分の基準に従って内省的な評価を行いうるので応答の行為そのものが余分な抵抗なく

比較的スムースに進行するのではないかと考えられる。更に、PSとISを夫々区別しながらこれ等2通りを評定させることは、いずれか一方のみの評定を求める場合にありがちな他方の意味を含み持った応答の混入してくるおそれがなく、この様に反応の意味が夫々明確に保たれることは結果を使用する検査者の側は勿論、被験者にとってもあいまいな応答をみずから自覚した場合に生じがちな応答意欲の減退が防がれる点で望ましいであろう。この様にPSとISの2種類の同時評定法(上述した如きスケールでの)は、反応の現実-理想水準を明確に保ちながら、自分の基準で自由に反応することを可能にするばかりでなく、得られたPSとISの一致性が、自己受容、自己尊重といった自己の心理学的意味から適応上の重要な指標となることを示す実証的研究も数多くなされるが(12, pp172-174) (16, pp202-236)、本研究における様に分裂病者をも含めて、正常者、神経症と合わせ計3つの適応差のある対象群をと

て行われた研究は少数である。従って，PSとISの両評定の関係が有する適応的意味は，各群の資料をたい現象的に肯定的(positive)な評価を示すか或いはその逆であるかを整理しながら蓄積して行き最後に総合的に検討することとする。又，「自己」が現実経験をどの程度正確に反映しているかの問題とともに，この肯定的価値づけに関する問題も，主体的自我機能に関する客観的資料と組み合わせによって研究していくこととし，次には，この様なやり方を通じて行う被験者の自己報告(Self reports)の資料が，「現象的自己」の研究上どの様な意味或いは制約を持つかについて考察したい。

ここで用いる質問紙のみならず大抵の質問紙法における被験者の応答は，「"私は○○である。"①と自分のことを思っている②」と報告したもの③に他ならない。ところが多くの場合，個人の応答は，"私は○○である。"の私を彼に変えて"彼は○○である。"かの如くに受

けとられようとする。このことについては後の第二編の「自己」に関する実証的研究の部でも述べるが，この様に①のレベルを正確に②のレベルとして受けとらないで結果を処理し解釈しようとするのは、本来質問紙への反応が主観的な内的枠組からえられたものであることを忘れ、それをあたかも外的枠組からとらえた客観的資料であるかの如く受けとって誤まった用い方をすることになるが，本研究では、あくまでも②までのレベルをそのまゝ内的枠組に関する資料としてとり扱げようとしている。しかし③の問題即ち，こうして得られた資料が自己報告であることに関して最近論議がかわされる様になっている。つまりここで問題となるのは，結局、被験者が自分自身で意識している②までの内容を質問紙に対し更にはその背後に存在する検者に対してありのまゝに報告しようとするかどうか即ち意識的防衛（対人的な）に関する事柄である。無意識的防衛即ち．被験者が自分のこと

を主観的にとらえている内容であるところのものが，本当のその人の姿であるか，或いは外的枠組から客観的にとらえられるその個人の特性と正確に符合するものであるかどうかは問題としない。たとえ，自分自身を間違って或いは歪曲した形でとらえているとしても，ともかく意識内に描かれている自己像が報告の段階で防衛されるとすればそれをどの様に或いはどの程度のものとして考えるべきかの問題である。Combs[27]等は自己報告におけるかゝる問題点として，(1)自覚(awareness)の明瞭さ (2)表現力及び表現のために用意されている材料或いは方法 (3)社会的な期待(social expectancy)もしくは社会的望ましさ(social desirability)即ちありのまゝを報告することから結果される社会的な評価や処遇，或いは他人から寄せられる一般的な感情や思惑等を考えて無難な様に報告を制限したり偽ったりする傾向，(4)被験者の協力(cooperation) (5)脅威(threat)からの自由さ及びその人の人格の適当さ(adequacy

)の程度，等をあげているが，(2)は既に述べた如く方法のところでできるだけ排除し，(4)は方法そのものとも関連するが手続及びテスト施行時の検者が場面構成の仕方或いは神経症や精神分裂病患者を対象とする時には病院側に十分理解を求め協力を得る様にすること等も間接的ながら重要なかゝわりを持って来る。この様にしても尚かつどうにもならない非協力的態度や(1)に挙げられている自覚の不明瞭さ等は結局(5)においてとりあげる人格の適応性の問題に含めて考えられねばならないものであろう。本来その適応性が研究の課題である故，適応度の違いによって自己報告の仕方に違いが生じて来るとすれば，その違いこそ十分吟味されねばならない問題であり，これは自己報告の資料の累積と，主体的自我機能に関するテスト結果との対比を通じて後に検討しようとするところである。これ等のことから，さしあたって問題になるのは(3)であろう。この点に関してまず考えられること

は，Nの様な適応群とP.S等の不適応群とでは，夫りに各群が意識的防位をいくら加かすとしてもその程度及び加かす仕方に違いがあるだろうと云うことである．即ち，N群ではこのテストが大学の成績或いは社会的評価に無関係であることは各被験者により容易に納得され得，又検者との個人的関係もこのテストの施行及び結果により何ら影響を受けるに足るほどのものでないことは明らかである故，かゝる種類の防位を働かすことは他の2群に比し最も不要である．これに対し他の2群（この2群間にも詳しく見れば差異がこの点で認められるかも知れないがここでは一応一まとめにして考えておく。）ではこのテストが医師の評価，殊に退院等重要事項に関する診断のための資料になるのではないかとのおそれを屢々抱きがちであるが，この点については医師の協力を得てこうした警戒心を解く様に一応場面構成したつもりである。各群のかゝる防位的意味合いは，結局のところや

より累積した資料全体を検討し，3群を比較考察することによってうかがい知ることが可能になるものと思われるが，テスト方法の若干や手続においてもできるだけこうした要因により影響を受ける度合が少なくてすむ様に工夫は試みておいた．先述した如く，各項目毎にPSとISの計2つの評定を行わせ，各人の基準に基づき2つの自己肉の隔たりを表現させることは，この"隔たり"そのものに一般的な社会的望ましさ等がさしあたって予想されないことから，この"隔たり"を個人が実際に意識しているもの以上に小さく或いは大きく歪めて表現しようとする様な防位はあまり考えなくて済むとも考えられる。

この様なことから，本研究の方法を通じて自己報告として得られた資料は，質問紙法そのものが有する不可避的制約をいくらかは受けたものであるとしても，「現象的自己」に関する資料として扱うに足る物とし，それをあくまでも内的枠組から検討しようと試みた。

<第9章>「自我」の全般的な自律機能のテスト

これには投影法の1つであり、自我心理学に基づいて解釈理論が打ちたてられているところのロールシャッハ法を用いる。投影法に関する理論的考察をここで新たに展開することは省略するが、ロールシャッハ法(以下ロ・テストと略す。)は、これが投影法であることにおいて既に次の様な点で他の内観的(subjective)方法や行動観察法等よりも自我機能測定に適した意味を有すると考えられる。

1)刺激状況(テスト材料及びテストの場面構成)の新奇さ、あいまいさ。即ち、これまで殆んど経験したことのない新たな対象、それも明確な公共的特性を有していない対象に対して大へん自由な取り組み方を要求されることになる。被験者はこの様に未知な、そしてあいまいな対象関係(object relation)においては人格内のある特定の機能を選択的に用

いることにより、明確に方向づけられた課題解決を行う形での取り組みは不可能となり、結局人格の全体的な機能を動員した個性的なとり組み方をせざるを得なくなる。又対象関係ではあっても、対象(テスト材料)及び、テスト状況そのものが被験者に対して投げかける現実的要請がこの様に非常に自由度の高いものである、とは、精神内界と関係すること(intrapsychic communication 或いは大雑把な意味で object-relation に対する self-relation とも云われる場合もある。)により内的な資質(resources)或いは材料をとり出してくることを要求することになる。従って精神内界への疎通と対象関係との協同作業により内界からとり出された素材と外的対象との間の個性的な妥協を果すことが、こうした刺激状況における課題解決法に他ならず、これこそ自我機能全般の関与を促すものである。

2) 1)と関連するが、テストの目的が被験者にとり具体的にとらええないものであること

から、テストに対する一定の意識的な構えの用い方がなくなり、結局テスター「まかせのナイーヴな反応が喚起されることとなる。従って無意識的な面の諸特徴が、自由な想像活動(139)(free play of imagination)を通して象徴的に表現され得る。"投影"はこの意味を多く含む(44)(139)。逆に、投影法が本来この1)、2)で述べた如き特性、即ち無意識層に及ぶ精神内界との疎通を重要な要因とした自我の退行的活発な全体的機能を促すものであることから、こうした自我機能が制限されている度合や障害されている特質を読みとることが可能となろう。

3) テスターとの人間関係、反応の言語的伝達、刺激材料が大雑把ながら有している客観的特性等が、社会的現実性を担うものとして殊にこうした全体的にあいまいな刺激状況では重大な意味を持って来る。これ等の条件が介在することにより、現実吟味(reality testing)の能力等自我の現実関係の機能が顕著に浮き彫りにされうる。

4) 投影法にはテストに対する反応を解釈する理論的枠組が存在し，それ等は直接自我機能に焦点を合わせたものばかりではないにしても，深層心理学的観点から内的欲求や無意識的動因をとりあげこれと環境即ち外的現実との関係を力動的にとらえようとするものが多い。

ロ・テストを本研究で用いるのは，先にも述べた如く，これがこうした投影法の特性を十分担っていること，更に結果の解釈をはっきり自我機能のあり方に焦点づけ自我心理学的解釈理論を一応確立していること，それに加え，私自身が臨床と研究の面で約8年にわたりこのテストになじんでいることによる。

ロ・テストにより自我機能が洩れなくとらえられるとか，すべての被験者にわたり一様に人格の諸側面がこのテストの反応として反映されるものかどうかは別としても，被験者が本テストの非構造的（unstructured）な刺激材料を構造化する仕方，即ちインクのしみとも

云うべき図版のどの様な領域・属性を用いそれをどの様な概念内容にあてはめようとするか、又その概念に附する明細化 (specification) 等は第1部で述べた自我機能の諸側面に対応させて解釈しうる資料を提供してくれる。以下、ロ・テストでとらえうると考えられる人格の諸側面、これと自我機能との関連づけを私自身の経験(臨床および研究面での)をも背景としながら、概括的に述べてみる。反応がチェックされる諸側面は、反応時間、反応の位置づけ (Location)、反応の規定の仕方(反応決定因と呼ばれるもの; Determinant)反応内容 (content)、平凡性一独創性、反応と図版の物理的条件との一致性(形態水準 Form Level)、反応全体の豊かさ、偏より具合、可塑性、回復性等であり、これ等を自由反応段階 (Performance proper) 質問段階 (Inquiry)、類推段階 (Analogy Period)、限界検査段階 (Testing-the-Limits) にわたってチェックし、こうして得られた資料について量的分析、反

応の継起及び個人に特有な反応の流れをとらえようとする継列分析．精神分析学的な象徴（symbol）の考え等をもとり入れた内容分析の3種の分析を行う。

ここでは上述したチェックの諸側面の中，反応時間．平凡性－独創性は背景に置いて参考とするにとどめ，又反応内容に関しては，精神分析学的な観点から象徴的意味をとらえようとする形の内容分析は精神分析的解釈の基盤や熟練が必要と思われたため強いて行わないこととして内容は記述的レベルにおいてのみとりあげ．これを反応決定因と結びつけて検討することにした．特に重点を置いたのは反応決定因と形態水準であり，これ等特に前者は一時的な至験によって左右されないところの自我機能の基底的な特性を反映するもの(100)であることが私自身のロ・テスト至験からも確認できる様に思う。

こうして反応のチェックを行ういくつかの側面が有する自我機能的意味を重点的に示すと

以下の様になる。

1) 運動反応

これは図版が有する客観的属性、即ち、形・大きさ・色彩・濃淡等の物理的条件以外のものに基づく反応であり、〝動き〟と云う属性を主観的につけ加えようとするものである。従って、そこには内的な想像過程が含まれており、自我がより下界の領域に接近してそこに貯蔵されている内的資質を利用する機能が予想される。より原始的な衝動性に対する対し方、その方に接近しそれを現実原則の支配する世界に持ち帰りそこで通用する形のものに仕立てあげる働きの質及び程度がこの反応の中に示唆されている。一口に運動反応と云っても、その内容が人間・動物・無生物に大きく別かれ、これ等の中いずれに結びついた運動反応であるかにより異なった解釈が与えられる。それはほゞ以下の様なものである。

人間運動反応（Mと記号される。）

他の運動反応と共通して云えることであるが

上述の如く、反応を活性化するのは衝動の原始的力（archaic forces）から生ずるエネルギーに比較的自由に接近しそれを汲み上げて利用していることを示すものに他ならないが、この様に衝動性に接近してそれを外界とのかゝわりに用いうるということは、かゝる原始的力に対する自我の耐性（ego tolerance for archaic forces"を予想させる。又同時にこの様により衝動的な声に及ぶ内的資質の使用が結果する満足は、それが非常に生産的創造的な形をとる場合は勿論のこと、たとえそれが一時的な空想活動（fantasy activity）に終る場合でも：現実の欲求不満状況に対する耐性（frustration tolerance）をもたらすと考えられる。特に人間を内容とする運動反応は、知覚そのものが、他の動物運動や無生物運動を見る様に単純で大雑把なもの或いは至極漠然としたもの（例えば、動物や無生物の場合はたゞ飛んでいる、走っている或いは火が燃えている等運動内容そのものもごく限られた単純で平方

化なものであり．動物それ自体の知覚も左右対称形であれば大体蝶々らしく見えるなど，無生物の場合も同様，大抵大雑把である。）ではなくこれ等に比すればはるかに複雑で分化度の高いものであり．知覚機能（perceptual skill）[121]の発達が前提となる．又この反応は人間への同一視傾向と深くつながり．他の動物等とは異なる制禦機能を有した人間として自分を感じていること，及び自分と区別される他者への共感性（empathy）をうかがわせるものでもある．これ等のことは自我発達と密接な関連性を有しており．最初に述べたところの運動反応全般に共通して考えられる2つの特性をも，この人間反応はより高次の形で強く担っており，こうした点から．この反応は．Klopfer[100]により．内的安定性（inner stability），情緒の統合（emotional integration），自己実現（self-realization）に関する重要な指標として位置づけられ，自我機能中最も高等なものがかかわることによって生ぜしめられる反応

[100, pp254-261, pp561-600]

とされている。

動物運動反応（FMと記号される。）

本能的衝動は、動物に関する神話、夢、その他の慣用的表現によって象徴的に表現されるとの考えを前提とし、従って、本能的衝動を意識から徹底的に排除しようとする場合は動物を運動的に見ることをしないと云う考え方をする。故にこの反応は、かゝる衝動に対する親和性乃至自覚（awareness）に関係するもので、M反応に比しより前段階的な意味で、本能的衝動の扱かい方、自我組織への組み入れ方、換言すれば情緒の統合に関する自我機能のあり方を示唆するものとされる。他の反応とのつり合いがこの事に関しては重要な問題となり、例えばFMのみが多すぎる場合には、衝動を過度に受けいれすぎていること（over-acceptance of drive impulses）、幼児性等を考える必要が生じて来る。又、Mよりも原初的（primitive）な意味で"圧力に対する耐性"（Stress tolerance）の役割も附せられている。[100, pp 578-579; pp 261-266]

無生物運動反応（mと記号される。）

この反応に関する解釈は他の2つに比すればそれ程実用化されていないとも云えるが，自我の本能的衝動に対するかゝわり方に関係する反応であると考えられる点では前2者と共通する。だがmの場合は，欲求充足を求める衝動の活動による葛藤及び緊張．即ち．諸衝動間のそれ及び衝動と環境の圧力との間におけるそれ等に関連づけられており（100 Pp.266-267; Pp.579-580）．その葛藤を自覚する自我の機能，換言すれば．かゝる衝動の活動が生む葛藤状況を自我にとっての警報としてとり挙げ利用する自我の“警報体制”（warning system）を意味すると考えられている。従って，この反応は不安感情とも密接な関係を有する。

2）濃淡反応（shading response）

これは次の色彩反応と同様、図版に備わる客観的属性の中、情緒に働きかける刺激要因に対する反応である。濃淡は接触感（contact sensation）を換起することが臨床及び実験的裏づけ

により認められており，この接触感は被験者に対して基本的な情緒的安定（basic emotional security）への欲求を喚起すると考えられる。(100, pp270-274; pp580-581)
従って，この刺激に対する感受性，形態の要因と統合して1つの反応に仕立てあげる仕方が，発達初期の愛情欲求の充足即ち最初の養育者との安定した一貫性のある生物・心理的関係に基づく基本的安定感と外界に対する根本的な信頼感換言すれば自・他に対する同一性の感情[36]の基盤がどの様に形成されたかをまずうかがわせる。そして自我発達はこれを母体として進んで行くが，かいる母体のあり方と同時に，愛情欲求をどの様に分化させ自我組織の中に組み入れているか，第一部で述べた本能的衝動（この場合は破壊的攻撃衝動よりもエロス的衝動）の活動により生ずる情緒を自我がどの様に変容させ馴らしているか（taming）にかいわる反応とされる。それ故，習慣化された生活感情（prevailing mood）のあり方（例えば依存感情，対人関係における不

安感，深くかかわらない表面的な情緒的関係の持ち方等）や，この衝動的欲求にたする防衛のあり方もこの反応からうかがわれて来る。濃淡反応はかかる解釈理論を可能にするがこの事と結びついて反応そのものも，接触感に直接関係する表面組織的反応（c, cF, Fc の3種に記号される。），又，濃淡を立体感や遠近感，又拡散している感じ（例えば，霧とか光等）に用いる反応（K, KF, FK, 及び，k, と記号する。）等に分類されている。

3）色彩，又黒白反応

濃淡反応が個人の内部に存在する情緒的期待（愛情欲求に関する）をとり扱う自我機能を反映するのに対し，情緒の実現性（emotional actualities を扱かう自我機能を反映するのがこの反応であるとされる。(100, pp 275-287; pp 582-587) 即ち，色彩は，現実の日常場面においてもそうであるが，図版中最も目立つ属性で，これこそ正に外界に顕在しながら最も強く情緒的反応を誘う刺激に他ならない。従って色彩反応は現実の生活場

面における情緒刺激（多くは対人関係における）に対する反応性の度合とその性質に関連づけられる。この反応は，どの程度明確な（definite）形態概念の中に色彩が統合された形でとらえられるか，即ち色彩刺激に圧倒され形態性への配慮なしに全身的に反応してしまう傾向をどの程度含むか又，形と色との統合に不自然さや無理はないかと云った事．更に，どの様な質の色彩が選ばれそれがどの様な反応内容（概念）と結合されるか．色彩に対する感受性やこの刺激に対する反応にこめられる情緒の深さ，率直さ，強さ又その質の一次過程的な原始性や，二次過程的な中庸性（moderation）等に基づいて吟味される。（記号化の種類は，FC, CF, C, F/c, F↔c, c/F, c↔F, Cn等，その他，色彩反応を継列的に追い色彩反応の力動性を，色彩無視，色彩回避等5種類にチェックすることも行う。濃淡反応についてもこれに似た形で反応の力動性が吟味される。）そしてこれ等の分析に基づいて，本能

的衝動の強さ及び表出の活発さ，対人的な情緒交流の自由さ，深さ（皮尸性：superficiality に対するもの）外界の現実的条件を配慮し社会的基準に基づいて反応を統制する自我の能力等が推定される。色彩反応は，運動反応と並んで自我機能の解釈上重視されるカテゴリーであるが，結局，内部から発動して来る本能的衝動と外部からの情緒的衝撃（emotional impact 或いは challenge）とを効果的に統合的に処理しうるかどうか，情緒的統合と現実吟味とを融合しようとどこまで努力しそれを果しているかと云った点が自我機能に関係づけられるものである。従ってこの反応も，他の運動，濃淡等の反応の出現の仕方と合わせて検討する場合自己実現に向う高等な自我機能を推測する上での1つの指標となりうる。

4）反応の形態水準（Form level）

これは知覚の正確さ，即ち図版に対して反応概念がどの程度適合しているかと云うことと

それを検者に対して伝達する能力及び伝達の仕方によって規定される(100, pp.152-154, 357)。ロ・テストの刺激図版は全体として非常に曖昧さを有しているにも拘らず、そこにはある種の明確さを有する輪郭や様々な形態が含まれておりそれ等が纏められ構造化されることによって他人に伝達可能な概念化が行われるわけである。(ロ・テストはこの意味で適度な曖昧さを具有するよう巧みに作成されたテストとされ、例えば雲模様テスト等の様に刺激があまり曖昧すぎると反応の構成を促進する作用が弱く又、ここで行う如き形態把握の正確さを検討することも困難となる故、刺激内には適度の定形性又反応を促進するリズムの様なものが含まれているべきとされている。)がある図版との一致性(congruency)は運動・濃淡・色彩等の各反応について吟味される。従って、この形態水準評定からは、いろんな外的・内的情緒刺激による被影響性にもかかわらず、外界の客観的条件を検討しそれへの適合を志向

しようとする能力．即ち自我機能の中の現実吟味（reality testing）の機能，一次的自律装置と関係の深い．知覚や知的能力又知的統制力思考力．現実支配力（active mastery）等が推定され得よう。(100, pp 568-570) これ等は自我機能全体の健全性（Ego-strength）に大きくかゝわるものである。

5）形態反応（Fと記号される。）

これは1)．2)，3)．で述べた各反応の意味からみてこれ等と逆或いは裏側の意味を担う反応として解釈される。(100, pp 269-270) 即ち．これは図版の客観的属性中情緒を喚起する要因にかゝわらない形で．結局図版中の輪郭のみ或いは形態要因のみをとりあげて概念を構成する反応であることから，この反応が全体の反応数中で占める量的比重が大切であるが，非個性的に情緒を抜きにして社会的に統制された反応をなしうる能力そしてヌこの反面．自発性を欠く皮膚的な反応性．固く収縮的な（constrictive）適応様式を反映する1つの指標となる．しか

しこの反応は全般的に、自我機能の積極的な面（創造性など）よりも消極的乃至は不健全性にかゝわるものと考えられる。

6）反応の豊かさ、偏倚の度

反応領域、決定因、内容の各分布状況を質・量にわたって吟味すること、又更に反応の平凡—独創水準を検討することから、自我の一次的自律装置即ち素質的側面及び圣験に基づく二次的自律機能の全体的な豊かさ、活溌さ、自由さ、平衡性等がうかゞえる。

7）反応の可塑性、回復性

反応の力動的な文脈を上記の様な諸側面について追跡し又限界検査等によって反応の潜在的な可能性を検討することにより、自我の退行（regression）—前進（progression）の移動機能（shifting）、や平均的な機能効率の他により基本的な潜在能力をうかゞうことが可能になる。

以上に述べたのは、ロ・テストにおいて反応をチェックし吟味する諸側面が持つ自我機

的意味の中本研究に関係する主要なものそして又私自身の口・テスト至験からも確認できるだけの明解さを有するものである。そして各側面をごく概括的にまとめたが、各々が更にいろんな記号化によって示される通り詳しく下位分類され得、諸記号の組み合わせ及びそれ等の量的・質的検討を通じることによが、一次的自律装置、発達の極く初期の基本的安定、(basic security)同一性を確立する問題、その後これを母体として二次的装置の成熟をも基盤として、本能的衝動に対するかゝわり方及び外界の対象に対する受身的更に能動的な関係の持ち方の両面を相互循環的に発展させながら本来の自分を適応的に開発する方向に二次的自律の自我機能を発達させ自我組織を形成している仕方を第3章の〔II〕及び〔IV〕で述べた様な観点から推定する試みがなされうる。即ち、現実吟味、能動的でかつ適応的な制禦を伴った対象関係、衝動に対し成功的な防衛法を確立し二次的に自律した適応的制禦機能を

LIFE C 151

有しつつ衝動性にも弾力的に親和し，そこから創造のための心的エネルギーや内的資源を汲み出したり，外的現実の圧力に耐えるための内的な想像生活を生み出す機能，衝動の分化中性化，それと対応する情緒（感情）の分化と成熟，深くそして活溌な自発性を伴う情緒反応，統制のとれた偏倚のない知的機能，機能全体の自由さ，豊かさ（Klopferの述べる自己実現傾向）等が夫々，諸指標の組み合わせから解釈される。

本研究ではこうした個々の面を後の実証的研究の部で述べる様にいくつかのカテゴリーにまとめてとり挙げるとともに，総体的な自律機能の健全性を問題とする。後者に関してはKlopfer自身も，ロールシャッハ予後評定スケール－RPRS－（Rorschach Prognostic Rating Scale）と称する，自我の顕在的・潜在的な機能の総合的な健全性の測定法を試みており（100, pp688-699），この中には，先述した，反応をチェックする諸側面が殆んどすべて網羅されている。本研究でも

このRPRSは自我組織の形成度，機能の総体的な健全性を測定する有効な方法と考えられる故，これを採用するが，これに関する紹介は省略し，又その他に採用するカテゴリーは第2編第2部で詳しく述べることにする。

第2編　実証的研究

第Ⅰ部：

質問紙法による「現象的自己」の分析

<第10章>〔実験Ⅰ〕(註) 質問紙-その1-によるN，P両群の比較研究

(註)：本研究の場合〔実験〕という用語は，厳密な意味では，当てられるべきでないが，他に適当な言葉がなかったので用いた。従って，ここでの〔実験〕は，ほぼ〔テスト〕の意に近いものである。

〔1〕目的

人格の適応性が「現象的自己」という内的枠組からどこまでとらえられるか．最初の実験として次の仮説の検証を目的とする．

仮説：1) N群はP群よりも「現実的自己」をより肯定的に評価するであろう．2) そしてそれは，その個人の中に内在化された社会的価値基準（理想的自己）により是認された形，即ち，「理想」と「現実」の両自己間のより親和的な関係に裏づけられているであろう．

〔2〕方法

1) 対象：①N（正常者）群80名（男73名，女7名）。いずれも大学生で年令範囲は19才

～31才。②P(神経症)群37名(男26名, 女11名)。いずれも三聖病院に入院中の森田代神経症患者で、年令範囲は16才～35才。但し、この他48才の患者が1名のみ加わっている。

2) テスト材料：質問紙－その1－(－自己評価目録－)の作成

予備調査を経て資料1.(心理学研究 30巻4号 pp 283-284)に掲げた60項目よりなる質問紙を作成した。体格や容姿等身体的側面, 社会性, 意志や気質等に関する諸項目が含まれる。各項目毎に、「ありのままの現実の自己」(PS)と「是非こうありたいと思う理想的自己」(IS)の2つのスケールについてほぼ5段階式(必要になじ5段階目盛以外の位置に評定してもよい。)の評定を行うが、被験者はこの様式の評定をPSとISの2つのスケールを見くらべつつ、しかも互いに他方のスケールと区別しながら一項目づつ行うことによってPSとISの相対的関係をありのまゝに表現しやすく, 又, PSのみの評定

を行う場合に比し対社会的な自己防衛の必要も少なく自己報告（self-report）がスムースに行われうるのではないかと考えた。

〔3〕結果の整理：心理学研究第30巻4号 pp278-281 を参照。

〔4〕まとめ：

仮説の1)及び2)が実証された。即ちN群はP群に比し、より肯定的なPSを示した。（統計的有意差はUテストで1%レベル。）又IS評価については全体的なスコアでは両群間に有意差は認められなかったが、P群はスケール上最も低いPSの段階値と最高レベルのISとを結合させた評定型を多く示し、最高レベルのIS評定に固着する傾向がN群に比し大であり、（χ^2検定 有意差1%レベル）結局この様なPSとISとが分離した排反的な評価のあり方により、PSとISとの隔たりの値即ちDSスコアがP群でより大となった。（χ^2検定、有意差1%レベル）N群はこれに対して、IS評価が常に最高レベルに固執される傾向は示さず、

むしろそれよりも，最高レベルの一歩手前に評定される場合が最も多く，これが中位のPSと結合する評定型が最頻であった。その結果PSとISとの間のDS（"隔たり"のスコア）はより小さくなり，P群に比し，PSとISとがいわば親和的な関係にあることが認められた。以上により，N群は内在化された社会的価値基準であるISのあり方がP群における様に高く，厳格な様相を呈しておらずまたPSも，P群にくらべれば，ISに許容されたとでもいうべき形で肯定的に評価されているのが認められた。このことは換言すれば，N君子にあっては，PSがより重要な意味を持ち，これを拠り所にしながら現実に適応的な前進を続けていると考えられるのに対し，P君子ではPSが適応的な動きを促進する役割を果しているとは考えられず，むしろISの方に神経症者はより大きい関心を寄せており，これは現実水準での適応にとりあまり積極的意味を持たないのではないかということを推察させる。

〈第11章〉〔実験II〕(=〔実験A〕) 新偵向紙-その2-によるN, P, S3君群の比較研究

〔1〕目的

偵向紙-その1-をもとに、更に組織的に項目を作り変えた偵向紙-その2-(資料2自己診断表)を用い、これによっても実験Iと同様にN, P群間の違いを見ることができるかどうか、又対象として更に精神分裂病群(S群)を加えることにより適応レベルの巾を拡大させ、これ等3群間にどの様な自己評価の違いが存するかを比較検討する事を目的としている。又これは第2部の実験Vと同時に行ったものであり、以下の事柄をも合わせて本実験の目的としたい。即ち、この様に自己意識の分析と云った内的枠組による方法と、逆に、後述する如く自我機能を外的客観的枠組から推定的にとらえようとするロールシャッハ法とでは、各々どの様な形で人格適応がそこに反映されるか、両方法による結果の対応

性、関連性を検討し、第一編第二部で述べた本研究全般にわたる仮説を検証することがそれである。

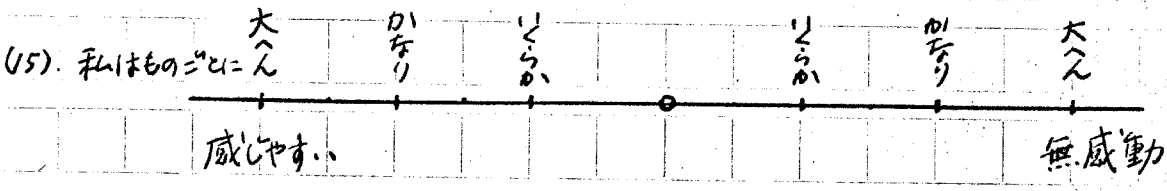
〔2〕方法

( ) 対象：① N群28名(中、女15名)。P群30名(女4名) S群29名(女13名) 平均年令はN、P、Sの順に24.6才、29.7才、32.9才、又年令範囲は同じ順に、19才～40才、19才～37才、18才～42才である。N群は大学生及び普通に社会生活を営む一般成人、P群は精神分裂病の入院患者(三型病院) S群は定型的分裂病の診断を医師により下されておりその中でこうしたテストがともかく可能な者、従って陳旧の分裂病者等はおのずから省かれる。(京大病院及び岩倉病院) 又本実験では精神分裂病の病型については特に問題としないが、殆んどが破瓜型又は妄想型である。又知能に関しては、全群を検査して厳密に統制することは行わなかったが、N.P.群では普通レベル以下と疑われる者はなく、又、S群で低

知能を疑われた者については知能テストを施行しその結果により普通レベル以上でない者を数人除外した。

2）テスト材料：新質問紙（その2－L自己診断表）の作成

①応答様式は〔実験Ⅰ〕と同じ方法を採用した。即ち、「ありのままの現実の自己」(PS)を評定するスケール（略してP）と「是非こうありたいと思う理想的自己」(IS)を評定するスケール（略してI）を並置し各項目毎に両評定を一度に行わせる。但し評定段階は図示した通り6段階法を用い，必要に応じ目盛以外の位置にも評定できる。中央の空白の丸印の箇所のみは評定を避けるよう指示した。これは〔実験Ⅰ〕の結果で評定が中央に少し集まりすぎる傾向がみられたことと，PS



の評価を大きく肯定的と否定的に分けて整理し，次2部〔実験Ⅳ〕の結果との対応性を見

ようとする目的による。

②項目は実験Ⅰにおけるよりもより組織的に作成しようとしたことと、かつロールシャッハ結果と個人毎に比較対応させ、外的枠組からとらえられる自我機能とその個人の中に現象的自己像の主要なもの1つとして意識的にとらえられている自我機能の云わば反映像（mirror-image）とを内的枠組により分析し両者を相補的に用い又両者の関係を吟味することにより各々の方法のみでは得られない人格の適応機能の一層重要な面に関する指標を提出そうとするところから次の様な内容のものにすることとした。即ち、ロールシャッハ法における自我機能の解釈仮説の中から比較的明解でかつ重要なものそして実証的研究（妥当性に関する）が様々な角度から多く積まれているものを選び、それを第一編で述べた如く、自我理論の要点と照合して自我の自律的機能の健全度に関する重要な指標を網羅しうる様編成したもの（第一編第4章及び後の

第2部参照）をもとに、それが個人の現象的自己像としてとらえられた形になるよう一人称記述の意識的用語に置きかえてそれを用いることとした。それ等は結局(1)情緒的自発性（情緒の生々しい活発さ）に関するもの17項目 (2)内的制禦機能に関するもの11項目(3)対外的制禦機能に関するもの8項目、(4)体験型に関するもの7項目、(5)受情欲求の基本的充足及び分化した成熟性に関するもの4項目、(6)攻害欲求の活動の仕方に関するもの4項目(7)情緒の全体的な安定性及び適応性に関するもの13項目、計63項目より成っている。

客観的な解釈用語を自然な無理のない形で一人称記述の意識的用語に置きかえることにはいろいろ困難な点があったが、これは後の実験で更に改訂して行くこととし、最初の試案としての項目作成を行った。この質問紙の有用性の問題も本実験結果の分析過程を通じて自ら検討されることになろう。

又本質問紙による調査の実施は、個人テスト

の形で行ったが、結果の整理では部分的に応答の不十分な被験者を除いて行ったところがある。

〔3〕結果の整理及び考察

(表1)の右側は現実的自己評価について各被験者毎に肯定的評価と否定的評価の分類を質問紙の各下位カテゴリー毎及び全体にわたって行い群間比較を試みたものである。尚、体験型については、他の下位カテゴリーの肯定的、否定的評価に該当するものとして、拡張的評価(自己の体験型を内向、外向いずれの傾向にしろよく発達しているとする評価)とその逆の収縮的評価と云う形の分類を行い、更にどちらの向性を優位にした自己評価を行っているかにより、外向的評価と内向的評価に分類した。又、肯定的、否定的両評価の分類基準としては、(1)、(2)、(3)、(7)ではそのカテゴリーに属する項目数の40%以上に否定的評価を行ったか否かにより否定的評価者、肯定的評価者とした。更に各項目毎の肯定、

(表 I) 自己評価の群内比較

DS(「現実」と「理想」の両自己評価間の「距たり」) (t テスト)			対象				PS(現実自己評価)	対象			(χ²検定)		
P-S	N-S	N-P	S	P	N	自己評価下位カテゴリー	評価の分類	N	P	S	N-P	N-S	P-S
**		**	16.25	49.00	26.75	情緒的自発性	肯定的	24 (人)	13 (人)	18 (人)	**		**
							否定的	4	17	6			
**	*	**	9.50	27.50	16.00	内的制御 (制御)	肯定的	19	8	14	**		*
							否定的	9	22	10			
**	*		4.50	14.00	10.00	外的制御 (制御)	肯定的	20	26	20			
							否定的	8	4	4			
**		**	6.50	17.50	9.75	体験型	外向的	12	8	16			**
							内向的	16	22	7			
							拡張的 (両義的)	20	9	19	**		**
							収縮的	8	21	4			
**		**	3.00	10.00	4.25	愛情欲求	肯定的	20	14	12			
							否定的	8	16	10			
**		**	4.50	10.00	6.00	攻撃欲求	肯定的	16	4	14	**		**
							否定的	12	26	8			
**	**	**	9.75	34.75	17.25	全体的安定性	肯定的	12	5	16	**		**
							否定的	16	25	8			
**		**	47.50	164.00	87.05	全体のスコア	肯定的	17	5	16	**		**
							否定的	11	25	8			

註. * $P<.05$ ** $P<.01$

否定両評価の分類は、スケールの細かい段階

値を一応無視し、スケール上の中央点を境として一律に行うこととした。又受情欲求と攻患欲求に関するカテゴリーではその項目数が少ないので次の様な整理法をとった。即ち前者では、受情欲求の充足と受容そして依存性が項目に配されているが、〝自己の受情欲求を受容し、又この欲求が満たされている〟とする者を肯定的評価者とし、それ以外を否定的評価者とした。又後者では、〝潜在的攻患欲求を一貫してあまり強くないとし、その上この欲求の表現が自由にできる。〟としているものを肯定的評価者、それ以外を否定的評価者として分類した。又質問紙全体のスコアでは、体験型のカテゴリーに属する項目等、肯定、否定の勾配が意味的にはっきりしにくい10項目を除き50項目について集計したが、否定的評価の項目数が40%以上に及ぶものを否定的評価者、他を肯定的評価者とした。又表の左側は「現実的自己」と「理想的自己」の両評価間の〝隔たり〟DSの値を各被験者に

つき、項目毎に算出しそれを各下位カテゴリー毎及び全体について集計し、それぞれ合計値を出して群間比較を行ったものである。このDS値の出し方は〔実験I〕と同じ方法による。無応答項目が含まれる場合は、全項目に応答したとしての理論的推定値を算出したが、無応答項目が多すぎる被験者は除外して集計した。順を追って結果を見ると以下の通りである。

(1) 情緒的自発性：具体的な項目は後の項目分析表に示した通りであるが情緒反応の活発さ衝動性への接近、自己実現等に関する内容が含まれている。P群に否定的評価者が多く、DSの値も他の2群に比し著じるしく大でありN, S.いずれの群に対しても夫々有意差を示す。N, S両群間にはRS, DSの値とも有意差が認められない。

(2) 内的制禦　衝動やそれに附随する情緒(affects)を処理する能力、及びその自律的機能に対する自信及び知的制禦力等がこの項目に含

まれる。ここでも3群は1)と同じ結果を示した。殊にS群はDS値が著じるしく小さく、N群に対しても有意差を示す程である。

(3)外的制禦　これは外的(社会的)基準に従い感情表現や行動を調節する機能に関するものである。(例. 私は女のことをする時まわりに迷惑をかけないようにとの気づかいをよくする方だ——しない方だ. 等.)ここではPS評価に3群間の有意差が見られない。表の頻数分布から見て項目の作り方に問題の含まれることは否めないが, P群が著外背定的評価を示すのは, この群が対社会的な面で神経を使いすぎるとされる傾向をいくらか反映するものかも知れない。DS値ではS群が同じく小さく, 他の2群との間に有意差を示している。

(4)体験型　N, P両群に内向(行動の基準を専ら自己の内部に置く傾向, これに対して, 外界の基準や目標により主に行動する傾向が外向傾向とされる.[100])優位なPSが多く, 殊に

P群ではその傾向が大であるのに対し，S群は外向優位のPSを多く示し，PとS両群間には有意差が見られる．又P群では，収縮的なPSを他の2群よりも有意味に多く示し，DS値も他の2群に比し有意差をもって より大であった。尚N，S両群間にはにはここでも，PS，DS値とも有意差を見なかった。

(5)愛情欲求　P群にやはり否定的評価傾向が大でありDS値の大きさに関してはN，S両群との間に夫々有意差を示す。

(6)攻撃欲求　P群は他の2群に対して，攻撃欲求が潜在するのにそれを外部に表現しえない〃と云う内容を持った否定的評価の傾向が大であり，PS，DS値とも他群に比し有意差を示した。

(7)情緒全体の安定性　ここには所謂〃浮動的不安〃(free-floating anxiety)や身体的不安，情緒の緊張や葛藤，対人関係における不適応感等を示す項目が含まれるが，P群はこれまでの3つのカテゴリーにおけると同様，低

いPS値と大きいDS値とを、他の2群との間に有意差を以って、示した。S群は最小のDS値をとりN群との差も有意である。

(8) 全得点　質問紙全体を通じての総得点に関する結果もこれ迄の下位カテゴリーの結果に沿っており、特に(1)、(4)、(6)とはPS値、DS値いずれについても全く同じ得点順位及び各順位間の有意差を3群は示している。

以上を綜合すれば、P群は全体を通じて、より低いPS値とより大きいDS値とを他2群との間に夫々有意さを以って示し、否定的な現実的自己の評価と、高い水準の理想的自己を選ぶ傾向を明確に自らの特徴としている。N群とS群とは共にこのP群と逆の傾向を示し、殊にS群とP群との差は著じるしく大である。N、S2群間においては殆んどのカテゴリーにつき有意差を見なかったが、全般に理想的自己の水準は一貫して低くS群では更にN群を下まわるものである故、DS値は殆んどいつも3群中最低値をとり、制禦に関する2つのカ

テゴリー及び全体的安定性に関するそれとにおいてはN群との間にも有意差を示している。尚、ここでは、〔実験I〕を参考にし、IS値(理想的自己の評点)はとり挙げなかったが、これは、評定スケールの枠が限定されていることからもPS値とDS値を問題にすればそこにおのずとIS値のレベルは含まれて来る点・又、ISについては絶対的な高さ等は問題にしようもなく、結局、PS値との間の相対的な中即ちDS値が、「現象的自己」のあり方の中の自己受容、自己肯定(尊重)の問題とも有意味に関係づけられうることが、従来の理論的実証的研究からも一般的に認められている(2)27)167)点等を考慮したことに基づく。

以上の様に、正常者(N)群と神経症(P)群との間には〔実験I〕におけるのと同じ結果が見られたのに対し、新たに加えた分裂病(S)群は、同じ不適応群ではあり乍らも、正常者群との比較において、P群とは著しく異なる結果を示した点が注目される。「現

象的自己」のあり方に、仮説に従った不適応性が顕著に反映されているのはP群においてのみであり、S群では、これまでの分析では、P群よりむしろN群に近似した様相を呈するがそれ以上に、独特の現象的な問題を自己評価の中に示しているとは云えないであろう。この点については、更に〔実験III〕及び〔実験IV〕を重ねながら検討したい。

次に表2は各群の反応を項目毎に比較した項目分析の結果を有意差のあった項目のみについて掲げたものである。この分析においても上に見た様にP群のみが特に他の2群から弁別されやすい傾向を全体的に認めることができる。だが、この様に項目毎に見て行けば、N, S群間にも微妙な応答差をうかがうことができる。即ち、(表2)中▲印を附した項目ではN, P両群が同様に否定的評価を示すのに対し、S群のみが他の項目におけるのと同じ様に肯定的評価の傾向を持続させている。その結果N群との間にも有意差が生じており

このことから、S群は、N群と同様肯定的評価を行うにしても、それがかなり固執的に全項目に及ぶと云う点でN群とは異なった独自性を見せている。これは質問項目の提示の仕方が、もしどの項目も肯定的内容を先に示すと云った一律の様式をとっていれば、それに対する機械的な反復応答を意味するのではないかとのおそれも分裂病群では考えられるが本質問紙では、肯定的評価と否定的評価の方向を何箇所かでは逆転させて配してあるため、そうした面で信頼性の疑われる応答がなされているものとは考えられない。この点は後の実験ではもっと慎重に考慮するつもりであるが、かいる項目分析にあらわれたS群の特徴を利用することによりS群の弁別性を、Key itemsをとり出す事を通じて、少しでも増すことは可能であろう。

又、本質問紙の信頼性を折半法により次の様に検討した。即ち、現実的自己の評価PSについて、偶数番と奇数番の各項目を分割し、Sp-

earman - Brown[89] の信頼係数を求めた。その結果、全群を通じては、r = (+).91 であり、各群別に見るとN群が r = (+).87 P群が r = (+).91 S群で r = (+).88 となったが、これによりかなり高い信頼性があるものと考えられる。

（表2）項目分析（群間比較で有意差を見た項目のみ例示）

下位尺度	項目番号	項目内容	対象 N 肯(人) 否(人)	対象 P 肯(人) 否(人)	対象 S 肯(人) 否(人)	群間比較 (χ^2検定) N-P	N-S	P-S
I.	②	私は工夫したり、独創的な思いつきをしたりするのがとくいだ ——— 不えてだ	22 6	16 14	16 7	*		
	⑧	私は自分の能力を生かしている。——— 生かせていない	16 12	15 15	19 2		*	** ▲
	⑱	私は自分の気持や感情を自由に表現する —— 内にしまって上べをつくろう	16 11	13 17	18 6			*
	㉒	私は人と感情をこめたまじわりをよく持てる —— 持ちにくい	23 5	15 15	15 6	*		
	㉔	私は自分の中の衝動的なものに親しみを感じる —— こわい気がする	24 4	13 17	13 7	**		
	㉕	私はかっと興奮しやすい傾向が強い方だ —— ない方だ	12 16	8 22	15 7		†	** ▲
	㉙	私は自分のしたいことがよく行えている ——— 実現できない方だ	15 13	14 16	19 2		*	** ▲
	㉛	私は自分が好きだ ——— 嫌いだ	16 12	10 20	15 8	†		†
	㉞	私は面白味のある人間だ —— ない人間だ	19 8	11 19	16 6	*		*

（表2）の続き

因子	番号	項目内容	対象 N 肯否	対象 P 肯否	対象 S 肯否	群間比較(χ²検定) N-P	N-S	P-S
	35	私はピンチ(危急の場合)に強いと思う ——— 弱いと思う.	20 8	13 17	15 8	*		
	61	私は活力に満ちている(生き生きしている) ——— 無気力だ.	20 8	8 22	20 4	**		**
2	3	私は物ごとの判断がするどい ——— にぶい.	23 5	16 14	18 5	*		
	4	私は人に引っ張られてもうえそうにない考えをする傾向が強い方だ ——— ない方だ.	21 7	15 15	14 8	*		
	21	私は自分自身を頼りにできる ——— 頼れなく不安だ	12 16	3 27	14 9	*		**
	22	私は自分の感情を何とか処理することに自信が持てる ——— 自信がない	25 3	17 13	13 7	*		
	32	私は意志が強い方だ ——— 弱い方だ	15 13	5 25	14 9	**		**
4	37	私は社交的だ ——— 非社交的だ	19 9	12 18	17 6	*		*
	38	私はその場の雰囲気によくとけこめる方だ ——— とけこめない方だ	14 14	13 17	19 3		*	** ▲
5	43	私は依存心(人に頼る気持)が強い方だ ——— ない方だ	11 17	9 21	16 7		*	** ▲
	45	私は人の好意や親切を心やすく受けられる ——— 受けにくい	24 4	19 11	16 6	†		
6	49	私は人と正面衝突しなければならない時不安だ ——— こわい	13 15	9 21	13 9			*
	53	私は人に支配されやすい ——— 人を支配(指導)する方だ	13 15	8 22	18 4		*	** ▲
7	50	私は何かと疑い深い方だ ——— 疑わない方だ	22 6	10 20	16 6	**		**
	51	私は人づきあいがいい方だ ——— 悪い方だ	25 3	19 11	20 2	*		†
	52	私は人とのつきあいが楽しい ——— わずらわしい	17 11	13 17	18 5			*
	54	私は自分の境遇に満足している ——— 不満だ	19 9	11 19	15 6	*		*
	55	私は何かと不安が強くおこる方だ ——— おこらない方だ	11 17	2 28	13 8	**		**
	56	私は自分の体のことが気になる方だ ——— 気にならない方だ	14 14	6 24	12 10	*		**
	57	私は男(女)らしい ——— 男(女)らしくない	20 8	12 18	17 6	*		*
	58	私は気分が明るく晴れやかな方だ ——— 暗く沈んだ方だ	6 22	6 24	15 8		**	** ▲
	59	私は情緒が安定している ——— 不安定だ	14 14	9 21	15 7			**
	60	私の内部には緊張や葛藤が強くある ——— ない方だ	11 17	3 27	13 8	*		**
	62	私は正常だ ——— 異常だ(ふつうでない)	22 6	15 15	14 9	*		
補充		〔註 † …… P<.10 * …… P<.05 ** …… P<.01〕						
4	40	私は社会的に活躍するのが好きだ ——— 嫌いだ	16 12	19 11	18 3		†	† ▲

〔4〕まとめ

自我機能に関するロールシャッハテストの解釈理論に基づいて実験Ⅰよりも項目をより組織的に作成した新たな質問紙を用い，又分裂病群を更にかえて，3つの対象群がどの様に適応の違いを反映するかについて分析した。その結果、適応群であるN(正常者)と不適応群の1つP(神経症)との間には実験Ⅰの結果を更に裏づける差が認められた。しかしもう1つの不適応群であるS(分裂病)は，Pとは異なりむしろNと同じ様な応答傾向を全体を通じて示した。従ってP群のみに独りきわ立った現象的自己のあり方が見られたわけであり，S群はその不適応性を直接的に反映する様な反応特徴は全体として何ら示さなかった。しかし項目分析では，S群はN群以上に固執的な形での肯定的自己評価を与え，そうした云わば過度の肯定性を微妙にとらえれば，それをこの群独特の1つの特徴として示すこともできると考えられる。不適応2群

における夫々特異な反応傾向については、第一部の終りおよび第三部で更に考察する。

又、本質問紙の信頼性はかなり高い信頼係数を以って認められた。

<第12章> 〔実験III〕客観的尺度として用いられている既成の質問紙 — Barron, F. の "Ego-Strength" スケール — による実験

(但しこれは村山正治との共同研究[142]である。)

〔1〕目的

〔実験II〕に見られた様な反応特徴を3対象群が他の質問紙においても示すかどうか、殊に応答を本研究が意図している様な、現象的自己のあり方として内的枠組からとらえようとするのと異なり、質問紙を1つの客観的尺度として用いて応答を外的枠組から見ようとする様なスケールにおける3群の応答はどうかを見ようとするものである。その結果からこれまでの2つの実験での結果を質問紙全

般に関するものとしてかなり普遍化して考えうるものか或いは本研究の様な意図の下に作成された質問紙のみに見られるある限定されたものとして考えるべきかを検討する。又特にBarron, F.[10]のスケールを選んだのは、このスケールが「自我機能」の強さを質問紙法によって客観的に測定しようとする点に興味が持たれたことと、この方法は1953年に出されて以来米国で多くの注目を集め、以後、臨床的に、心理治療の効果を被治療者側の基本的条件としての"自我の強さ"から予測する方法として盛んに用いられ、又その妥当性研究が現[11)96)126)160)]在までに数多く重ねられて来ていること等による[161)162)165)]。

〔2〕方法

1) 対象

(表3)

	人数			年令	
	計	男	女	平均	範囲
N(正常者)群	85(人)	83(人)	2(人)	18.9才	18才~21才
P(神経症)群	37	26	11	27.6才	15才~52才
S(分裂病)群	40	27	13	32.0才	16才~48才

神経症群は三聖病院入院中の森田式神経症患者、分裂病群は芳木病院入院中の定型性分裂病患者で知能が普通以上、又陳旧のものでなくかつテストの可能な患者を医師に選出してもらった。

2) テスト材料：Barron, F.[10]の"Ego-Strength"scale

"Ego-strength"スケールは、MMPIの中から自我機能に関係の深い68項目をBarronが選択して作成したものである。彼によれば、自我機能の一般因子は次の様な諸側面から考えられるとされる。即ち、身体的な恒常性(stability)と健康、明確な現実感覚(strong sense of reality)、適応感及び活気(feelings of personal adequacy and vitality)、許容的な道徳性、倫理的偏見がないこと、情緒表現や情緒交流の自発性、知能等がそれである。自我機能の健全さについては既に第1部第3章の[4]で総合的に考察しその中にはBarronの考え方も参照されていたが、彼は自我心理学的観点からかかる自我の強さを考えており今回の本研究でとり扱う自我

機能の諸側面とつながりを有する。即ち、Barronの"自我の強さ"の概念の中、身体的健全さや知能は自我の一次的自律装置と関係が深く又、許容的な道徳感や倫理的偏見の無さ等は自我理想及び弾力的な移行(shift)の機能即ち衝動の解放に活動する一次過程への一時的部分的な自由な接近と関係づけられ又、適応感は自我同一性と深い関係を有するものであろう。このスケールは、初めはMMPIを因子分析することによって作成されたものではなく、Barron自身の自我心理学に基づくオリジナルな発想の下にMMPIより任意に項目を選出して編成したものである。しかし、作成されて後はBarron自身も様々な構成概念妥当性(construct validity)の研究を行っており、又他の多くの研究者達によっても妥当性が検討され、肯定的結果も多く得られるに至っている。その中には、因子分析法によりこの"Ego-strength"スコア(ES得点)がMMPIの中で一般因子を構成しているのを実証する研究も

含まれる[96]。又信頼性についても，折半法で $r=.76$ 3ケ月間隔の再テスト法で $r=.72$ の値が得られている[10]。

本実験で実際に使用したのは，Barronのスケールを共同研究者と共に翻訳したものであるがこれに際しては東大で標準化されつつある日本人向きのMMPIをも参考にし，できるだけ自然な日本語でしかも原版のニュアンスを伝えうる言葉にする様努備調査等を試みて努力した。又宗教に関する項目等で我国では明らかに不適切と思われる項目は除くこととし（表4）に示した通り，68項目中52項目を採用することとなった。応答様式は各項目に対して，A〔その通りだ〕，B〔どちらかと云えばまあそうだ〕，C〔どちらかと云えばそんなことはない方だ〕，D〔そんなことはまずない〕の4つを選択肢として用意し，その中のいずれかに応答する形をとった。原版では〔そうです〕（true）と〔ちがいます〕（false）の2つの選択肢に限られていたが我国

では更に各々を2分し計4通りの答え方を用意した。これは予備テスト時，"true"とか"false"の2つに割り切ることを難かしいとする訴えが多かったことによる。項目の配列も無作為に変えた。尚本スケールは本来ならばMMPI全部を施行しその中よりES得点として算出さるべきものであるがBarron, F.に直接問い合わせたところ，その時の都合でこれの

(表4) "Ego-strength (ESと略)" スケール

下位カテゴリー	項目数 (Barron)	項目数 (本研究)
1. 身体的機能生理学的安定性 (physical functioning and physiological stability)	10	9
2. 精神衰弱症状やひきこもりの傾向 (psychasthenia and reclusiveness)	10	10
3. 宗教に対する態度 (attitude toward religion)	6	1
4. 道徳的態度 (moral posture)	11	11
5. 現実感 (sense of reality)	8	8
6. 自己適応感 (personal adequacy)	11	7
7. 恐怖症状，幼児的不安 (phobias, infantile anxiety)	5	5
8. その他	7	1
	計68	計52

みをMMPIとは別に用いる時もあるとの返事であった故、ここでも本スケールのみを単独に施行した。尚この"Ego-strength (ES)"スケールの翻案は資料中の(資料4)「自己評価表」(後題)である。

〔3〕結果の整理と考察

(表5) ES得点の3群間比較

	ES得点 対象 N	P	S	3群間の差の有意性 (t検定) N-P	N-S	P-S
ES素平均値	35.4	26.4	32.4	*** $t=6.35$	* $t=2.43$	*** $t=3.69$
▲修正ES得点平均値	46.0	34.4	42.1	(分散比については各群間に有意差なし)		
Barronの被験者の平均値	50.92 (又は52.3)	41.04				

註 ▲修正ES得点の平均値を算出したのはBarronの結果と対照させるためであり、6ヶ月目を用いたとした場合の理論的推定値である。

尚 *…$p<.05$ **…$p<.01$ ***…$p<.001$

表5によるとBarronの値に比し、本被験者では低目の結果が得られたことになる。P群が最も低い値をとり次にS群続いてN群の順に値が高くなっている。3群間の差はいずれも有意であった。ここで問題となるのはS群が

P群より高い値をとることであろう。Barron自身はS群を対象に入れていない。これは彼が、一応心理治療の対象たりうる患者を考えその範囲内で治癒し易さを予測しようとするためと思われる。他の関連研究もみな分裂病者を対象に含めていない。従ってS群の結果については対照させてみる資料がないわけである。しかし、これが「自我の強さ」を測定する客観テストとして提出されたものであることを考えると、分裂病群の方が神経症群より自我の強さが高度であると云う肯づきがたい結果を示すことになる。Barronの「自我」に関する考え方が本研究におけると同様、自我心理学に基づいている以上、理論と明らかに矛盾した結果が出ている。これにはこのスケールそのものに妥当性研究の余地がまだまだ残されていることを指しているとも考えられようが、更にもう1つ質問紙法の用い方、解釈法に関する問題がここからも生じて来るのではなかろうか。即ち被験者の答えをそのま

な客観的事実を述べているものとして検者の枠組でとらえるよりも，「〝自分は○○である〟①と自己をみている②」と云う形における②のレベル．つまり被験者の内的枠組での現象的資料として受けとった方が良いのではないかと云うことである。もしESスケールに対する被験者の反応を①のレベルで受けとるならば〔実験Ⅲ〕の結果は，このスケールが「自我の強さ即ち機能的健全性を測定するのに適さないとの資料を1つ提供することにもなろう。だが，結果をもし②のレベルで受けとれば本結果も〔実験Ⅱ〕と同様．S群に特徴的な肯定的自己評価の傾向，P群に顕著な否定的自己評価の傾向を示す資料として受けとれる。しかし，これ等が夫々分裂病，神経症の各群に固有な反応パターンであるか否かについては次の〔実験Ⅳ〕の結果をも参照して慎重に検討したい。

次の（表6）はESスケールの項目分析である。各項目毎に3群間の比較を行い差の有意

(表 6) 項目分析

項目番号		A	B	C	D	記号	差の有意性 N−P	P−S	N−S
1	N	12	45	23	5	0	***	***	—
	P	5	3	7	12	0			
	S	8	18	5	9	0			
2	N	3	19	40	23	0	*	—	(*)
	P	6	12	7	12	0			
	S	8	6	7	19	0			
3	N	1	6	47	21	0	***	***	(***)
	P	10	11	8	6	2			
	S	0	4	7	28	1			
4	N	12	25	33	15	0	—	(*)	(*)
	P	2	9	7	17	2			
	S	2	7	3	16	2			
5	N	2	27	36	20	0	***	***	—
	P	22	11	2	0	2			
	S	1	11	15	16	1			
6	N	1	13	48	21	2	***	—	*
	P	5	1	11	7	3			
	S	3	7	11	17	2			
7	N	7	36	33	8	1	***	***	***
	P	16	17	1	3	0			
	S	11	14	10	15	0			
8	N	3	16	38	27	1	*	—	*
	P	7	7	10	10	3			
	S	10	7	3	18	2			
9	N	7	29	37	11	1	—	—	***
	P	10	8	11	7	1			
	S	7	5	13	14	1			
10	N	14	29	28	13	1	*	—	(***)
	P	6	11	6	13	1			
	S	9	7	4	18	2			
11	N	11	19	33	22	0	***	***	—
	P	18	10	7	2	0			
	S	9	6	10	14	1			
12	N	3	20	25	36	1	—	(*)	(*)
	P	5	11	8	13	0			
	S	5	4	5	25	1			
13	N	11	41	25	7	1	(*)	—	*
	P	10	9	7	8	3			
	S	9	5	8	15	3			
14	N	5	29	39	11	1	(***)	—	(***)
	P	12	5	10	9	1			
	S	10	12	9	7	2			
15	N	2	4	25	54	0	—	—	—
	P	4	1	7	24	1			
	S	3	3	6	27	1			
16		15	36	26	8	0		(*)	***
		11	8	9	7	2			
		4	9	9	17	1			
17		31	33	17	3	1	—	—	—
		11	12	5	7	2			
		18	11	3	6	2			
18		7	26	39	12	1	***	—	*
		10	18	4	3	2			
		12	11	7	9	1			
19		17	40	21	5	2	*	—	—
		14	10	7	4	2			
		13	10	3	14	0			
20		8	28	37	11	1	(**)	—	(*)
		2	9	12	13	1			
		8	9	10	12	1			
21		12	39	30	3	1	(***)	(*)	—
		15	12	6	4	0			
		6	14	10	10	0			
22		8	25	27	21	4	(*)	—	*
		2	5	9	14	7			
		5	3	11	20	1			
23		26	38	17	2	2	*	—	***
		6	12	5	9	5			
		8	10	7	13	2			
24		8	37	31	6	3	—	—	(***)
		2	12	10	8	5			
		5	10	7	17	1			
25		18	27	35	4	1	—	—	(**)
		8	5	15	7	2			
		15	7	6	10	2			
26		43	24	13	5	0	—	—	*
		17	10	6	2	2			
		12	11	6	11	0			
27		3	22	27	30	3	—	—	(**)
		1	5	12	13	6			
		6	2	10	21	1			
28		21	42	20	2	0	—	—	(***)
		15	15	5	1	1			
		25	11	3	1	0			

(表 6) の続き

項目番号		A	B	C	D	記号	差の有意性 N-P	P-S	N-S
29	N	39	28	14	4	0	—	(*)	—
	P	13	14	8	2	0			
	S	24	7	3	6	0			
30	N	25	24	19	16	1	—	(*)	(**)
	P	12	10	8	7	0			
	S	12	3	5	15	5			
31	N	2	16	32	35	0	—	—	(***)
	P	5	3	8	15	6			
	S	2	1	5	26	6			
32	N	51	23	8	3	0	—	—	—
	P	19	5	5	6	2			
	S	21	6	5	7	1			
33	N	2	3	12	68	0	—	—	—
	P	3	3	3	26	2			
	S	3	2	5	30	0			
34	N	4	18	31	31	1	*	(**)	—
	P	10	7	10	7	3			
	S	10	3	6	20	1			
35	N	10	25	29	20	1	***	***	(*)
	P	23	7	4	3	0			
	S	10	3	10	16	1			
36	N	2	12	23	48	0	***	***	(*)
	P	7	10	8	12	0			
	S	5	1	5	28	1			
37	N	2	1	24	53	0	—	—	—
	P	4	2	6	20	5			
	S	7	3	3	26	1			
38	N	7	12	28	38	0	***	—	(**)
	P	10	8	3	14	2			
	S	9	3	3	24	1			
39	N	7	22	25	31	0	***	—	—
	P	11	5	8	10	3			
	S	6	4	9	20	1			
40	N	2	7	27	49	0	—	—	(*)
	P	1	0	7	25	4			
	S	7	3	5	25	0			
41	N	68	4	3	10	0	*	—	***
	P	22	0	2	11	2			
	S	19	3	1	16	1			
42	N	4	20	44	171	0	***	***	(***)
	P	17	7	17	5	1			
	S	7	7	9	171	0			

項目番号		A	B	C	D	記号	差の有意性 N-P	P-S	N-S
43	N	3	2	14	66	0	—	—	—
	P	3	2	4	28	0			
	S	0	1	5	34	0			
44	N	6	9	13	57	0	—	—	—
	P	6	5	7	19	0			
	S	4	3	7	25	1			
45	N	61	19	11	3	1	***	*	***
	P	15	3	4	13	2			
	S	19	3	3	15	0			
46	N	45	38	1	1	0	***	(*)	(*)
	P	15	14	7	1	0			
	S	26	9	4	1	0			
47	N	56	24	5	0	0	***	(*)	—
	P	11	15	8	2	1			
	S	22	15	2	1	0			
48	N	47	28	7	3	0	**	—	—
	P	11	13	9	2	2			
	S	21	11	5	2	1			
49	N	5	15	28	37	0	—	(***)	(***)
	P	5	9	10	11	2			
	S	9	2	7	21	1			
50	N	1	3	15	66	0	—	—	(***)
	P	4	2	7	23	1			
	S	4	3	11	21	1			
51	N	2	11	29	43	0	***	*	—
	P	10	8	10	8	1			
	S	3	6	8	23	0			
52	N	10	19	33	23	0	—	—	(*)
	P	8	3	12	11	3			
	S	7	6	7	19	1			

註: * …… $p<.05$

** …… $p<.01$

*** …… $p<.001$

註: 表中斜線は各項目の勾配を示すもので ES得点に加算される正の側の応答であることを示す。

性を検定した。Barron自身は総ES得点のみを問題にしており、項目によって、それほど自我の強さを適切に表現していないと思われるものがあっても、全体の値は非常に有用だとし（手紙による直接の問い合わせに対する返答）他の研究者達によっても殆んど各項目についての検討はなされていない。だが本実験では3群の反応特徴を一層詳細に検討しようとの意図の下に項目分析を行った。

分析は、A, B, C, D 4つの選択肢をそのまゝ用いる仕方と、AとBそしてCとDを各々1まとめにして用いる方法と両方によってχ²検定を行った。表中（ ）で示したのは前者のやり方による結果であり、それ以外は後者の仕方によるものである。これによると、項目によって特にN群を他の2群から区別するもの（2, 6, 8, 10, 13, 14, 18, 20, 22, 23, 38, 41, 45, 46）、特にP群を他の2群から区別するもの（1, 5, 11, 21, 34, 47, 51）、又特にS群を他から区別するもの（4

, 12, 16, 30, 49) そしてこれ等に加え, 3群を各々区別するもの (3, 7, 35, 36, 42, 45, 46) 等に分かれるのが見られる。どの2群間にも全然有意差の認められなかったのは, 残りの7項目である。

この結果から, 総得点のみではなく各項目毎の応答により3群間をもう少し詳しく区別しうることがわかる。従って, この分析に基づいて, 特にN群を弁別し易い項目に対する応答からN得点 : S(N), 同様にしてP得点 : S(P), S得点 : S(S)を各被験者毎に算出し群間比較を行ったものが (表7) である。

(表7) S(N), S(P), S(S) 各得点による比較

得点の種類		対象群 N	対象群 P	対象群 S	群間比較 N−P	群間比較 P−S (χ²検定)	群間比較 N−S
S(S)	S(S) ≦ 4	65(人)	38(人)	14(人)		***	***
	S(S) > 4	20	7	26			
S(P)	S(P) ≦ 5	69	7	30	***	***	
	S(P) > 5	16	30	10			
S(N)	S(N) ≦ 4	20	30	29	***		***
	S(N) > 4	65	7	11			

〔註 *** ····· P < .001〕

この結果は先の項目分析に基づくものである

故当然のことにもなるが，〔実験Ⅱ〕と同様，一見紛らわしいN群とS群の得点結果も各項目単位の反応の用い方により微妙な区別が可能となる一資料がここでも得られた。

〔4〕まとめ

同じ質問紙でも，その反応を内的枠組から見て行こうとして作成されたのでなく，自我機能の強じんさ（Ego-Strength）を直接測定する客観的尺度として本来作成され，その有効性が臨床的にも又安当性研究の面からも認められつつあるESスケールを用いて3群の反応を比較した。その結果，正常者群は他の不適応2群よりも高い値をとり，その点に関する限りは従来の研究結果と一致するが，分裂病群（これはBarron自身の研究及び他の関連研究においてその対象中に含まれていない。）が神経症群より高い値をとり，「自我」理論から説明のつきにくい予想した資料が得られた。しかし，この結果を，自我の強さそのものを直接示すものとして外的客観的な枠組から

見る代りに，意識的自己の現象を現わすものとして内的枠組から見る観方を試みるならば，〔実験II〕とも対応する興味深い資料となってくる。又項目分析をかいる観点から行った場合，即ち，各項目が自我機能のあり方を適切に示すものであるかどうかを検討するのでなく「自我機能」的な意味にこだわらず，たゞ内省的な自己のとらえ方を吟味する意図の下に応答傾向を比較する場合，スケール全体にわたって，N，P，S 3群を各々独立的に弁別しうるほゞ3種類の項目の含まれることも認められた。そしてこれ等の鍵項目(key items)に基づきN得点，P得点，S得点を算出すればこれによってともかく3群間の差をより明確に示すことができ，分裂病群の応答にも，かいる項目分析を通じた場合は，他の2群と区別される特徴がいくらか認められうることがわかった。但し，こうした資料が得られたと云うだけでその意味するところは明らかでない。更に実験を重ねて後，まとめて

考察する。

〈第13章〉〔実験IV〕(=〔実験II〕) 改訂質問紙 ―その3― による実験及び，質問紙 ―その4― による構成概念妥当性 (construct validity) の検討

〔1〕目的

質問紙 ―その2― を更に組織的に改訂した質問紙 ―その3― 即ち資料5の「自己評価表 ―R.I.―」(註．R.はRorschachの，I.はInventoryの各頭文字をとったもので，本質問紙が実験IIで用いたものと同じく，ロ・テストの自我心理学的解釈理論を背景として作成されたことから二の様な副称を与えた。) により，〔実験III〕までに一貫して見られたところの，N，P，S各群における特徴的な「現象的自己」のあり方を支持する資料がここで更に附加されるかどうかを調べることと，又，質問紙法を用いて行って来たかゝる一連の方法が「現象的自己」のあり方を見る一つの有効な手段たり

得ているかの問題を信頼性及び構成概念妥当性(construct validity)の面から検討することこの2つが本章の課題である。従って本実験は次の仮説の検証を目的とする。

仮説1

「自己評価表－P.I.－」において、神経症群が他の2群から区別される顕著な反応特徴、即ち、否定的な「現実の自己」評価と、現実と理想の両「自己」評価間の不一致の大きさを著しく示すであろう。これに対し、正常者と分裂病者の両群は、全体の傾向として似通った結果、即ち、神経症群と逆に、肯定的な「現実の自己」評価と現実と理想の両「自己」評価間の隔たりの少なさを示すであろう。

仮説2

累積的実験の結果作成された「自己評価表－P.I.－」は、「現象的自己」のあり方を、肯定的－否定的価値づけの面からとらえる1つの方法として十分な高い信頼性を有するものであろう。又、構成概念、即ち自己の価値づ

のあり方をとらえようとする本質問紙の意図の妥当性は，個々人の中に内在化した形で形成される価値基準そのものには一般的な社会的価値基準の参与が大であることから，「自己」のユニークな価値づけは後者への適合感と密接な関係にあることが理論的に予想される故、社会的価値基準への適合感を調べた別の資料との相関をみることにより1つ検証されるであろう。質問紙－その4－は後者に関する資料を得るために作成されたものであるが、この結果と，質問紙－その3－の結果とはかなり高い相関を示すであろう。

〔2〕方法

1) 対象

対象	人数 計(人)	男(人)	女(人)	年令 平均(才)	S.D.(才)	知能(I.Q.) 平均	範囲
N	30	23	7	21.1	2.14		
P	30	23	7	26.6	6.82	115.2	98~130
S	30	18	12	29.3	6.69	108.8	90~130

上表の通り．正常者（学生及び一般会社員）

LIFE C 151
20×20

神経症（病院入院中の森田氏神経症），分裂病（病院入院中の定型的精神分裂病と診断され，テスト可能として医師に選択されたもの）の3群である。本実験では，不適応2群の知能をより確実に統制するため知能テスト（ウェクスラーベルヴュー法）を実施した。平均I.Q.の具体的値を比較して問題にするよりも普通知以上であることを確かめるために行ったものであり，正常者群では殆んどが大学生で他は会社の若手技術員として有能な人々であるため普通知以下の者をチェックして除外する必要はないものと認めた．従って正常者群ではテストを施行しなかったが，おそらく他の2群より平均知能は高いものと思われる。しかし本研究では大きく人格の適応性を研究課題とする関係から，それほど極端でないことが予想されるこの様な知能差は一応問題にしないことにした。学歴は，N群が高卒以上で先述した如く殆んどが大学生であり，P群は旧制中学（又は高等女学校）或いは高校

卒以上であり．この中約40%が大学在・卒者である。S群は中学卒及び中退以上の者から成り．中学卒及び中学中退者は全体の約15%，大学中退及び卒業者が約30%で残りはすべて旧制中学或いは高校卒レベルである。

2）テスト

①〔自己評価表 —P.I.—〕の作成

(資料5)として附録したものがこれであるが．質問紙 —その2— を次の様な点で改訂した。

(1)各下位カテゴリーに属する項目数をできるだけ均一にする。但しカテゴリーの重要度による加減はいくらか行う。

(2)各カテゴリーに配属する項目数はすべて奇数個にし，「自己」評価の肯定性，否定性をカテゴリー別に纏めることが数量的に可能であるようにしておく。

(3)先の質問紙で重複した意味を持つことがわかった項目やカテゴリーはなるべく単一化する。例えば，体験型に関する項目は制禦機能に関するそれと非常に似通って来るため

自我機能を直接反映するものとしてより適当と思われる制御機能のカテゴリーのみにしぼることとし，前者を除いた。
その他〔実験II〕における項目分析を参考にして，項目の言語表現のあり方を吟味し改訂した。

(4) 項目の評定スケールの肯定－否定の勾配が単調にならない様にした。即ち，肯定型の記述にはじまり最後の極が否定型の記述で終るスケールとその逆のものとを全体で約半数ずつにし，5項目ずつでこの記述様式が逆転する様な配列法をとり，でたらめな機械的反応をチェックすることにした。この結果，本実験の被験者はすべてこの意味でのでたらめな反応を行っていないことが認められた。
又，本自己評価表の応答様式は，質問紙－その2－におけるのと全く同じであり附録からも明らかな通り，各項目毎に一応6段階のきざみを持つスケールを備え，「現実」と「理想」の両自己評定を一項目ずつ行わせる形式を

とっている。これを各被験者毎に個別施行した。

(表8)「自己評価表 R.T.」の下位カテゴリー

カテゴリー		項目番号	数
1.. 全般的な情緒の安定性		(1) ～ (9)	9
2.. 愛情欲求の受容		(10) ～ (12)	3
3.. 攻撃性	受容	(13) ～ (15)	3
	表現	(16) ～ (18)	3
4. 外的制禦 (対象との情緒的関係における、感情表現の面での制禦)		(19) ～ (27)	9
5. 情緒反応の自由さ、活潑さ		(28) ～ (32)	5
6. 原始的衝動性への接近親和性		(40) ～ (46)	7
7. 精神機能全体の活潑さ、豊かさ		(33) ～ (39)	7
8. 内的制禦 (自我が衝動に呑みこまれず、衝動を統制しうる機能、成功し、自律的な適応機能に転じた防衛)		(47) ～ (53)	7
9. 現実吟味 (判断力、思考力などを背景に含み持った現実を正しくありのままに把握する機能)		(54) ～ (58)	5
10. 自己実現化傾向 (個性と潜在的な能力を十分発揮しうる傾向)		(59) ～ (63)	5

② 質問紙 ―その4―（社会的価値基準への適合感の調査）の作成

附録の資料6がこれであるが，身体面，知的能力，道徳性，思想，教養，仕事の能力，生活習慣，対人関係，家庭，親との関係，家族との関係，性的役割等社会的存在としての個人が，自分自身をどうしてもそれと照らし合わせて見ざるを得ないところの社会的価値基準に関する諸側面をとり挙げ計46項目（大項目の数でありこれには更にいくつかの下位項目も配属される。）を設定した。

応答様式は各項目毎に

(1) そのことについては大体いつも"人並"だと思え他人にひけ目を感じずにいられる……○印

(2) そのことについては大体いつも"人並以上"だと云う気がしている。……◎印

(3)，(1)でも(2)でもない……V印

(4) そのことは自分にとって無関係である……――――（下線を引く）

これ等4通りの応答の中どれかを選ぶ形をとる。尚，この質問紙－その4－は仮りに S. V.（Social Values）テストと名づけておく。

これも「自己評価表－R. I.－」と相前後して個別に施行した。

〔3〕結果の整理と考察

（表9）は「自己評価表－R. I.－」における応答の群間比較を行ったものである。各下位カテゴリー毎に「現実的自己」即ちPSの評価の群間比較を行ったところ，P群は，1.，3，5，7，8，10と半分以上のカテゴリーにわたりそして又更に全体を通じての総評価において，他の2群より有意味に多い否定的自己評価を示した。他の2群のいずれとも有意差が見られなかったのは，3の攻撃性の認知（受容）面に関するものと4の外的制禦に関する応答とである。前者については3群とも各々半数以上が攻撃欲求の存在を認める応答をしていることから特にP群のみに顕著な特徴とでもいうべきものが見られなかったわけである

（表 19）「自己評価表 -K.I.-1」の応答の群間比較

DS 群間比較 N-P	N-S	P-S	項目	PS 評価の分類	対象	N	P	S	群間比較 N-P	N-S	P-S
***		***	1. 全般的な情緒的安定性	肯定 (S≧4.5)	(人)	19	4	23	***		***
				否定 (S<4.5)		11	26	7			
	**	***	2. 愛情欲求	肯定 (S≧2)		17	10	15	†		
				否定 (S<2)		13	20	15			
	**	***	攻撃性 3. 認知(受容)	肯定 (S≧2)		18	17	15			
				否定 (S<2)		12	13	15			
**		***	攻撃性 表現	肯定 (S≧1.5)		18	5	16	**		**
				否定 (S<1.5)		12	25	14			
		**	4. 対外的制禦	肯定 (S≧5.5)		16	14	18			
				否定 (S<5.5)		14	16	12			
**		***	5. 情緒表出の自由さ	肯定 (S≧3)		19	8	20	**		**
				否定 (S<3)		11	22	10			
**		***	6. 衝動性への接近(親和)	肯定 (S>4.5)		20	9	14	**		
				否定 (S≦4.5)		10	21	16			
**		***	7. 精神機能の活発	肯定 (S>3.5)		22	7	17	***		**
				否定 (S≦3.5)		8	23	13			
**		**	8. 内的制禦	肯定 (S>3.5)		16	9	21	†		**
				否定 (S≦3.5)		14	21	9			
**		**	9. 現実的今味	肯定 (S>3.5)		19	8	13	**		
				否定 (S≦3.5)		11	22	17			
**	**	***	10. 自己実現傾向	肯定 (S≧3)		24	4	22	***		***
				否定 (S<3)		6	26	8			
			総点	PS の Mdn		34.0	24.5	37.0	**		**
**	*	**		DS の Mdn		89.5	15.75	44.5			

註. "隔たり" の値 DS については スペースの都合上、人数の分布を示さなかったが、各項目毎に中央値で区切って χ^2 検定を行った。

肯：肯定的評価
否：否定的評価

†：$p<.10$
*：$p<.05$
**：$p<.01$
***：$p<.001$

検定は χ^2 テスト、及び U テストによる。

が従って P群はこの攻撃性に関するカテゴリーでは、"潜在的に攻撃性が存在することは認めるがそれを外部に表出しにくい"とする応答のタイプを多く示すことになる。又後者については; N, S 両群が過半数の肯定的評価者（外的制禦がゆきとどいているとする方に応答する人）を含み、P群では否定的評価者の方が過半数を占めているが、3群間に有意差が認められるまでには至っておらず、これ等2つのカテゴリーにおける結果は〔実験II〕の場合と全く一致していることが認められる。

又N, S 両群間には全カテゴリーを通じてこのPS評価には全く有意差が認められなかった。この様にP群のみが他の2群から顕著に区別される否定的（貶価的）評価傾向を示すことは、従来からの実験をも含めて一貫した反応型として認められるわけであり、この様に一貫した反応傾向は、bS値においても同じ様に、常にこの値が他の2群に比し有意味に大

であると云う形で認められる。S群においてはこのDS値が殊に小さく，総DS値ではN群との間にすら有意差を示している。かくて本実験の仮説Iはほぼ実証された。

〔註〕：結果の整理法について

(1) カテゴリー毎に，各個人のPS評価を肯定的と否定的に分類する基準は，配属されている項目数の過半数を占めるか否かに置く。そして各項目毎の肯定－否定評価の分類はスケールの中央点が評定できない空白の○印になっているため，スケール上左右いずれに評定されているかによっておのずとなし得る。又DS値の算出法は従来通りPS評価とIS評価の目盛差を数えその数字をそのまゝその項目のDS点とする。

(2) 又PS評価総点の算出においては，これが自我機能の強さ（健全性）にかゝわるものであることから，受情欲求と攻撃性の2つのカテゴリーにおける評定のとり扱いは次の様に

行った。これ等は自我心理学的には自我機能と深い関係を有するものであるが，本質問紙においては，これ等の自我機能上の意味（中性化の方向への変容により自我備給的エネルギーになること，抑圧されないで対象関係において能動的に発現すること，又受情欲求に関してはその基本的充足と分化，成熟等が問題となる。）を意識的な一人称記述に転じることがむづかしく，結局，これ等2つの衝動的欲求の発動が認知（受容）されているか，又攻撃性に関してはその表出が禁止されすぎていないかどうかにかゝわる表現となっているに過ぎない。これ等の欲求の認知は，他のカテゴリーに比し能動的な自我機能とかゝわる意味が少なく，又他の項目における肯定－否定の評価に比して，自分自身の自我機能を〝健全である〟と意識していることを直接的に示すものかどうかの点においてもやゝ問題となる。即ち，これ等は全体的な自我の健全度を意識的に把握したものとしてはいくらか

間接的な意味内容を有する項目から成っているとも見るべきである故、全体的な自我機能を意識の上で肯定的に評価しているか否かをなるべく直接的に示すべきPS総点の算出においては、これ等2欲求の認知(受容)に関する6項目は一応除外することとした。従って残りの57項目における肯定的PS評価数を以ってPS総点とした。故に得点分布は0点～57点となる。尚、各個人毎にカテゴリー別PS得点及びDS得点を算出したわけであるが、P群92名はIS評価に空白が多くDS点が出せなかった。

(表10) 質問紙 -その4- (S.V.テスト) における S.V.(適合)得点の群間比較

各群得点の中央値			群間比較 (Uテスト C.R.)		
N	P	S	N-P	N-S	P-S
59.0	42.5	62.0	3.009**	0.813	3.992**

註 ** …… P<.01

上表は、先述した如く「自己評価表 -R.I.-」の構成概念妥当性検討の目的で作成したS.V.

テストのS.V.(適合)得点を群間比較したものである。この得点は，4通りの応答形式の中，◎印の答えを2点，○印を1点，V印を0点とし下線の引かれた項目は除外して算出した。結局各項目の得点を総和した合計点が問題となるが，下線の引かれた項目数にかなりの個人差があるためこれを60項目全部に応答した場合の理論的推定値に換算した。(従って換算得点の分布は理論的に0点～120点となる。)

このS.V.得点が，自己評価表 -R.I.- の妥当性を実証しうる上で一役買いうるためには，この得点そのものがすでに先のPS，DS両得点と同じ様に3群間で異なって来なければならないが，表11に示した結果からはP群が，ここでも他の2群との間に有意差を以って最小値をとることが認められ，N，S両群間には，先のPS得点の場合と同様有意差が見られなかった。

(表11.)の相関係数はSpearmanのr_s[92]である

(表 11.)　S. V. (適合) 得点と PS 点及び DS 点との関係

関係	相関係数 r_s の値	r_s の値の有意性 ($CR = \frac{r_s}{6r_s}$)
PS と S.V.	$r_s = +.67$	$CR = 6.34^{**}$
DS と S.V.	$r_s = +.62$	$CR = 5.82^{**}$

註　** ····· $P < .01$

が、PS と S.V. との間及び DS と S.V. との間の各 r_s は、それほど高い値を示さなかったが、共に統計的には 1% レベルの危険率で有意である。r_s の値がそれほど高く出なかったことには、S.V. 得点算出の場合に無関係項目数 (応答様式の (4)) の個人差による影響を排除する目的で先述した換算点を出したことも いくらか関係しているかも知れないが、いずれにしろ一応有意味な相関が見出され、構成概念の妥当性を支持する側の 1 つの資料が得られた。次に「自己評価表 —R. I.— 1」の信頼性であるが、これは (表 12) に示した通りである。折半法による検討は各群及び全群を対象とし

（表 12）「自己評価表 -R.I.-1 の信頼性検討

方法	得点の種類	Spearman-Brown の信頼係数 N	P	S	全群
折半法	PS	r=.90	r=.89	r=.87	r=.89
	DS	r=.87	r=.91	r=.88	r=.91
再検査法（3週間隔）	PS	r=.89			
	DS	r=.92			

て PS, DS 両スコアについて行い．表の如きrの値を得たが，これは〔実験 II〕における質問紙 -その2- に関する信頼係数とほぼ同じ値を示している。又再検査法による信頼性[89]の検討は正常者 N 群についてのみ行った。これは，分裂病者 S 群の場合は治療上の都合や又退院等により ある一定期間を置いて再検査することが困難であったためであり．又神経症者 P 群では，やはり S 群と同様な状況であったことの他．治療による変化の要因が考えられねばならない故．これを対象として再検査法により信頼性を検討するには不適当と思われたからである。このあたりは非常に微妙な問題

であるが，いずれにしても再検査による信頼性の検討はそれが対象群の条件に照して明確な意味を持つ場合になされるべきであろう。その点，「現象的自己」がより適応的な意味を持って確立されているであろうところの正常者群はこの方法で信頼性を検査するのにふさわしい対象と思われる。N群について行った再検査法による信頼係数は表にある通りPSにおいては $r = .89$，DSでは $r = .92$ であり，これ等の各係数から本質問紙はかなり高い信頼性を有するものと見做される。

〔4〕まとめ

〔1〕の目的で掲げた仮説1及び2がいずれも実証され，〔実験I〕以来の累積的研究に基づいて作成された本質問紙が，適応度を異にするN，P，S3群の「現象的自己」のあり方を，肯定的－否定的価値づけの面から，各々ある一貫したパターンとしてとらえる上で有効な信頼しうる一つの方法であることがわかった。

<第14章> 第1部の総括と結論

ここでは，第1編の理論的研究を背景としながら，同じく第1編第2部で述べた本研究の目的及び全体的な仮説に基づいて，適応度を異にするN，P，S3群の「現象的自己」を肯定的価値づけの度合，内在化された価値基準により是認された自己尊重的なあり方の観点から実証的に研究し，かいる研究の累積を通じて，各群の「自己」のあり方を一貫したパターンとしてとらえうる方法を得ようとした。このためには，自己心理学における，主観的現実性を重視する現象学的接近法の立場を尊重して，意識的レベルでの「自己」を内的枠組から上記の観点においてとらえるべく，主に自我の自律機能を内省的に自覚した形で1人称記述した諸項目を，「現実のありのままの自己」と「是非こうありたいと思う理想的自己」（夫々PS及びISと略号）の2側面から一度に評定させるところの，評定スケールを備えた1つの質問紙法を考案し，3度に

わたる実験で少しづつ改訂を加えながらこれを使用した。この方法自体は、個人の内的基準に基づく「自己」の価値づけ方についてのN、P、S各群の特徴を一貫した反応型としてとらえる上で、一応妥当な信頼できる方法であることが実証された。しかし、これはあくまでも反応型としてであり、N、P、S各群がその様な反応型を「自己」に関する現象的資料として示していることの意味は、残された問題として考察されねばならない。

そこで各群の反応型であるが、本研究の目的に合わせて作成した一連の質問紙以外に〔実験Ⅲ〕でとり扱ったBarronのESスケールにおいても、このスケールを自我の強さを直接的に測定しようとする本来の目的に従って客観テストとして見るのでなくその反応を他の実験におけると同じ内的枠組から「現象的自己のあり方」を示すものとして見るならば、各群は「自己」の価値づけという点でこれまでと同じ一貫した反応型を示していたことになり

大変興味深い資料が得られたわけである。最も顕著な反応型は神経症におけるそれであり，常に，「現実的自己」の評価が否定的乃至低評価的で，又それが内在的価値基準によって是認されない形，即ち，「理想的自己」との間の"隔たり"があくまでも大きいものとして示されている。かいる反応型は本実験全体を通じて，他のN，S．2群との間に有意差を以って確認されており，他の研究からもこれと殆んど一致した多くの結果が得られている。[12) 28) 130) 167)]

この様に，現実の自己を低く評価し，これに比してきわ立って高い理想的自己を設定することは，内的基準から見て現在の自分自身を不満だとして否定視することに他ならず，これは自己心理学的観点から最も顕著な不適応指標とされるところである。即ち，PSとISとの巾の大きさは所謂"高い理想を抱いて"前進する野心的な能動性とは逆に，脅威(threatening)を受けることをおそれる不安のためにありのまゝの自分の姿を直視し得ず云わば二

れを放棄し非現実的に描き出されたISの下にたたいたずらに欲求不満に陥っている消極的な態度の反映だと考えられている。確かにこの称な「自己」の現象像は、現実のありのままの自己に立脚して一歩一歩最善を盡しながら前進するという自己確実性(self certainty)[36]及び能動性を欠くものであり、「自己」へのとらわれそのものの中に苦しみつゝ渋滞している姿を表わすものと解される。Ericksonは自我心理学的な立場においてではあるが、おのづとかゝる「自己」理論に関係づけうる見解を述べており、同一性意識(Identity consciousness)乃至自己意識(self-consciousness)が増して来るのは同一性を獲得しようとする称な良い意味を持つ場合のみに限らず、同一性拡散(Identity diffusion)の危機が潜在する等望ましくない意味においても認められ後者の場合は、心理社会的存在の受容された独立的個人としての自律性(autonomy)[36]の感覚が妨げられるとするが、神経症の「自己」のあり方

については この様な説明も可能であろう。
従って、かいる現象的自己は、適応的行動を導く様な自我機能の指針としての役割を果し得ないものと考えられる。
これに対し、正常者群の反応型は、一貫して肯定的な現実的自己の評価と、内的価値基準による是認を示すところのPSとISとの〝隔たり〟の少なさから成っており、神経症群とは丁度逆な形で、自己心理学の適応理論にかなった自己尊重的な「現象的自己」像を示している。即ち、これで、適応的な統合機能が可能であるための「自己」側の条件2つ（第4章〔4〕参照）の中1つは満たされていることになり、現実の自分の上に完全な理想像を押しつけることなく自分自身の資質及び限界を受け容れながらともかく自己をもりたてて進んで行こうとする現実的な態度をうかがわせるものであろうが（92, p21）、しかしこれは条件2つの中1つのみが満たされた段階で、それも対象が一応の適応を果している若の正常者であ

るが故になされうる解釈であり、あくまでも暫定的なものとして更に慎重な検討が加えられるべきであることは、次の分裂病の反応型からも早速考えられねばならない事柄となる。即ち、神経症に加えられたもう1つの不適応群である分裂病群においては、私自身が作成した一連の質問紙でN群とほぼ同様な反応傾向を全体として示し、別の意図の下に1つの客観テストとして作成されたESスケールでもP群よりはN群にほぼ近い結果を示している。実験Ⅱ及びⅢで行った様に項目分析等を通じて詳細に吟味するとこのS群がN群とも区別され得る応答特徴を有すること（例えば肯定的PS評価をN群よりも固執的に示す等）をいくらかうかがいうるが、大局的に見ればそれ等も断片的な資料であり、現段階ではN群との差異を決定づけるに足るほどのものとは云えない。従って、各実験を通じて得られた現象的資料から認められるS群の反応型は、結局、N群と同様、肯定的なPS評価と小さ

いDSの値によって特徴づけられるものであり特に後者のDS値はIS評価があまり高くなくPSと近い位置にとどめられているため全体としてN群よりも小さくなっており統計的な有意差も所々で認められている。この様にS群の反応型には自己心理学で論じられる不適応性が、P群とは逆に全く反映されておらずそれのみか本資料の範囲内ではN群と同等或いはそれ以上の適応的な「自己」像を示すことになってしまう。N, P, S 3群を対象として意識的な「現象的自己」を質問紙法と云う直接的な接近の仕方により調べた場合3群はともかく一貫した反応型を夫々示し、P群は「自己」理論にそっくりあてはまる不適応性を顕著に表わす。又N群もS群を対象に含めない限りはP群と対照的な適応的「自己」像を示すこととなり、この様にS群を含めない対象範囲での人格適応の研究にはかいる方法が直接的で有効なものとして外国ではもとより[12) 167)]我国でも用いられており私自身の質問紙をそ

のまゝ応用した研究も，桂[98]，加藤[97]，国部[124]，中江[120]その他[25][104][125]によってかなり見られるが，S群の資料を加えると同時に新たな問題が投げかけられる。S群の「現象的自己」の研究それ自体が他群のそれに比して極めて少数であり，研究方法に違いがあること及び本群の「自己」に関しては理論的背景が非常に稀薄であること等から，P群の場合の様に諸研究結果が常に一致した(或る一定のものとなるにはいたらないが[167, pp 205-218]，数少ない研究の中で結果が不明瞭なものや研究法に問題が感じられるものを除きかなり厳密に詳しく行われた数個の研究を見るとほとんどが本研究と類似した結果を示している。即ち，Friedmann, I[66]やLeary, T.[109]又Hillson, J. S. & Worchel, P.[83]等は，N. P. S. 3群を含む対象の「自己」を質問紙法や形容詞のチェックリスト法によって比較し，P群がきわだって低い自己評価をそしてN及びS群は互に似通って有意差のない形でP群と逆の傾向を示すことを認めている。この中Friedmann

と Hillson 等は IS をも調べ、PS と IS との隔たりひ至両者の相関を問題としているが、本研究の結果と同じ様に、N と S が非常に似通って小さい DS の値や或いは P 群に比して共に PS と IS との大きい相関値をとることを明らかにしている。又、Epstein, S.[31] は N 群と S 群について意識的及び無意識的な両自己評価を比較する興味深い研究を行い、これは、声、筆蹟、名前そして全体的な"自分"に関して直接的な意識的評価を為すことと、それ等を他人のものと合わせかつ不明瞭化させた上で、タキストスコープ等を使用して提示し自分自身のものを確認する速さを記録する等の手続によってなされたが、結局のところ、意識的な自己評価では両群間に有意差が認められず、又"無意識的自己"なるものを調べるべく意図して得られた結果においては、全体として S 群の方が N 群よりも自分自身をより好ましい (more favourable) として価値づけていることがわかった。後者は方法的にも問題が含まれ

LIFE CARD
20×20

るであろうし、従って得られた結果が本当に無意識的自己と称しうるものの資料であるかどうかも問題となる。本研究では無意識的自己なるものを関心の外に置いたわけである故、後者の結果は、これを無意識的なものか否かと云った点で問題にするよりも、大へん異なった種類の、かなりあいまいに設定されたテスト状況においてもS群がN群に劣らずむしろN群以上に肯定的な自己評価をなすことを示す資料が加えられているという点で注目され、これは、S群の反応傾向の一貫性をある意味で支持するものとも解される。

この枠に、他の研究によっても裏づけられるS群の、N群と似通った反応型はどの枠に意味づけられるべきであろうか。ともかく、同じ枠に肯定的な又内的価値基準により是認された形の「現象的自己」像が示されてもそこには適応差の大きい2群が同時に含まれることから、自己心理学自体の中で、現象的自己に対する解釈の仕方についてのいろいろな反省が

なされつゝあり．第1編の理論的研究においても触れた通り無意識"の概念等が導入され、例えば，同じ様に高く価値づけられた「自己」にも，真の自己尊重（true self-esteem）を意味するものとパラノイド的な防衛機制に基づく病的な誇張された自己尊重（pathologic inflated self esteem）[91]が考えられねばならない等無意識的防衛機制による意識的自己像の歪曲に関心が払げられ[166]，そうした機制によって影響される以前の真の自己像等を間接的に測定しようと試みられて来ている[91)133)]かいずれにしろS群の「自己」は当然N群のそれと異なった意味を与えられるべきものであり、そして又低い自己尊重を意識的に示すP群よりももっと重い問題の含まれるのを示唆していると考えられるが，本研究では，かゝる「自己」を生ぜしめている主体的自我機能そのものをも次にロ・テストにより調べ，第1編でまとめた統合の理論に基づいて2つの資料をつき合わせ吟味することにより各群における

「自己」の意味を，残されたもう1つの条件（自己像の正確さ）を検討しながら詳しく考察することにする。従って、第1編第2部で掲げた「自己」に関する研究仮説も、厳密な意味ではそこではじめて検証されることになる。

第2部：

ロールシャッハ法による「自我機能」の測定

<第15章>〔実験I〕(=〔実験A〕) N.P.S 3群のロ・テスト結果の比較

〔1〕目的

ロ・テスト反応が自我の自律的機能の諸側面にかかわる意味を有することは第1編第3部の方法論において述べた．従って諸反応を組み合わせることにより．自我の諸機能についての指標をとり出すことができ，それを通していろんな機能の健全な発現度が理解され，とらえられることになる。かいる有効な指標の作成はけずしも容易でないが．ロールシャ

ハ解釈理論の、実践的至験を通じての理解を基盤として作成し、又、この様な各指標を総和すれば、全体的な自律機能の健全度が1つの総点として算出されることになるわけであるが、この全体的な健全度（以下T.E.>Total ego functioning と略号して用いている。）に関しては、Klopfer B[100]が各反応を統合的に組み合わせて作成しているRPRS（ロールシャッハ予後評定スケール）が非常に精密なものであると考えられる故、これを用いてT.E.得点とすることにした。そして3群の適応差が各指標にどの様に反映されているかをしらべ、ロ・テストという課題状況へのとり組みを通じて外的枠組からとらえられる各群の自我機能を比較しようとするものである。

〔2〕方法

1）対象：第1部の実験Ⅱで紹介したものと同じである。

2）テスト材料：ロ・テスト（ロールシャッハ法の略として諸家が用いている。），すべ

ての対象につき私が個人法で施行した。

〔3〕結果の整理と考察

ロ・テストの整理法即ち反応チェックの諸側面は第1編第3部でも触れた通り非常に多種にわたっており．その中本研究で重点的に取り扱う側面は既に述べた如く．自我機能の基底的な特性にかゝわると考えられる反応決定因．形態水準であるがこれを反応の位置づけ（Location）反応内容（content）等と結びつけこれ等を自由反応段階から限界検査段階に至る4つの段階にわたって検討し，量的分析．個々の被験者特有の反応の流れ（context）を追究する継列分析．反応の内容面を分析する内容分析の3つの分析を行った。但し．内容分析は．内容の種類を記述的レベルにおいて問題にするのみであり（例えば．攻撃的な内容の反応を文字通りに示すかどうかと云う風に）ロ・テストで普通に意味する内容分析の外に精神分析学的な象徴的解釈を行うことは控えている。これは，実践的至験をも含めた精

神分析学的基盤がないかぎり非常に独断的な主観の強い解釈に陥ったり或いはたゞ機械的に象徴的な意味づけを借用するだけの結果に終ると考えられたからであり、内容分析においてのみならず、本研究における口・テスト結果の整理全般を通じて留意した点は、できるだけ客観的にチェックできるもので、かつ自我機能の諸側面との関係づけが明解に又意味深くなされうるものを重点的にとりあげ、それ等の背後にいろいろな点の配慮を含めて綜合的な整理・検討を行うことである。

これ等の事柄は(1)の目的と同様第2部全体にかゝわるものであるが、本章の実験ではまだ予備的段階のものとして、整理の方法も十分組織化されていないが、ここに資料として(表13)に掲げた。結果としては、全体的に見てN群が最も良い成績を示し、他の不適応2群から殆んどの面で有意味に区別されている。そしてP群がその次の値をとり、更にS群が最も低い値を示すことによって3群間には

(表 13) 各群ロールシャッハ反応の比較

ロールシャッハ指標		対象 N	対象 P	対象 S	群間比較 N-P	群間比較 N-S	群間比較 P-S	
自律機能の健全性	[F.L.] [F.L.] < 0	0 (*)	4 (*)	17 (*)		**	**	
	0 ≦ [F.L.] < 1.0	4	4	7		**	**	
	1.0 ≦ [F.L.] < 1.30	4	16	2	**		**	
	1.30 ≦ [F.L.]	20	6	0	**	**	*	形態水準加重点
	[M] [M] ≦ 0	2	5	17		**	**	
	[M] = 1	5	18	7	**		*	
	2 ≦ [M]	21	7	2	**	**		人間運動反応加重点
	[FM] [FM] < 0	0	3	15		**	**	
	[FM] = 0	3	9	5				
	[FM] = 1	25	18	6	*	**	**	動物運動反応加重点
	[m] [m] ≦ 0	5	10	17		**	*	
	1 ≦ [m]	23	20	9				無生物運動反応加重点
	[Sh.] [Sh.] ≦ 0	3	10	22		**	**	
	0 < [Sh.] < 2	11	7	3				
	2 ≦ [Sh.]	14	13	1		**	**	濃淡反応加重点
	[Col.] [Col.] ≦ 0	0	4	13		**	*	
	0 < [Col.] ≦ 2	12	15	13				
	2 < [Col.]	16	11	0		**	**	色彩反応加重点
	[Sum.] [Sum.] ≦ III段階	0	3	19		**	**	
	[Sum.] = III段階	3	13	7	*			
	III段階 ≦ [Sum.]	25	24	0	**	**	**	総点 (T.E. と同名)
制禦	外的制禦 良い制禦型	10	6	1	*	**	**	
	上の亜型	9	6	1				
	制禦欠如型	3	3	11		*	*	
	抑圧型	6	15	13	*	*		
	内的制禦 良い制禦型	17	3	0	*	**	**	
	上の亜型	4	11	1				
	制禦欠如型	2	3	12		**	**	
	抑圧型	5	13	13		*		
	全体制禦 内・外共良い制禦型	14	7	1	*	**		
	片方のみ良い制禦型	12	12	1		*	**	
	内・外共悪い制禦型	2	11	24	*	**	**	
体験型	bal.	4	4	1	*	*		
	extra. (intro. +)	7	4	5				
	intro. (extra +)	6	1	1				
	extra. (intro −)	4	4	7				
	intro. (extra. −)	7	4	2				
	constricted	0	13	10	**	**		

群間比較 ……χ^2テストまたは符号数の都合でUテスト

extra. = extratensive 外向性
intro. = introversive 内向性
これ等に附した＋－は外向性或いは内向性が適度に併存するかどうか
bal. = 外向性と内向性とが両極自己につりあいを保っているもの
constricted = 外向性と内向性とが共貧的な収縮した体験型

LIFE CEN

全体として有意差が認められている。この表の整理の仕方及びその際の分類基準については詳しい説明が必要と思われるが，これは資料3（ロールシャッハ研究V pp69－92）に掲げたのでここでは省略することにする。又（表13）は実験Aにおける口・テスト結果の主要なもののみを示したものであるが，この中での自律機能の健全性を綜合的にとらえようとするカテゴリーの中での各下位項目の加重得点の算出法はすべてRPRSの得点を算出する時のKlopferの方法にそのまま従ったものであり，かなり複雑な手続を要するが，例えば，運動反応の加重点の場合（[M]，[FM]）等は，その運動を見ることの自由さ，空間におけるその運動量，その運動を行っているもの（主体）の内容がどの程度文化的な現実的特性を担っているか，の3点より詳しく吟味しそれに従って加重点を与える仕方をとる。他の色彩，濃淡，形態水準，図版の客観的条件への反応の適合度及びその意味で基本的に正確な反応が更にどの程度分化し

明細化した形で与えられているかに関するもの）の各々についても，詳しい質的吟味からそれを量化して加重点を与えている。

かゝる結果の考察は，次の実験Bの結果と合わせて行うことにする。

＜第16章＞〔実験Ⅱ〕(＝〔実験B〕) N.P.S. 3群の自我機能の分析

〔1〕目的

本実験の目的も先章で述べた第2部全体の目的に従うものであるが，ここでは，先の実験により得られた結果に基づき，又第3部で「自己」側の資料との対応関係を検討しようとする意図をも含めて第1部における質問紙－その3－(P.I.)の作成と合わせ，自我機能の諸側面をより組織的に又詳しく分類して分析しようと試みた。

〔2〕方法

対象は第1部実験Ⅳに掲げたものと同じであ

り．又テスト材料及びテスト手続は第15章の通りである。

〔3〕結果の整理と考察

結果は（表14）に示した通りであるが、各カテゴリーにおける整理の基準は次の如きものであり、各指標の意味及び群差をまとめた。

1）自律機能の健全性（T.E.）

これは先章でも述べた通り、RPRSの採点基準をそのまゝ採用した。

2）対外的制禦

ΣC≧CF+C，SumC≧3，〔Col.〕>1.5，FC>2，(CF+C)≧2の場合を良い制禦とするが，色彩反応のあり方に反映される「自我機能」的意味は第1編第9章で述べた通りであり，かゝる型の色彩反応は，情緒反応を誘う刺激に対して，自然で率直な情緒をこめた反応を，現実的条件を配慮し制禦作用（統制）を失わないで行いうると云う、自我の望ましい対外関係をつかさどる能力を示すものである。そして上の条件に大体準ずるものを良い制禦の

(表 14) ロ・テストにおいてとらえられる自我機能の諸側面の群間比較

	ロールシャッハ指標		対象 N	対象 P	対象 S	群間比較 N−P	群間比較 N−S	群間比較 P−S
自律機能の健全性 (T.E.)	[F.L.]	[F.L.] < 0	3 (A)	13 (A)	16 (A)	**	***	
		0 ≦ [F.L.] < 1	6	7	9			
		1 ≦ [F.L.] < 1.30	8	5	4			
		[F.L.] ≧ 1.30	13	5	1	*	***	
	[M]	[M] ≦ 0	0	3	19		**	**
		[M] = 1	11	14	10			
		[M] ≧ 2	19	13	1		***	***
	[FM]	[FM] < 0	2	6	14		**	*
		[FM] = 0	7	8	9			
		[FM] = 1	21	16	7		***	*
	[m]	[m] ≦ 0	10	17	22			
		1 ≦ [m]	20	13	8	*	**	
	[Sh.]	[Sh.] ≦ 0	7	12	17		**	
		0 < [Sh.] < 2	19	12	5			
		[Sh]	4	6	8			
	[Col.]	[Col.] ≦ 0	2	3	17		**	**
		0 < [Col.] ≦ 2	16	17	5			
		2 < [Col.]	12	10	8			
	[Sum]	[Sum.] ≦ IV段階	0	0	19		**	**
		[Sum.] = III段階	10	23	7	***		***
		II段階 ≦ [Sum.]	20	7	4	***	***	
		[Sum.] の中央値	8.05(男)	4.5(両)	0.7(女)	**	**	**
対外的制禦		良い制禦型	12	10	1		**	**
		その亜型	5	7	4			
		制禦欠如型	7	9	8			
		4又は病的制禦	6	4	17		**	**
情緒反応の自由さ		自由で活発 (+)	17	11	8		*	
		禁止されている・負担 (−)	13	19	22			
衝動性への接近		接近し親和しうる (+)	24	16	5	*	***	**
		〃 できない (−)	6	14	25			
精神機能の活発さ		活発・豊か (+)	20	13	1	†	***	***
		いくらか活発 (+?)	4	2	5			
		不活発 (−)	6	15	24	**	***	**

註.
χ^2テスト. 及び頻数の都合でUテストにより有意差の検定を行った。

† … $p < .10$
* … $p < .05$
** … $p < .01$
*** … $p < .001$

⇢ Uテスト

(表14) の続き

ロールシャッハ指標		対象 N	対象 P	対象 S	群間比較 N−P	群間比較 N−S	群間比較 P−S
内的制禦	良い制禦型	(A) 14	(A) 8	(A) 5	} *	} * ***	} **
	その亜型	11	7	1			
	制禦欠如型	3	10	8			
	収縮的制禦	2	5	16		***	**
制禦全体	内・外共良い制禦型	16	7	1	*	***	†
	片方のみ良い制禦型	10	18	8			
	両方ともすましくない制禦型	4	5	21		***	***
現実吟味	すぐれている (+)	17	7	0			
	まずまず (+?)	9	9	3			
	劣る (−)	4	14	27	**	***	***
受情欲求	認知している (+)	23	14	10	**	**	
	認知を回避している (−)	7	10	13			
	抑圧している (−−)	0	6	7	*	*	

亜型とした。制禦欠如型は，FC<CF+C でありかつ次の収縮型の条件を含まないもので，これは，即時的な情緒刺激に対する受身的反応性，即ち外界の情緒刺激による被影響性が大であり，社会的基準や現実条件を考慮して自らを統制する以前に生々しい情緒反応を誘発されやすい対外関係のあり方を示している。他方，収縮的制禦型は，Sum C<3，[col]<1.5 の条件に該当するもので，これは，対外的(対人的)な情緒交流そのものが疎外されており，自然な情緒反応をすべて制止してしまおうとする傾向，或いは情緒刺激そのものに対

する生々した感受性が鈍麻し，外界との接触を避けて云わば無生物的な世界に安住しようとしたり非現実的な世界に閉じこもろうとしたりする傾向と関係の深いものである。

3）情緒反応の自由さ

Sum C ≧ 3, ΣC ≧ 3, 元% ≦ 50, (F+FK+Fc)% < 75 を量的条件とし，これに加え，Klopfer の述べる色彩反応の強さ（intensity），深さ（depth）という質的吟味をも合わせて，このカテゴリーにおける＋と－を判定したが，これは先の外的制禦と重なる面を有しているが前者が情緒表現における統制のあり方に焦点をあてたものであるのに対し，ここでは，情緒の発現性（emotional actuality）そのものにおける自由さ活潑さを吟味しようとしており，これは自我機能の，生々した現実との接触，対象関係における情緒的能動性の面にかかわるものである。

4）衝動性への接近

(M + FM + m) ≧ 6.5, [元.L.] > 0 を＋の条件と

し，これ以外を一とした。このカテゴリーは，次の内的制禦における一面と同様，原始的衝動性の方向へも退行して接近しうる自我の内的疎通の機能にかかわるものであるが，第2部のはじめにも述べた通り，反応のテーマや内容に関する精神分析学の象徴的解釈は避けることにしているので，かかる自我の弾力的機能の中退行の面の吟味は不十分である。(Idolt, P.[86] [146]等の分析法に見られる通り，退行的側面の吟味は量的仕方よりもむしろたゞ1個の反応においてもその内容的特質の象徴的意味合いを吟味することからなされる場合が殆んどである。) 従ってここではむしろ，自我が自律的統制を失わないでより衝動的方向に親和的に退行して(regress)又二次過程的方向に前進(progress)しうると云う弾力的機能の中での統制的随意性の面をとらえていることになろう。それ故，表に見られる通り，S群は，多分その退行一方と云う特性のために，衝動防衛に拮抗されて衝動性をより強く担う自

我組織の下尸に退行的に接近しうる自由な機能を制限されていると考えられるところの尸群よりも，マイナスの結果を多く示している。

5）精神機能の活溌さ，豊かさ，

R≧17，3），4）の条件が共に十，反応内容の拡がり（content range）(100)が普通以上であること，反応の位置づけ（location）に目立った偏倚がないこと，を十の条件とし，ほぼこれに準じるとみなされるものを十?，それ以外を一とした。これは，自我の一次的及び二次的な自律機能全体の豊かさ，活溌さ，即ち，対象関係及び精神内界への統制的疎通の機能が伴に単一的にできるだけ制限を受けないで発現しているか否かに関するものであり，これまでの2），3），4）の各カテゴリーにおける結果と同様S群が他の2群よりかなり目立って劣る傾向を示しているが，先の4）及びこのカテゴリーでは，N群がきわ立って望ましい結果を示しているため，尸群との間にも差が認められ

結局3群がN＞P＞Sの順にほぼ並べられることになり各群間には有意差が生じている。

6）内的制禦

M≧FM，M≧2，FM≧1，〔F.L.〕＞0を良い制禦型，2M＞FM＞M，M≧2，FM≧3，〔F.L.〕＞0をその亜型，FM≧2M，M≧2，FM≧4を制禦欠如型M＜2，FM＜1，m＜1を収縮的制禦型の各条件としている。これはKlopferの解釈理論のみならず，他のカテゴリーに関する基準についても同様であるが，できるだけ多角的に本研究の意図に合わせて組み合わせたものであり，更に又，本実験における全被験者の現実的な結果から相対的な分類基準として設定したものであり，形式的な統一性よりも現実に即した意味を担いうるものにさせるべく配慮した。

良い制禦型及びその亜型は，本能的衝動性に親和する傾向（未分化ながらも自分ごとに関する自覚は存在する）と衝動性にまきこまれないでそれを主体的に統制しうる機能とを相

対的に比較した場合，大体両者の平衡がとれた上後者の機能が健全に上まわっており，成功的な防衛機制が適応的に自律化して確立されている度合の高いことを示している。これに対して，制禦欠如型は，主体的統制機能が未発達で防衛機能が適応的に自律化して確立されておらず衝動に侵蝕されやすい傾向を示す。又，収縮的制禦は，衝動性に対する自覚そのものが非常に乏しく，自律的に統制力を働かせる自我機能が弱体であり，従って衝動と主体的に親和するところまで機能が及ばず衝動と，機能の非常に低下した主体とが別々に分離(alien)した状態にあることを示している。これは当然S群に最も多く見られ，他の2群との間に有意差を示している。良い制禦型及びその亜型はN群に最も多く続いてP群の順になり，結局N>P>Sと，各群間に有意差が認められた。

7) 制禦全体

これは2)と6)とを組み合わせて，自我が，対

家庭関係及び対精神内界との関係において，どの程度適当な制禦を伴わせながら能動的に機能しているかを見ようとするものである。

この場合は，良い制禦とその亜型を共に良い傾向を示すものとして一括し，制禦欠如型と収縮的制禦とを共に悪い傾向のものとして，表の様に3種類に分類した。この結果においてもこれまでと同じ様に3群間に差が認められ，N群は良い制禦型を最も多く，逆にS群は両方とも悪い制禦型を最も多くとり，P群はその中間的な傾向を示している。

8) 現実吟味

これは，いろんな内的・外的情緒刺激による被影響性にもかかわらず，現実的条件を検討しそれへの配慮を失わない中性化された(neutralized)自律的機能を維持しうる程度に関係するものであり，一次的自律装置に基づく知的統制力や思考力をもその中に含み持ちながら，現実を支配する機能(active mastery)を指している。次に掲げる指標はこの機能の潜

在的あり方及び平均的な機能効率の両方にかゝわると考えられる。

マイナスの形態水準が全然ないか或いは附加的に1個のみなたすること、[Fl.L.]>0, M+(良質のM)≧25, 反応の位置づけに特別な偏倚が認められないこと、これ等の条件にすべて適う者を十、そしてその条件としては次の3通りを考えた。

① Fl.L.マイナスが1個, M≧2.5

② Fl.L.マイナスがなたせずM=2

③ Fl.L.マイナスが1個, 1.5≦M<2.5, P≧5

そして、①, ②, ③にはいずれも, [Fl.L.]>0で、反応の位置づけに特別な偏倚のないことが共通の条件として附加される。

これ等以外のものを一とした。

この結果, 一に属する者の数がS群に最も多く, 続いてP, Nの順になり3群間にはいずれも有意差が認められた。

9) 各情欲求

これは基本的な各情欲求の充足に基づく情緒

の基本的な安定性（basic security），それを母体とした情緒の分化，成熟，この欲求に基づいて生じる様々な情緒（依存感情等）を自我が自覚的にとりあげ，対象関係に統制的に発現させて行く機能に関係するものであるが，ここでは，こうした情緒を自覚的にとりあげ積極的な対外及び対内関係にとり入れて行く働きを見ようとする。

$\chi_0^2 \geq 1$ 或いは $\Sigma_0 \geq 2$，及びこれ等の濃淡反応の出現が継列的に見て異常でないものを＋とし，限界検査段階では濃淡反応を肯定しうるが，自由反応段階では全くこの反応をなし得なかったり濃淡領域を避けようとするものを濃淡回避として一，又全く濃淡の刺激要因に対して感受性を示さないものを，－－として分類した。

この結果，PとSの両群間には殆んど差が認められなかったが，N群のみは最も望ましい傾向を示し，他の2群との間に有意差がみられた。

この他，普通ロールシャッハ結果の分類においてはとりあげないものである故，一覧表には掲げなかったが本研究では第3部の分析のために，攻撃的欲求の生々しい発現に関する側面と情緒の全般的な安定性に関する側面についても整理を行った。その結果では，PとSの2群間にはあまり明瞭な差が認められずN群のみが他の2群との間に有意差を示したが，この2つの側面に関する整理の基準を述べておく。

攻撃欲求に関しては，破壊的な内容（爆発，出火，出血，生々しい臓器反応等）及び明らかに攻撃的な言語表現を伴う反応，が計4個以上存在するか否かによって，攻撃的と非攻撃的に分類した。又，情緒の全般的な安定性に関しては，不安，緊張，葛藤をあらわす諸指標，即ち，(H)，ΣHd，ΣAd，A%，C'，K，n，m，Drの反応数が，Klopferの定めた各基準を越えるか否か，又失敗及至拒否カード数，色彩ショック，濃淡ショック等これ等すべての

指標の中で4～5個以上に問題が認められるか，或いは「問題あり」としてチェックされる指標の数が2～3個であってもそこに問題が集中的に示されている場合は，"明らかに問題あり"（－－）とし，それ以下の程度でやはり問題を認めざるを得ないものを"少し問題あり"（－），そして，それ以外を"問題なし"（＋）として分類した。

以上の結果，自我の全般的な自律機能を反映するT.E.値を初めとし，5つの下位カテゴリーにおいて，N群が高度の健全性を示す最も望ましい結果を示し，S群が逆に，最も不健全な自我機能をうかがわせる結果を，そしてP群は両者の中間に位する結果を示した。

〈第17章〉第2部の総括と結論

ロ・テストという，かなりあいまいに設定された刺激状況での対象関係（図版とのとり組み）を通じて被験者が行う課題解決の仕方を外的枠組から観察し，第1編第9章で述べた

林な自我心理学的解釈理論に従って解釈することにより，自我の自律的機能の諸側面及び全体的な健全性を推定しようとした．その結果，適応度の差にほゞ相応した自我機能の健全度の差を各群はその口・テスト反応に反映させた。即ちN群の反応からは，自由で能動的な，しかし統制を失わない対象関係及び対精神内界との関係，自然な情緒の動きをそのまゝに自覚し生々と活潑な情緒反応を行いうること，客観的で正確に現実を検討する働き，精神機能全体の豊かさ活潑さ等が3群中最も望ましい形のものであることが伺われ，結局，これらを総和したものと考えられる全体的な自律機能の健全度の最も高いことがうかがわれた。そして，S群はこれ等と反対の諸傾向及び最も低い全般的な健全度を示し，P群は，両者の中間的な結果を示した。この様に統計的に有意味な群差として各群の特徴は一応とらえられたわけであるが，T.E.値を取りにとってみても、各群には，最も高い値を

とる者から最低値の者までにかなりの拡がりがあり，この中において3群がかなりの重なりを示すことも事実である．臨床心理学的実践においては具体的な一個人そのものの理解が課題となる故，この様な確率的な群差のみでは十分ではなく．又治療的接近においては個人にとっての主観的現実を重視これに働きかけることが不可欠であることからも，第1部で研究した，「自己」という内的枠組からの接近法との相補的，綜合的な使用法を，より現実的な(real)適応理解のために考えたい。第3部ではこれを目的とした実証的研究を行うが．ロ・テストでは一応N>P>Sの様に順位づけられる結果を示し，又，自己評価においては，既に述べた如く，S>Pとも云うべき(但し，>の記号は左側がより望ましい傾向にあることを示す)結果を示した各群は，更に2つの枠組を綜合する見地から，それぞれの反応をどの様に意味づけられるか，この問題を検討したい。

第3部：

「自我機能」の全体的な健全性と「現象的自己」との関係からみた適応的統合性の研究

<第18章>〔実験A〕における2つの資料の関係の分析

〔I〕目的

第3部全体が第1編第2部で述べた本研究全体の目的3)の下に行われたものであり、第1部で研究方法そのものをより確かなものとしつゝ、累積して行ったN, P, S各群の「現象的自己」に関する一貫した資料と、第2部で同じ各対象群に対しロ・テストを施行しそれを自我心理学的に分析して自我の自律的機能の諸側面及び全体的な健全性を推定したものとをつき合わせて両者の関係をしらべ、第1編第4章で述べた適応に関する理論的考察を基盤として、「自己」側の条件を再検討しつゝ、「自己」が「自我」にとって持つ意味換言

すれば両者の関係の質を、適応的統合性の観点から吟味しようとするものである。従って同じく第1編第6章で掲げた仮説3)がこの部での研究仮説となり、要約すれば、適応群即ち N 群では適応的な統合機能のための「自己」側の条件（1）正確さ，2）肯定的価値づけ）及び「自我」側の条件（全般的な自律機能が健全であること）がより十分な形で満たされているのに対し、不適応2群ではかかる条件の充足にいろいろ問題があり「自己」は、これとの関係において「自我」がつかさどるべき統合機能にとり役立ちうるものとなっていないことを実証しようとする。そして又，この称な2つの枠組を相補的に用いそこから得られた資料の相互関係をみることにより、「自己」そのものの意味，現行の客観的測定法のみでは測定しきれない「自我」の最も重要な機能が統一的な観点からより深く明らかにされると考え、この統一的観点即ち統合性こそ人格の適応を最も敏感かつ的確に反映するで

あろうことを具体的に検討しようとするものである。

まず本章では〔実験A〕における2つの資料の関係を，〔実験B〕の予備段階として，分析しようとするものであるが，次の2点を具体的な目的としている。

1）「現象的自己」のあり方において最も特徴的であったP群が，「自我機能」の全般的な健全度（T.E.）では理論通りN群とS群との間にほぼ位置することが見られた。他方，T.E.の程度では大きな開きが実証されるところのN，S，両群が似通った「現象的自己」のパターンを示す。このことから，本研究でとらえた「自我」と「自己」との間には直線的な一次的対応関係はまず存在しないであろうことが予想されるがそれではその対応関係が大よそどう云った形において示されるものであるか，その点を調べようとする。

2）S群は，3群中最も劣ったT.E.値を示しながら客体として「現象的自己」の中に存在

する自我機能はN群と同程度肯定的に価値づけられたものであることから、客観的に測定された自我機能と「現象的自己」として存在するそれとの間の〝ずれ〟の問題が生じる。これは、先述した統合性に関する「自己」側の条件のIにもかかわるものであるが、この〝ずれ〟は適応度を異にする3群間では各々違った形で認められるのではないか、この点を検討すること。そして又両方法（内的枠組を用いる方法と外的枠組を用いるそれ）の相補的有用性について大体の見当を得ることを目的とする。

〔2〕方法

対象及び資料集めの方法は、〔実験A〕即ち第1部の〔実験II〕と第2部の〔実験I〕で示した通りである。

〔3〕結果の整理と考察

「自我」と「自己」の両資料を対応させる方法について示唆を与えてくれる研究は、我国においては勿論のこと外国文献の中でも殆ん

16) 17) 26) 108) 119) 167, p326)

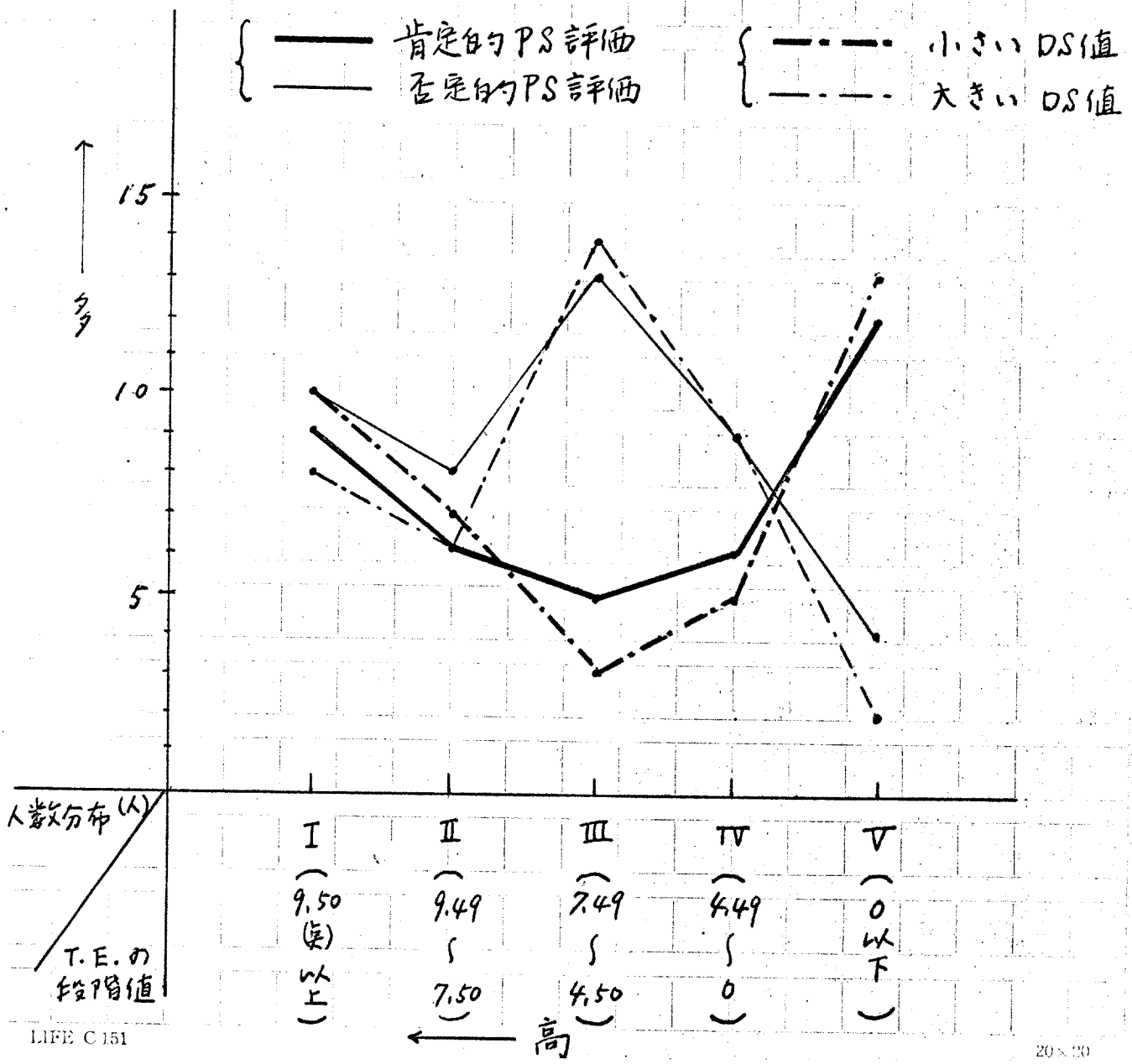
ど見当らず、僅か2、3の関連研究を見つけることができたのみでありその中でもたゞ1つ Bills, R. E.[17] によるもののみが本研究に通じるテーマを有している様に思われるので、これを少し引用してみる。Bills は自分で作製した"An Index of Adjustment and Values"[18]（IAVとよく略示される。）という自己概念（Self Concept）についての質問紙とロ・テストとを用い、質問紙の応答から自己受容（本研究における自己肯定とほゞ同義）を高く示す者と低い者についてロ・テスト結果を比較している。対象としては大学生のみを用いており、結果は、自己受容得点の高い大学生の方が、現実吟味（reality testing）の低い、又外向傾向の強いそして更に対外的及び内的制禦の好ましくないロールシャッハ反応を示し、自己受容得点の低い大学生との間に有意差が認められた。結局、ロ・テストの伝統的な解釈からしてむしろ自我機能に問題があり人格の適応性が好ましくないとされる者の方が、質問紙法では

自己受容的な自己概念を示したと云う結果をBillは提供している。但しこの研究は、対象があくまでも一応正常範囲でとられており、その中で、ロールシャッハの結果と質問紙でとらえられた「自己」のあり方（受容性）との関係を類型的に見たものでもある。しかし本研究では対象の中も適応度を異にする形で広くとられており、類型化したロ・テストの反応特性と「自己」との関連性を見ると云うよりは、適応的統合性に関する理論を背景として両者を相補的に統一視しようとする観点から両者の対応性を検討しようとするものである点、かなり異なった面を有している。

そこで、PS（現実的自己評価）の総点とDS（PSと理想的自己の評価ISとの間の"隔たり"）の総点、この2種の「現象的自己」に関するスコアと、他方ロ・テストで測定される、T.E.（自我の自律機能の全般的健全性）得点との関係を（図1.）にあらわして見た。この様に両方から総点のみを先にとり出して

用いるのは両テストにおける各下位カテゴリーで示す群の結果が総点におけるのとほぼ同様であるからでもあり，全体的な代表値によってまず両者の関係を概括的に調べて見ることにした。

（図 1.）「自我機能」の健全性のレベルと「現象的自己」との対応関係 ―その1―



(表 75) T.E. と PS 及び T.E. と DS の各対応性 ―その1―

T.E. ＼ 自己評価	PS									DS								
	肯定的				否定的				有意差	小				大				有意差
	N	P	S	計	N	P	S	計	対比	N	P	S	計	N	P	S	計	対比
9.50 以上	7	2	0	9	7	3	0	10		9	1	0	10	5	3	0	8	
9.49 ～ 7.50	6	0	0	6	2	6	0	8		7	0	0	7	1	5	0	6	
7.49 ～ 4.50	2	3	0	5	1	10	2	13	†	2	1	0	3	1	11	2	14	**
4.49 ～ 0	2	0	4	6	1	5	3	9		2	0	3	5	1	4	4	9	**
0 以下	0	0	12	12	0	1	3	4		0	0	13		0	0	2	2	**

† …… $P<.10$　　* …… $P<.05$　　** …… $P<.01$

上の図及び表の作成にあたって自己評価の PS 値及び DS 値は共に生の値によらず、各々全対象群の中央値を境にしてそれより PS 値が大である者を肯定的評価者、残りを否定的評価者とし、DS 値についても同様にして小と大の者に各々分けた。

この結果、PS 値と DS 値が共に、T.E. との間に興味ある対応性を示すことがわかる。即ち、T.E. が 7.50 以上の高い値においては肯定的 PS と否定的 PS とがほぼ同じ割合で分布し又 DS 値

の大・小についても同様のことが見られるが T.E. がそれ以下に低下すると否定的PSと大きいDSの各値をとる者が急激に増加し，肯定的PSの者及び大きいDSの者との差が著しく大となる。この傾向は T.E. が 7.49～4.50 の範囲の値をとるところで頂点に達し，T.E. 値が0の段階まで続くが，これ以下に低下すると今度は再び逆転した傾向があらわれる。即ち，肯定的PSの者と小さいDSの者とが多くを占めるに至る。そして，T.E. が全体の得点分布の中ではぼ中央値にあたる処で否定的PSと大きいDSが対応してあらわれる傾向は，(表15)にも示したごとく，他の T.E. 値に対するのにくらべ，統計的にも有意差を以って大であり，又，0以下の最も低い段階の T.E. 値に対応するDS値が小である傾向も統計的に有意味である。この様に，客観的外的な枠組から測定された「自我機能」の全体的な健全性と，それを客体化した意識的自己像のあり方との間には1つの特異な型の対応性が見出されたわけ

である。尚S群の約60%が、T.E.0以下の段階に対応する領域に含まれ、又P群の60%が、T.E.得点の中央値附近即ち細い直線と線い破線とが丁度山型をなす領域に、又N群の80%近くはT.E.値7.50以上に対応する領域に含まれる。かくて、少くともS群はロ・テストの結果とそれが意識的に客体化されたものである筈の自己評価との間には大きな"ずれ"を示すわけであるが、これを更に具体化して検討しその結果を次表に示した。表の"ずれ"の値即ちIC値は制禦と体験型の下位カテゴリーにつき次の様にして算出した。"ずれ"の

(表16) ロ・テスト結果と自己評価との"ずれ"の値ICの群間比較

ロ・テスト結果と自己評価との"ずれ":IC註	対象 N (人)	対象 P (人)	対象 S (人)	有意差検定 (χ^2) N-P	N-S	P-S
$0 \leqq IC < 1.5$	14	18	2		**	**
$1.5 \leqq IC < 2.5$	11	9	8			
$2.5 \leqq IC$	3	3	14		**	**

註 IC > Inconsistency between Rorschach results and self-evaluation

** ····· $p < .01$

程度を0.5点と1点との2段階に分け、例えば制禦において「良い制禦型の亜型」をロ・テストで示した者（第2部実験I参照）が制禦に関する評価を否定的に行なった場合には0.5点を、「制禦欠如型」の結果をロ・テストで示したものが制禦について肯定的な自己評価を行えばIC得点として1点を与えると云う具合に各個人毎に採点した。又体験型では、ロ、テストで外向か内向かのいずれか一方のみの発達傾向が弱い場合に、これに関する自己評価が拡張的であれば（第1部実験IIを参照）0.5のIC点を、又ロ、テストで収縮型を示すものが拡張的自己評価を行う場合は1のIC点を与えると云った採点様式をとっている。従って、このIC点は内的・外的両制禦と体験型の3項目にわたって与えられるものである故各人の合計点は0～3.0の範囲になる。前頁の表に示した通り、S群のみが、他の2群に比して極端に大きいIC点をとり統計的にも有意差が認められる。以上の様な各群の反応

特徴から、次には両テストの相補的な利用法が問題となるが、次の（表17）はこの点を大雑把に検討したものである。

（表17） 境界領域のT.E.値を示すP(及びN)，S両群の自己評価の比較 —その1—

対象＼自己評価	PS 肯定的	PS 否定的	PS 有意差(χ²)	全建項目におけるPS 肯定的	全建項目におけるPS 否定的	全建項目におけるPS 有意差(U)
P（N群が3名含む）	5 (人)	14 (人)	*	8	11	* *
S	9	4		13	0	

臨床的実践の場では、神経症と分裂病の境界領域に属する被験者の診断が常に問題となり、第2部実験Ⅰでも示した通り、ロールテストでもその妥当性の問題がいろいろ論じられながらも、それ自身でかなり高い確率をもって適応性の弁別をなし得、殊に本研究で用いたT.E.値（フラプレス）の有効性については他の関連研究が実証的資料を提供している[23) 130) 141)]。しかし、このT.E.値においても、6点から−2点の範囲に特にP群とS群との混在が目立ち、P（及びN）群19名とS群13名とが含まれている

。この範囲のT.E.得点はKlopferの述べる予後診断の立場からすれば、治癒確率が$\frac{1}{2}$或いはそれをいくらか上まわる程度を意味するものとされるが、これはT度P～Sに至る境界領域を指すと考えられる。ここに混在するP(及びN)群とS群とを自己評価法によりいくうかでも弁別しうるか否かを調べた結果が前頁の表であるが、まずPS総点によると、ここに属する32名の中P(及びN)群の方がより否定的PSの傾向を示し、S群との間に5%レベルの有意差が認められる。又第1部実験IIで行った質問紙-その2-の項目分析の結果からS群のみを弁別しやすい8つの鍵項目を得たが、これ等の項目のみについてのPS評価について両群を比較した結果からも両群は更に確実性を増した形で弁別されている。即ち、自我の全般的健全度がかなり低下して所謂境界領域あたりに達したところでは、その自己評価が却って否定的である方が、適応レベルが少しでも無難な段階に維持されている可能性が

より大であることを示唆するものでもあろう。このことは先に算出した〝ずれ〟の値（IC）に関する結果とも合わせて、「自我」と「自己」との関係に統合的意味をもたらすための重大な条件にかいわるものと考えられ、この点は更に次の章で検討するが、ともかく、ロ・テストで測定した「自我機能」のレベルのみに頼るよりも、その「自我機能」が意識的自己内に反映されるされ方即ち「現象的自己」のあり方を合わせて見る方法の方が、現実の適応度をより正確にとらえうることを示す資料が得られた。

〔4〕まとめ

本実験の目的1）については、自我の自律機能の全般的な健全性を示すT.E.値がそれほど高くもなければ低すぎもしない中間的なある範囲（即ち段階値では一応の5段階の中II以後IVに至るまでの間）である時、否定的PS評価と、PSとISとの大きい〝隔たり〟即ち大きいPS値がこれに対応してあらわれ、中央附近の

Ⅲ段階のT.E.でT度項矣に達するきれいな山型を呈すること，従って，この範囲の両外に属するT.E.値には，これとは逆に，肯定的PSと大きいDSとがより多く対応して出現するという特異な関係が，「自我」と「自己」との間に認められたことになる。

又，目的2）に関しては，S群が他の2群のいずれからも有意味に区別される形で，「自我」と「自己」との間の"ずれ"を最も大きく示した。そして更に，T.E.の境界領域に混在するP（及びN）群とS群とが自己評価によって有意味に区別され得，本研究でとり挙げた2つの方法の相補的有用性が示唆された。次章ではこれ等の結果を土台として更に詳しい又組織的な分析を行う。

〈第19章〉〔実験B〕，及び〔実験A〕を合わせた資料の分析

〔1〕目的

第18章の結果に基づいて更に詳しく「自我」

と「自己」との関係を分析し、両者の関係の統合的意味を追究する。そしてこれ等両者の測定方法そのものを相補的に用いる仕方をより厳密なものとすることが本章の目的であり、第1部及び第2部で残された問題を再検討しつつ、本研究の総仕上げを意図するものである。

〔2〕方法

対象及び資料集めの方法は実験B（第1部実験Ⅳと第2部実験Ⅱを参照）と実験A（先章）に示した通りである。

〔3〕結果の整理と考察

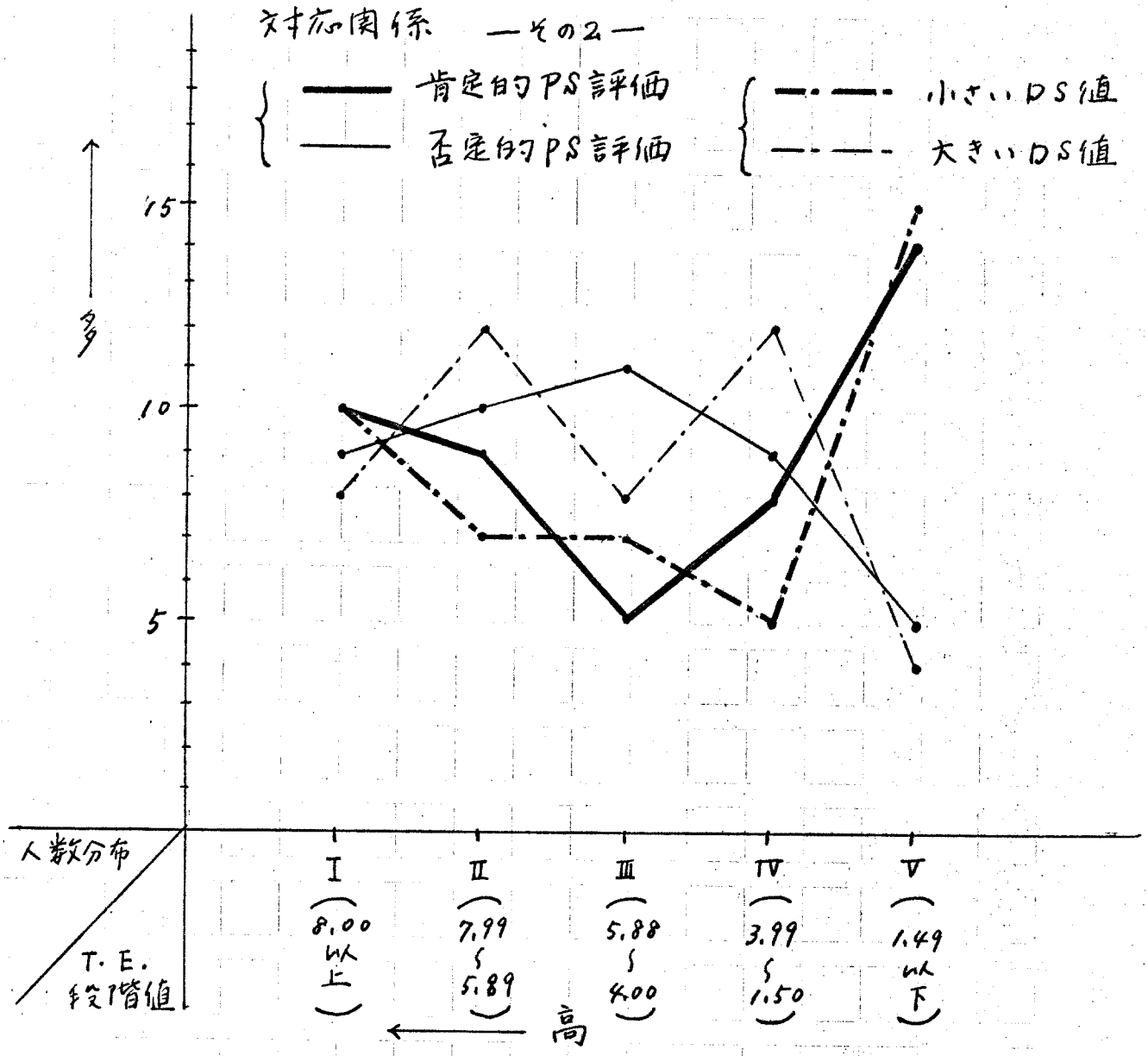
表18，図2，表19は第18章と同じやり方で、

（表18）T.E.とPS及びT.E.とDSの各対応性　—その2—

自己評価 / T.E.	PS 肯定的 N(人)	P(人)	S(人)	計(人)	PS 否定的 N(人)	P(人)	S(人)	計(人)	有意差（計について χ²検定）	DS 小 N(人)	P(人)	S(人)	計(人)	DS 大 N(人)	P(人)	S(人)	計(人)	有意差（計について χ²検定）
↑健全度大 (1) 8.00以上	9	1	0	10	6	3	0	9		10	0	0	10	5	3	0	8	
(2) 7.99～5.89	5	2	2	9	3	5	2	10		5	0	2	7	3	7	2	12	**
(3) 5.87～4.00	3	1	1	5	1	9	1	11	†	4	1	2	7	0	8	0	8	
(4) 3.99～1.50	3	1	4	8	0	8	1	9		1	0	4	5	2	9	1	12	*
(5) 1.49以下	0	0	14	14	0	0	5	5	*	0	0	15	15	0	0	4	4	**

LIFE C 151 20×20

(図 2.) 「自我機能」の健全性のレベルと「現象的自己」との対応関係 ―その2―



(表 19) 境界領域の T.E. 値を示す P(及び N), S 両君子の自己評価の比較 ―その2―

対象＼自己評価	PS 肯定的	PS 否定的	差の有意性(χ²)	DS 小	DS 大	差の有意性(χ²)
P(及び N)	12	20	*	8	23	***
S	14	6		16	4	

* ····· $P < .05$　　*** ····· $P < .001$

異なった対象について分析し，先に得られた結果をもう一度確かめたものである。図示したグラフの型は，例えばT.E.値がIIIの段階の時ここではPSのみが頂点をなしDSが細い破線において凹型の変形を見せる等細かい点では先章と異なった面が見られるが，全体としては似通った結果になっている。又表(19)はP群とS群とが重なって存在する境界領域のT.E.値において，自己評価から両群を区別しうるか否かを調べたものであるが，ここでも先章と同じく弁別の可能性が示されている。

尚本章での整理法は，被験者数の分布上，T.E.得点のレベルを先章とは少しずらせた形でとりその上で同じ5段階分けをしている。又境界領域のT.E.6.0点～T.E.-2.0点では，本実験の場合P群は比較的散らばりの少ないT.E.値をとっているので，この範囲のT.E.の上半分の間に約70%が位置しており，又S群の方でもその65%がこのT.E.値の範囲の下半分（2.0～-2.0）に属している。この様に本実験では実

験Aに比して3群の重なりが少ないわけであるが（第2部実験II参照）一応境界領域の中を先章と同じにとって表(19)の様に分析して見た。更に第1部でも述べたことであるが，実験の全対象の中．質問紙の応答を部分的に空白にしている者があり．これは応々にしてIS評価に見られているが．空白量によって部分的に結果の整理から除外されている者があり従ってPSの統計数値とDSの統計数値が表によって異なる場合が生じることをもう1度附記しておく。

いずれにしても，実験Aと実験Bとでは全体を通じて同様な結果が得られた。

そこで次は両実験の対象を合わせた分析を試みる。次の表(20)，表(21)，は同じやり方で全群の結果を纏めたものであるが．ここまでの整理によって大雑把に認めることのできた．T.E.と自己評価との曲線的な対応性を多数の被験者を対象としてより厳密に調べるために．T.E.に対する自己評価の回帰曲線及び相関比を求

(表 20) T.E. と PS 及び T.E. と DS の各対応性 —その3—

自己評価 / T.E.	PS 肯定的 NPS計 (人)	PS 否定的 NPS計 (人)	PS 有意差 (計についてのχ²検定)	DS 小 NPS計 (人)	DS 大 NPS計 (人)	DS 有意差 (計についてのχ²検定)
I 9,000以上	18 2 0 : 20	9 7 0 : 16		21 1 0 : 22	6 6 0 : 12	
II 8.99 ～ 6.50	9 2 1 : 12	9 12 4 : 25	***	14 10 2 : 16	6 13 3 : 22	***
健全度 III 6.49 ～ 4.00	6 5 2 : 13	2 18 2 : 22	**	6 12 2 : 10	2 18 2 : 22	***
IV 3.99 ～ 1.49	4 1 6 : 11	1 11 4 : 16		2 1 4 : 7	3 11 6 : 20	
大 V 1.49 ～ −2.39	0 1 10 : 11	0 1 8 : 9		0 1 13 : 14	0 0 5 : 5	
VI −2.40 以下	0 0 16 : 16	0 0 1 : 1	***	0 0 15 : 15	0 0 2 : 2	***

(表 21) 境界領域の T.E. 値を示す P(及び N), S 両群の自己評価の比較 —その3—

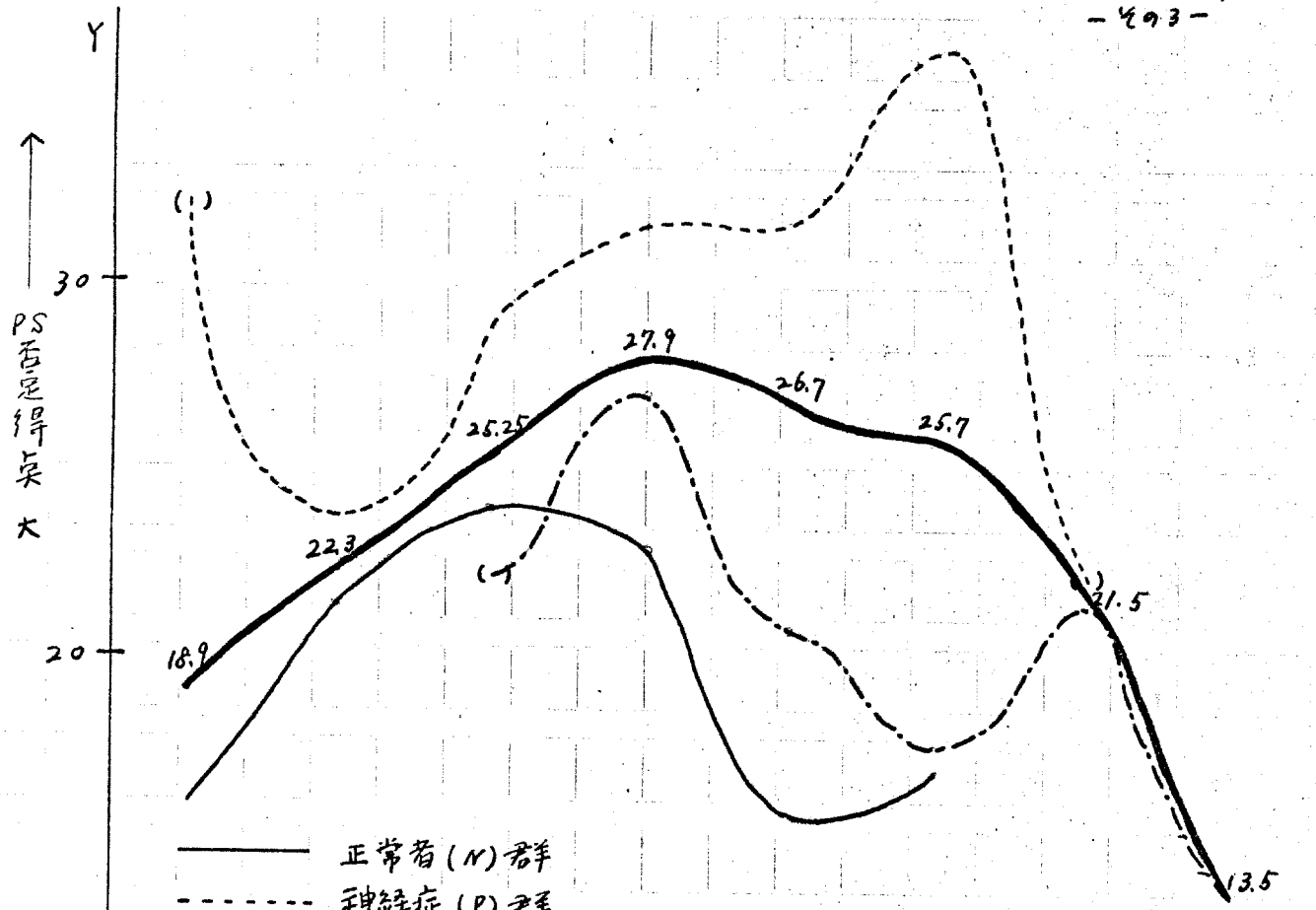
対象 / 自己評価	PS 肯定的	PS 否定的	PS 差の有意性(χ²)	DS 小	DS 大	DS 差の有意性(χ²)
P及びN	17 (人)	34 (人)	***	12 (人)	34 (人)	**
S	23	10		19	13	

[註 ** ····· P<.01 *** ····· P<.001
表20, 表21 共, PS. DS の各2分割 は2つの実験を合わせた全被験者の中央値を境として行った)

めてみた。これを3群を含めた全被験者について行うとともに、各群毎の回帰の特徴を調べたのが(図3)と(図4)である。この2つの図から、「自我機能」の全般的な健全度 T.E. とそれを意識的に客体化した「現象的自己」との対応関係を一戸厳密に見ることができる。即ち、横軸に T.E. 値を8段階に分類し

(図 3) PS否定得点のT.E.(自我健全度 総点)への回帰

－その3－



全群についての相関比
η_{yx} = .628
η_{yx} の有意性
F = 15.25
df = 2, 164
p < .01

人数分布										計
N	15 (人)	12	13	5	8	5	0	0	58
P	3 (人)	6	6	8	23	12	2	0	60
S	0 (人)	0	1	4	4	10	18	17	54
計	18 (人)	18	20	17	35	27	20	17	172

PS

I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII
(12.0)	(10.0)	(8.0)	(6.0)	(4.0)	(2.0)	(0.0)	(-5.0)

X

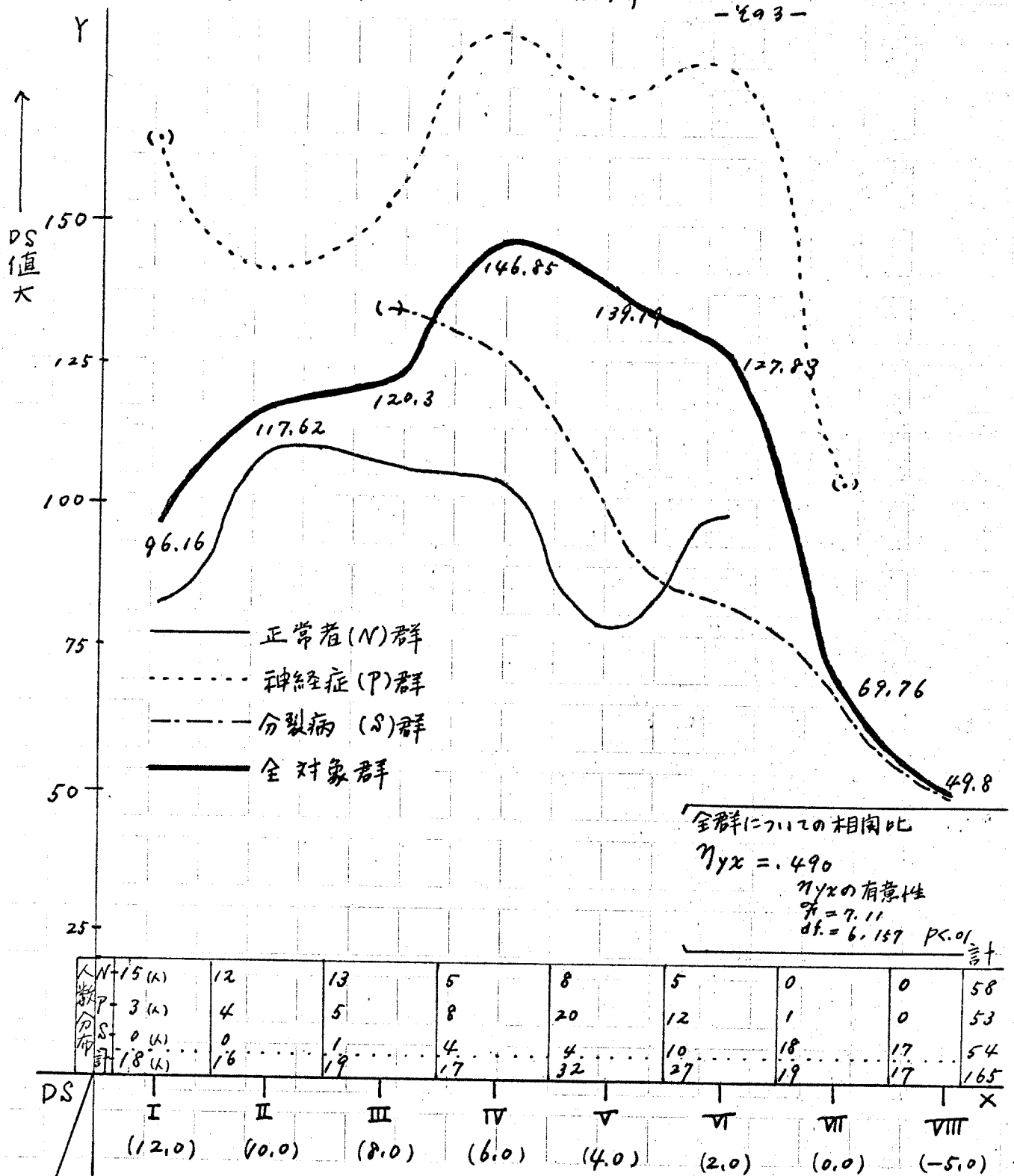
← T.E.得点 大. 即ち. 自我機能の全体的な健全度が高い

T.E.(段階値)

〔註 図中の( )はその値が3人以下の極めて少ない度数に基づく平均値であることを示すものである。〕

て目盛り．I段階から次第に右に進んで段階値が増す程T.E.得点が減少して自我機能の不健全度が増大することを示している。他方．縦軸には、図3の場合PSの否定的評価点（PS否定得点）を．図4の場合はDS点をそのまゝとった。これ等はいずれも相関比を求める上で作成した相関表[89]に基づいて図示したものである。従って各X点（T.E.得点）に対応するYの値（PS否定得点或いはDS点）は，そのX値をとる被験者のY得点の平均値に相当する。各X値に属する度数は各群別及び3群の合計について図中X軸の上に示した。T.E.の段階分けをもっと増すことによって2つの凸型曲線は更になめらかになることと思われるが．図3及び図4の各相関比は図中に示した通り．η_{yx} =.628 及び η_{yx} =.490 でこの曲線回帰の有意性はF検定でいずれも1%レベルである。これにより．実験A及び実験Bで共に予想された「自我」と「自己」との対応関係は，はっきりと凸型の回帰曲線によって示されるも

（図 4）DS得点のT.E.への回帰



（段階値）

註 図中の（）はその値が、3人以下の極めて少ない度数に基づく平均値であることを示すものである。

のであることがわかった。

これを更に群別にみると、神経症群はすべてのT.E.得点において、全群を通じての平均値よりもより否定的なそして内的価値基準によって是認されない（大きいDS値）傾向の現象的自己を示すことが認められる。従ってこのP群では客観的外的枠組から測定された自我機能の全般的健全度が同じ程度であってもそれはより低く価値づけられ内的基準によって是認されない不全感を伴った形で意識的に客体化される傾向を有することが推察される。

又、他の2群の特徴を見ると、正常者N群では、その度数分布が大体T.E.の高いレベルに集まっているためその曲線の特徴としては大体IV段階までのT.E.値の範囲におけるものを考えるべきだと思うが、P群よりはかなり離れてしかも全群の平均値からなる曲線よりも低い位置にこの曲線が描かれていることからも、同じT.E.値に対するPSの否定評価の度及びPSとISの"隔たり"がP群等に比しはるか

に少ないことが認められる。更にS群もN群と同様であるが興味深いことは、P群と分布が重なっているT.E IV～V あたりの段階で、P群の場合は全般的な自我機能が不健全化するに従ってPS否定得点及びDS値が増大して行くのに対してS群では逆にPS否定得点、DS値とも低下して来ることである。この様に見て行くとN群において、T.E.V という自我機能の全般的な健全度が少し低下して来たレベルでのPS否定得点とDS得点とが減少傾向を見せていることはや、問題となろう。このことには度数の少なさもかなり関係していることと思われる故結論的なことは云えないが、神経症・分裂病等の診断名が与えられていない普通一般の人々の中にもその適応度にはかなり散らばりのあることをうかがわせるに足るものである。以上の諸結果については後に再びまとめて考察することとし、次は実験A及びBでもとり挙げたところの「自我」と「自己」との間の“ずれ”の問題を更に詳しく分析

して見る。

同じように口・テストでとらえうれる自我の自律機能の諸側面別にそれ等に関する意識的自己評価との“ずれ”をみたわけであるが各側面毎に、その“ずれ”の程度を(1)一致,(2)準一致,(3)不一致とし、(3)の不一致を更に、否定的不一致と肯定的不一致に分類した。これ等は“ずれ”の内容に関するものであり、否定的不一致とは、口・テストの結果からすればその側面に関する自我機能は望ましく肯定的に評価されてよいものと考えられるのに、それが「現象的自己」に客体化された上での意識的価値づけが否定的である場合を指し、肯定的不一致はこれと正反対のものである。又準一致とは、各側面(カテゴリー)によってその内容が異なってくるが、要するに、十分一致しているとまでは云えないにしても不一致であるとまでは断定し得ないものを指している。各“ずれ”の内容は今後随所で次の様に略号して示すこととし、各カテゴリー

毎にこれ等の分類基準を述べておく。(1)一致 …… con (> consistency) (2)準一致 …… con' (3)否定的不一致 …… nic (> negative inconsistency), 肯定的不一致 …… pic (> positive inconsistency)

1. 全般的な情緒の安定性

ロ. テストの側においては既に述べた様な指標に基づき、(1)情緒的に不安定な問題が明らかに認められる(諸指標中4～5個にチェックされるか或いは2～3個の点においてでも集中的にチェックされる場合), (2)少し問題あり, (3)まず問題なし, の3分類を行った。他方、自己評価側の整理・分類は、このカテゴリーに属する9項目中、過半数即ち5項目以上に否定的評価を示した時、その被験者の、情緒安定性に関する自己評価を否定的とみなし、逆の場合を肯定的と認めた。この両者の対応関係によって"ずれ"が上記の4種類のいずれかに分類されるわけであるが、この場合、conに入れるか、con'に入れるかについてはいろいろ微妙な問題が含まれる故、あま

り機械的に割りすぎない様にし、右の表に示した如く口・テスト側が〝少し問題あり〟の場合は両結果を慎重に検討し直すことにより、conとcon'の2種類を個々の内容に応じて割りあてることにした。例えば、口・テスト結果がこの場合、その自己評価が9項目の殆んど全部にわたって肯定的であればcon'、又肯定的自己評価がやっと過半数にわたる程度にとどめられている場合はconとする等であり、又逆に口・テスト側の指標を詳しく吟味し直すことも行った。

口・テスト / 自己評価	問題あり	少し問題あり	問題なし
肯定的	pic	con 又は con'	con
否定的	con	con 又は con'	nic

2. 受情欲求

口・テスト側では受情欲求の成熟性は一応問題外とし、とにかく、受情欲求の認知が回避乃至は抑圧されているか否かによって2分類した。質問紙においては、既に第1部の実験IIおよびIVで、肯定－否定評価の意味が問題であることに触れたが、意識的用語による記述の仕方が、かなり強い依存性を意味する形に

なっており，ロ・テストの解釈理論で述べられている基本的な意味での受情欲求の認知と多少異なったニュアンスを持ったものになっているが，一応〝認知〟の面での一致性をほぼ推定しうると考え，右表の様な仕方で分類した。自己評価側の肯定－否定分類は，これに関する3項目中2項目までを肯定的に（依存感情の直覚的表現）評価しているか否かによって一応割り切って行った。

ロ・テスト / 自己評価	受情欲求の認知受容	受情欲求の回避・抑圧
肯定的（認知）	con.	pic
否定的	nic	con.

3．攻棗欲求

これは攻棗欲求の認知に関してのみ．2．と同様な仕方で分類した。

4．外的制禦及び．8．内的制禦

これ等は互に関係の深いカテゴリーである故，〝ずれ〟の分類法も自ずと同様なものとなり，ここで合わせて述べておくことにする。一応の基準は右表の様になるが，〝良い制禦の亜型〟の場合は，右表の〝良い制禦〟

ロ・テスト / 自己評価	良い制禦	制禦欠如	収縮型
肯定的	con	pic	pic．又は con′
否定的	nic	con	nic 又は con′

の時の分類と同じになるか或いはcon'となるかのいずれかであり、殊に内的制禦の場合は、収縮型とは異なる過制禦(価値体系が強固に確立されすぎているもの)が、良い制禦又はその亜型の中にいくつか含まれて来たりするため分類はかなり複雑でもあったが、1.の場合と同様、各個人毎の特徴を重視して行った。

5., 6., 7., 9., においても各々内容は異なっているが、大体以上に述べた様な要領で、con, con', pic, nic, の4通りのいずれかにあてはめるよう分類した。

そして得点は、con, pic, nic. に対し各1個完1点を、con'には各0.5点を与えることとし、総点は、con'をconの中に含めて、計3種について算出したが、カテゴリー数が9である故0～9点の巾となる。

尚、この分析は、実験Bの被験者のみを対象として行った。その理由は、実験Bがそれまでの累積的研究を基盤としてこの"ずれ"を

より詳しく組織的に吟味することを目的として行われたからである。実験Aでは質問紙に不備な点がかなりあったことを考え、その対象をこの分析に加えることは避けた。そこで、(表22)は各群別に、各カテゴリー毎のcon, con', mic, picの人数分布を示し3群を比較したものである。2,3,4のカテゴリーではcon'を最初から分類に加えていないため残りの3種について結果を表示している。S群ではcon(一致)得点そのものが他の2群よりも有意味に低く、又pic(肯定的不一致)点が逆により高くなっている。mic(否定的不一致)点は全体を通じてP群に最も多く見られ、全カテゴリーにわたる延べ人数及び1,5,でN群との間に、又、5,7,8,総点、及び延べ人数においてS群との間に有意差が認められた。con得点はN群において最も高く、S群との間では勿論、P群との間にも、8,総点、延べ人数の上で多少とも有意差が見られた。結局、全体を通じた結果では、3群中S群が

(表 22) ロ・テスト結果と自己評価との"ずれ"の群間比較

カテゴリー			人数分布			群間比較 (差の有意性)		
カテゴリーの内容	"ずれ"の分類		N	P	S	N－P	N－S	P－S
1. 全般的な情緒の安定性	con		18(人)	17(人)	4(人)	}	} **	} **
	con'		2	3	6			
	nic		0	7	2	*		
	pic		10	3	18	†	*	***
2. 愛情欲求	con		16	13	15			
	nic		3	11	10	†	†	
	pic		11	6	5			
3. 攻裏欲求	con		22	15	15	†	†	
	nic		4	6	6			
	pic		4	9	9			
4. 外的制禦	con		14	12	5		*	†
	nic		6	9	8			
	pic		10	9	17		†	*
5. 情緒反応の自由さ	con		15	11	17			
	con'		5	2	2			
	nic		6	15	1	*		***
	pic		4	2	10			*
6. 律動性への接近(親和)	con		22	19	13		*	
	con'		0	0	0			
	nic		3	6	1			
	pic		5	5	16		**	**
7. 精神機能全体の活発さ、豊かさ	con		15	11	7		}**	
	con'		4	2	4			
	nic		5	9	1			*
	pic		6	8	18		**	**
8. 内的制禦	con		9	7	3	} *	}**	
	con'		7	0	1			
	nic		12	16	7			*
	pic		2	7	19		***	**
9. 現実吟味	con		14	12	3		}**	}*
	con'		6	3	2			
	nic		6	6	1			
	pic		4	9	24		***	***
10. 全体	述べ人数	con(及びcon')	169	127	97	**	***	*
		nic	45	85	37	**		**
		pic	56	58	136		***	***
	総和	Con表 高 (S≧45)	23	16	7	†	***	*
		Con表 (及びcon') 低 (S<45)	7	14	23			
		nic表 高 (S≧15)	19	23	8		**	***
		nic表 低 (S<15)	11	7	22			
		pic表 高 (S≧3)	4	9	25		***	***
		pic表 低 (S<3)	26	21	5			

註 差の有意性の検定は、大体 χ^2 検定を用い、総和については U 検定と両方行ったが表示した χ^2 検定の結果と同様になった。(但し、U 検定では 10% レベルまでの結果しか出なかった) † … P<.10 * … P<.05 ** … P<.01 *** … P<.001

最もきわ立った結果を示し，NとP両群は比較的似通っていたことになる．もう少しカテゴリー毎に結果を追ってみると，1.，4.，6.，7.，9.，では．1.においてP君群とN群との間にわずかながら不一致得点の内容が逆転（P群の方にmicが多くN群は相対的にこれと逆になっている．但し．いずれも絶対数はわずかである．）している結果有意差がこの不一致点について見られる以外は、全部S群のみが先述したごとき低いCon乃至はCon'点と高いpic得点によって他の2群から区別されているわけであり．N，P両群間には差が認められない。8.においてもこれとほぼ同様な結果が得られているが．ここではP群も一致点が低くN君群との間に有意差が生じており．又P君群ではその結果不一致点の中mic点の方が多くなっているためその点の方がS群との差が有意になっている．この様にP群が他の2群より区別される結果は5.においても認められており，5.ではmic得点がきわ立って高い

ため，N，Sいずれの群との差も有意となっている。5.，8.，の結果は，神経症群が，客観的外的な枠組から見れば，衝動に対する制禦（防衛がかなり自律化して働くことによりなされる）が果されており，又対外関係における情緒の自由な交流にそれほど極端な問題はないものとみなされるのに，意識的に客体化された「現象的自己」のレベルでは，衝動に圧迫されており防衛を成功的に働かせる制禦機能に自信を欠くこと，そして対外的情緒交流を非常に不自由だと感じそれに強くこだわっていることを示していると考えられる。これ等は後にも触れるが，衝動防衛に過剰なエネルギー消費を行い，それに対応して対外関係がおのずと制限されがちな神経症独特の傾向及び，厳しい超自我や健全な自己愛の障害によっては常以上に自己を肯定しがちなこの群の傾向を具体的にあらわしている一資料とも解せられる。又，2.及び3.のカテゴリーでは先述したように，「自我」と「自己」の両資

料を対応させることにいくらか問題が含まれているためかあまりはっきりした結果が出ていない。総点ではこれまでの全般的な結果と同じく、S群が低いcon.得点とmic得点そして高いpic得点を示し他の2群から明らかに区別されている。NとP群では，N群の方がより高いcon.得点を又，P君洋の方がmic得点をより高く示す傾向があり．各得点をとる近べ人数の比較においてはかなりはっきりした差が認められたが．下位カテゴリー毎の検討や又各人毎に3種の総点を算出した結果の比較ではもう1つ十分な統計的有意差が見られていない。従って，この〝ずれ〟の分析からは、S群の特徴が最も一貫して認められた。

次は、T.E.レベルの変化に対応してこれ等3種の〝ずれ〟得点がどの様に変化するかを見るために（表23）と（図5）を作成した。（図5）は（表23）から，群別にではなく全群を含めた人数の分布をしらべ、3種の各得点についてその高得点者の占める割合を，各T.E.

の段階値毎に算出しこれを%であらわして図示したものである。各種得点の高—低得点の分類基準は先の表22の最下欄に記した通りである。この結果、全体的傾向としては、高いcon得点が占める割合は、T.E.レベルが低下するに従って減少し、又高いmic得点についてもほゞこれと同称な傾向が認められる。これに対して、高いpic得点の占める割合は、T.E.のレベルが低下するほど直線的に増大していることがわかる。より詳細に見れば、con得点はT.E.=5.89以上のところでは非常に高く(この中には神経症群の約37%も含まれる。N群は73%がこの範囲に属している。)、T.E.がそれ以下の値になると逆に低いcon得点の方が多くなりこれが殆んど全体を占めるに至る。又高いmic得点は、I～III段階あたりのT.E.ではほゞ同程度に多い割合を占めており(この中にはN群の90%とP群の70%が含まれる。)T.E.がIV段階目を過ぎると急にこの割合が減少し低いmic得点と交代する形

(表23) 各T.E.段階値における各"ずれ"得点の分布

"ずれ"の各種得点 ＼ T.E.(段階値)			I 8.00以上	II 7.99〜5.89	III 5.88〜4.00	IV 3.99〜2.50	V 2.49以下
Con(及びCon')	高	N(人)	11	8	3	1	0
		P(人)	3	4	2	6	0
		S(人)	0	2	1	1	4
		計(人)	14	14	6	8	4
	低	N(人)	4	0	1	2	0
		P(人)	1	3	2	3	0
		S(人)	0	2	1	4	15
		計(人)	5	5	10	9	15
	差の有意性(χ^2)		***				*** ***
Mic	高	N(人)	11	4	2	2	0
		P(人)	2	6	9	6	0
		S(人)	0	4	0	0	4
		計(人)	13	14	11	8	4
	低	N(人)	4	4	2	1	0
		P(人)	2	1	1	3	0
		S(人)	0	0	2	5	15
		計(人)	6	5	5	9	15
	差の有意性(χ^2)		*			***	*** ***
Pic	高	N(人)	0	1	1	2	0
		P(人)	1	1	4	3	0
		S(人)	0	3	1	5	16
		計(人)	1	5	6	10	16
	低	N(人)	15	7	3	1	0
		P(人)	3	6	6	6	0
		S(人)	0	1	1	0	3
		計(人)	18	14	10	7	3
	差の有意性(χ^2)		***			***	*** ***

** ・・ $p<.01$　　*** ・・・ $p<.001$

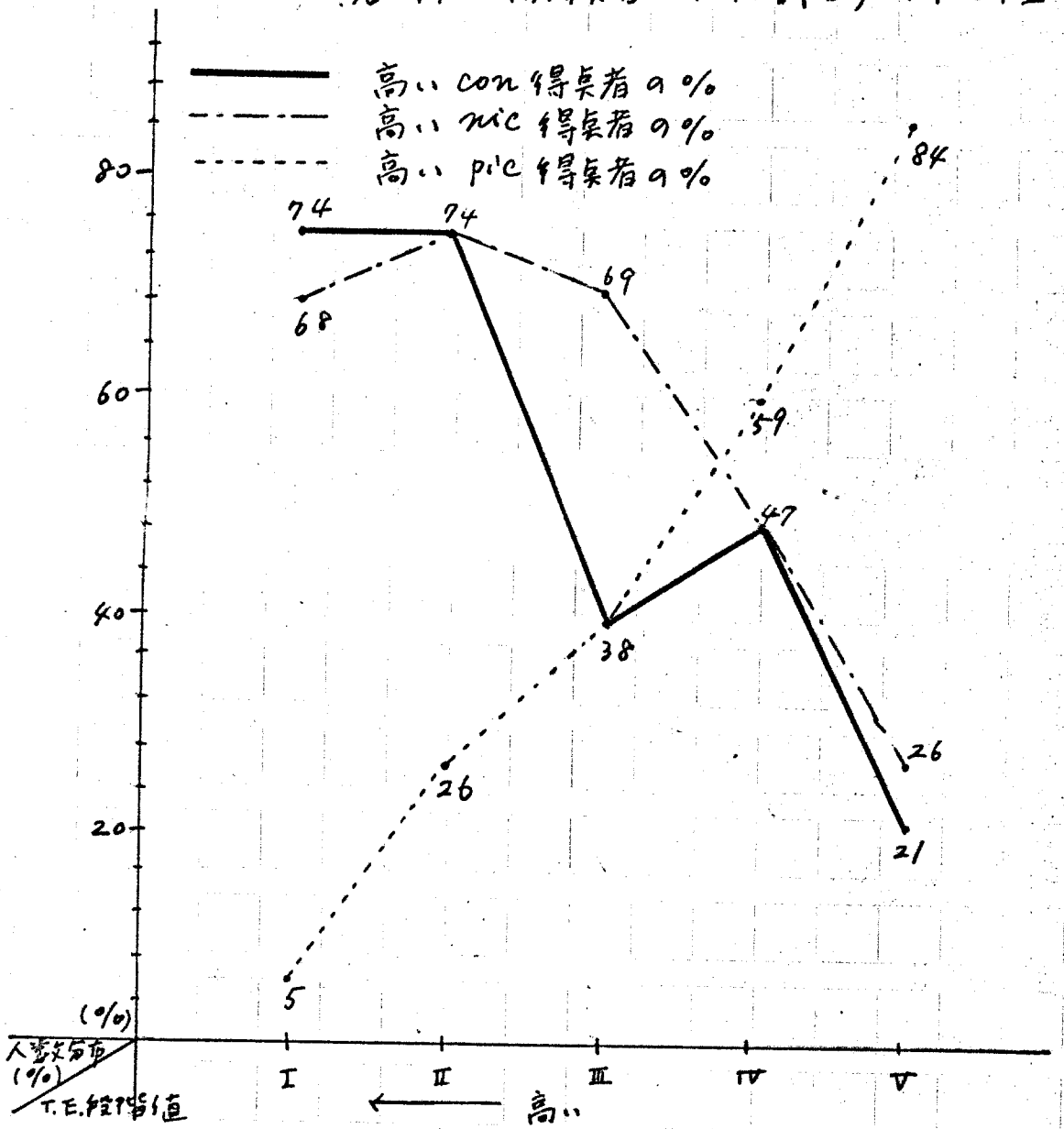
注.
差の有意性検定は3群の合計の人数分布に関して行ったものである.

Conの低得点者がI, IIのT.E.において少なくIV, VのT.E.に対応して多いことが有意味

T.E.=I, IIではMicの高得点者が多くT.E.=IV, Vでは Micの低得点者が多いことが有意味

T.E.=I, II, では Picの高得点者が極めて少なく, それがT.E.=IV, Vでは非常に多いことが有意味

(図 5) T.E.値の変化と、各"ずれ"得点者の人数分布(各T.E.段階において各"ずれ"の高得点者が占める割合)の対応性



(表 24) T.E.の境界領域における P(及び N)と S 両群の"ずれ"得点の比較

対象	pic(肯定的ネー致点) 高	低	差の有意性 (χ^2)	nic(否定的ネー致点)		差の有意性 (χ^2)
P及び N	10	16	**	19	7	***
S	22	4		4	22	

** … $p<.01$　　*** … $p<.001$

となる。又、高いpic得点は先述した如く、T.E.段階値の移行にともなって直線的に変化するがⅢの段階値までは半分以下であるのに以後著じるしくその割合が増し、Ⅴ段階ではほんど全体近くを占めるに至る。(但し、この最終段階値にはP及びN群は含まれていない。)

(表24)は"ずれ"を示すmic及びpic両得点によって、T.E.Ⅲ～Ⅴの所謂境界領域に重なって存在するP及びN群とS群が区別されうる程度を検討したものであるが、いずれの"ずれ"得点によってもS群は比かう区別されやすいことが認められる。この様に、"ずれ"得点はPS評価と同様もしくはそれ以上に、T.E.のみでは判別しにくい適応差を、より的確にとらえうることがわかる。

〔4〕まとめ

ここではまず実験Bの資料について先章と同じ仕方で「自我」と「自己」に関する各テスト結果の対応性を大雑把に検討し先章とほぼ

同称な結果が得られた。そこで更に実験AとBとを合わせた被験者について、同じ桌をより厳密な方法で分析したところ、結局、両者の関係は、「自我」の全般的な自律機能の健全度を示すと考えられるT.E.に対する「自己」の否定的評価（PS否定得桌）の関係を調べた場合、後者は前者の減少に従って凸型の回帰曲線を描いて変化することがわかり、両者の相関比，曲線回帰の有意性が統計的に1%レベルの危険率を以って認められ、又PS否定得桌の代りにDS得桌を置きかえて分析してみても同称な結果が得られた。そして全群を合わせた被験者に関するこの回帰曲線に加え、各群別の回帰曲線をも各々描いてみると、P群の曲線が全群の曲線の上側に，そしてN，S両群のものが下側に来ることが認められ、このことから同じT.E.レベルによって示される「自我」の健全度も，それを「自己」像として客体化し意識的に価値づける仕方には各群毎に異なった特徴のなすることがわかり、

これについては319～320頁に少し詳しく述べたので省略するが興味ある結果だと思われる。又、「自我」と「自己」との対応性を、両者に関する資料の"ずれ"と云う観点からも、先章よりは詳しくより組織的に分析することを試みた。これは、最初からその意図の下に作成したテスト材料によって行った実験Bの被験者についてのみ、9つのカテゴリーで示される自律的自我機能の諸側面に関して、ロ・テスト結果と自己評価とを一々対応させることにより分析した。そして両者の対応性、"ずれ"のあり方から、一致(con)、準一致(con')、否定的不一致(nic)、肯定的不一致(pic)の4種類の得点化を行い、各得点について3群を比較した。その結果、S群が最も低いcon得点とnic得点、最も高いpic得点をとり、いずれも全体として他の2群との間有意差を示し、NとP群とでは、前者がより高いcon点を、後者がより高いnic点を示す傾向が認められたが、統計的には一貫した有

意差がなかった。T.E.レベルの変動に従って、con（及びcon'）, mic, picの3種得点の高低がどの様に移行するかを調べた結果では、T.E.が中央値（実験B全群に関するもの）まで或いはそれよりもう少し高いT.E.の段階値までにおいては高いcon, 及び高いmic得点の占める割合がほぼ同程度に多くなり又、T.E.の段階値がそれを過ぎて低下するとこれ等は急速に減少し、これと入れ代って高いpic得点が占める割合が著しく増大するのが認められた。その他、この"ずれ"に関する得点が境界領域のT.E.値をとって混在するP（及びN）, S群を弁別する上で役立つものであることもわかり、結局、これ等の結果から、全群を通じての、及びN, P, S各群における、「自我」の自律機能とその客体的反映である「自己」との関係がより詳しく示され、各々に関して片方の枠組から得られた資料のみでは把握し得なかった各群の特徴が明らかになり、これ等2つの枠組による方法の相補的

又綜合的使用の有用性が実証された。

〈第20章〉第3部の総括と結論（本研究の綜合的考察）

第3部では、第2部で口．テスト法により再度同様な結果を以ってとらえた自我の自律的機能の健全性と．これを意識的に客体化して価値づける仕方（自己評価）について第1部で累積的研究を通じて得られたところの方法即ち「現象的自己」をある一貫した自己評価の型としてとらえる方法により調査した資料との両者の関係のあり方を全被験者及びN，P，S各群に関して分析した。これは、1）「自我」側及び「自己」側の各結果を総点（Total score）により代表させ，即ち．T.E.点（自我の自律的諸機能の健全度に関する各得点を総和したもの）とDS否定点及びDS点（夫々現実的自己を否定的に評価した総得点と「現実」と「理想」の両自己評価間の"隔たり"の総得点），これ等両者の対応関係を調べる

こと、2）両者の結果を各々独立的に得点化するのでなく、両テスト法に共通して組み入れたところの自我機能の諸側面に関する下位カテゴリー毎に各々の結果をつき合わせ、両者の"一致"—"不一致"を4種類に分類して得点化して行う分析　の2つの主要な方向から試みた。

りのやり方に関しては、予備的段階の分析として実験A及びBの各被験者につきそれぞれ行ったところの、T.E.値の変化とPSの肯定的及び否定的各評価者の数の変化との関係或いはT.E.値の変化とDS高得点者及びDS低得点者の各数の変化との関係についての大雑把な分析により、ほぼ共通した結果として、T.E.値が、高→中→低と変化するに従い、PSは大体肯→否→肯、又DS値は小(低)→大(高)→小(低)と変化することが認められ、従って、否定的PS評価者の数とDS高得点者数とを各々T.E.値に対応させた場合はT.E.値が高→中→低と変化するに伴い両者は同様にT.E.中央値附近が大体頂上を

形づくる山型をなして変化することがわかった。これ等は3群を全部合わせた者について行ったのみであるが、「自我」と「自己」各々に関する資料間の全体的な対応関係がほゞ予想されたので、更に実験Aと実験Bとを合わせた被験者につき T.E. 対 PS 否定得点; T.E. 対 DS 得点の各関係をより厳密な手続により分析した。その結果は、第19章(4)でまとめた通りであるが、高→低と変化する T.E. 値に対し PS 否定得点及び DS 得点は凸型の曲線回帰を同様に示しながら変化するものであった。即ち、T.E. 値によって示される自我の自律的機能の全般的な健全度がかなり高い所と逆にかなり低いところとでは共に現実的自己評価がむしろ肯定的であり(低い PS 否定得点)価値基準により是認された形のもの(小さい DS 得点)と云されており、これに対し、中間的な T.E. 値には反対に価値基準によって是認されない否定的な現実の自己評価の対応することが認められるわけであり、そうした自己評価は全

体としてかなりなだらかに連続して変化し曲線を描く結果となった。こうした全群の傾向を一応の基準として見た場合、N, P, Sの各群の特徴は相対的にかなり顕著な形で描き出されることがわかった。これ等各群の特徴は後でまとめる。

2)については、実験Aで3つのカテゴリーについてのみ"ずれ"スコアを算出しS群即ちT.E.値が平均して低い対象においては極端にこのスコアが大であることを見出していたが、実験Bの被験者につき、より詳細に分析した結果、T.E.値が高→低と変化するに従い、外的枠組であるロ・テストにより測定された自我機能の健全度をそのまゝ正しく"低い"ものとして内的枠組である「自己」に反映させず、ロ・テスト結果と一致しない形で高く自己評価する者(高いpic得点者)が次第に増加する傾向にあり、逆に、客観的に測定された自我機能を正確に客体化し得ていることを示す一致得点(con及びcon'得点)と先のpic得点

を与える場合とは反対の〝ずれ〟方を示す否定的不一致得点(nic得点)について見れば、これ等の得点を高くとる者の割合が、T.E.値の高→中→低という変化に対して、中→低で急速に減少しそれより高いT.E.段階においてのみかなり多くを占める傾向が認められた。1)と2)の各結果は互に矛盾のないものであり、別の方向及び手続から、同様な意味を示す関係が、「自我」と「自己」の両テスト結果の間にみられたわけである。これが3群を一諸にした全対象についての結果であり、こうした全群の傾向を背景としながら、適応群Nと異なった不適応症状を診断されているP;S2群の各群の結果をまとめて見ると以下の様になる。

N群……ロ・テスト結果では第2部に示した通り最も高いレベルのT.E.値、又自我機能の諸側面を示す各下位カテゴリー全般にわたって3群中最も望ましい反応型が再度の実験を通じて得られた。又、自己評価に関する第1

部の累積的資料全体を通じ，一貫して，高い肯定的なPS（現実的自己）評価，小さいDS値（'現実'と'理想'の両自己評価間の'隔たり'の値）を示し，これはP群との間に常に明らかな有意差を認めるものであったがS群は全般を通じてこのN群と同様な形の自己評価をみせた。そして，両テスト結果の対応性に関しては，高いCorr.得点によって示される如く，3群中で最も良く一致した対応関係を見せ，又，同じT.E.値（N群におけるこの値にもかなりの巾はあり，P群に比し平均値は明らかに高い方にずれてはいるが，これ等両群はある巾の重なりを示す。これに比しNとSがこの値で重なることは，勿論，ずっと少なくなる）をとるP群の被験者とくらべた場合，その自己評価は，図3及び4に示した通りはるかに肯定的であり（高いPS値）又'理想'と'現実'の両自己間の"隔たり"が小さいものとなっている。但し，S群の称に，肯定的な方向に'ずれ'すぎた自己評価（高いpic得点）を示.

すことはなく．これには口・テスト結果そのものの両群間における差が関係しているが．pic得点そのものは常にS群との間に明らかな差を示している。

P群……口・テストでは全般を通じて殆んど常に，N，S両群の中間に位置する結果を示し，両端の2群に比すると，量・質共に，他からはっきり区別されうる特徴を見せなかった。これに対し，第1部の「自己」研究においては，常に一貫して，低い否定的なPS評価と大きいDS値を示し，お互に似通った自己評価の型を示すN，S両群にくらべ，この2群から明らかに区別される顕著な評価型をとった。両テスト結果の対応性に関しては，S群とは対照的にpic得点が低く，N群をやや下まわりながらも（一貫した，十分な有意差は認められない）かなり高いcon得点，及びS群ではわずかしか見られないところのpic得点をN群を上まって高くとる傾向（この点でのN，P間の有意差は，con得点の場合と同

様，一貫して十分なものではなかったが）を示し、図3及び図4に基づく分析では，同じT.E.値に対する自己評価が，S群との比較においてはもとより，N群とくらべても，はるかに低い肯定的なPSと大きいDS値によって特徴づけられ，これは全群に関する回帰曲線を境にすれば，両群の曲線が明らかに上下に分かれることからも予想される通り，心理学研究（第30巻第4号）のP.279のFig1とTable3に示した方法により統計的検定を行えば，両群の間及びこのP群とS群との間には1%レベル以下の有意差が認められた．従ってP群はS群の様に口・テスト結果とくらべて肯定的な方向に“ずれ”た自己評価を行う傾向は少なく，“ずれ”分析における様なやり方では両テスト結果が‘一致している’と見做しうる範囲にあるか或いはむしろ自己評価の方を口・テストで測定された結果よりも全般的に下まわらせ又理想像との“隔たり”を大きく示す傾向を有していることがわかる。これによってP群は他の2

群からそれぞれ区別されうる特徴を示したことになる。

S群……ロ・テストでは、各下位カテゴリー及び全体の総スコアであるT.E.値においても常に最も低い自我の自律的機能のレベルを示した。他方、自己評価の累積結果では一貫して、N群と似通った高い肯定的PS評価と小さいDS値をとり、P群とは明らかな有意差を示しながらもロ・テストで最も大きな差が認められたN群との間には殆んど差が認められずむしろ全体としてはN群を上まわる自己評価即ち、より高いPS評価とより小さいDS値をとる傾向をみせ、殊に後者のDS値では、実験Bの結果にも示した通りN群との間にも絵哀等で有意差が認められている。そこで、両テスト結果の対応性に関しては、Con得点が著しく低く、逆に不一致得点の中のpic得点が非常に高くなっていることによって示されるごとく、両テスト結果は3群中で最も矛盾した不一致な関係にあり、その"ずれ"は

ロ・テスト結果にたし自己評価が肯定的すぎ又、'理想'と'現実'の両「自己」間の隔たりが極めてわずか或いは殆んどみられないと云う点で特徴的である。これはP群の結果と全く対照的であり、図3及び4でも認められる通り、P群ではT.E.値が低下するに従いPS否定点はどちらかと云えば増加する傾向にあり、又DS点も増加しないまでも同じ程度の高さに保たれている傾向を示すのに対し、S群では同じ範囲でT.E.値が低下するに従いむしろPS否定点が低下(肯定的PS評価が増える傾向)し、又DS値はーP急激な勾配を示して低下する傾向が見られ、従って、P群とS群との自己評価の差は両群が重なって存在する範囲のT.E.値においてこの値が低下する程ー尸大きくなっていることがわかる。

以上は各群の結果をそれぞれ要約してまとめたものであるが、「自我」の自律的な諸機能を客観的外的枠組から測定しようとする1つ

のテスト．これに対して，「自我」のかいる諸機能を意識的に客体化した「現象的自己」を内的枠組から1つの自己評価のあり方としてとらえようとする方法．この2つのいずれか一方のみでは十分とらえ得なかったところの各群の特徴が第3部における綜合的な分析の結果それぞれ明らかになった。これ等の各特徴の意味については次に考察するが，両方法の相補的又綜合的使用の必要性及び有用性はここまでにおいてもすでに示されており，各群の両テスト結果の対応関係についての特徴に基づいて3群が一応有効に弁別されることは，臨床実践において最も問題となる，P群とS群との境界的領域に称されているある範囲にわたって混在する対象について，その現実的適応性を判別することを試みたいくつかの分析（同じT.E.範囲の対象に関して，PS，DS又は，不一致得点の種類から，PとS両群のいずれに属するかを弁別しようとするもの）結果などからも具体的に示されている。この

様にして、結局、ロ・テストは3群を、云わば、$N\overset{(>)}{P}\overset{(>)}{S}$と云う形で略示しうる様な関係にあるものとしてとらえ、他方、自己評価法は3群から$N\overset{(=)}{S}\overset{(>)}{P}$とでも略示すべき各結果をひき出し、これに対して、両方法を相補的に用いて行った綜合的な分析からは云わば、$N\overset{S}{\underset{}{\wedge}}P$とでも示さるべき各特徴的な結果が得られたことになり、一方のテスト法のみでは不鮮明であった群差が一層明らかにされたと云えよう。そして又、この様に両結果を対応させることにより、各テスト結果の意味が初めて或いはより一層深く理解されうるものと考えるが、次にはこの点も含めて、各群が示した結果の意味を、第1編で行った理論的研究に基づき考察したい。

「自我」と「現象的自己」との関係については、両者の形成、構造、機能の3つの面から考察し、この両者間には、本来、人格の統合を志向する非常に密接な関係が存在することを認めた。(第1編第4章)即ち、自我は、

一次的自律装置及びその機能に加えて二次的自律の機能（環境の現実的要請，超自我の要請，本能的衝動の活動と云う3者の葛藤を能動的に解決し，それによって生成されるところの変容された派生衝動を動因とする自律的適応機能）を形成しその組織である'葛藤外の自我領域'を1つの層的構造をなすものとして築いて行きながら．それ自身の姿を「自己」像に反映させて行く．換言すれば，自我は自ら主体として機能しつゝ，その'機能する自分自身'を客体視する（自分自身を認知する内在的自覚の機能）と云う2重の働きを行うことによって現象的自己を生成せしめるわけであり，このことから，どの様な「自己」が生成せしめられるか，それは自我機能そのものにかかっている即ち，現象的自己は，その組織を築き機能を発展させて来た自我の現段階までの到達点をそのまゝ反映すると考えられる。だが，「自己」は単に「自我」の映像であるにとどまるものではない。「自己」

は「自我」にとって，他の派生衝動と同じくしかしそれ等の中では中性化・社会化の度が最も高いと考えられる自律的動因としての役割を担う。即ち，「自我」は「自己」を自らの鏡映像として見ることにより，その機能を整え，個人の存在（生物・心理・社会的な）を維持発展させようとすることが考えられる。「自我」は自らの生物・心理・社会的発達過程を通じ，それを反映させた「自己」という意識的客体を生成し，そしてこの「自己」が「自我」からより高次の（自律的諸機能以上の）機能をひき出しそれに加担する役割をとることになる。ここで‘高次の’と称した重要な機能，本来，「自我」と「自己」とがたがいに表裏一体的な密接な関係の下につかさどる機能を“統合機能”と名づけ，本研究ではこれを一応次の様に定義した。即ち，対象関係と精神内界への統制的疎通とを単一的に行いつつ，生物－心理学的な個性を，主観的ならびに客観的に社会から是認された形で持

統的に発現せしめて行く機能がそれである。自我が現象的自己を生成するそのことと自体の中に、本来、適応的統合への志向が既に含まれているとも考えられる。かゝる統合機能が、人格の適応と最も重要な関係を有するであろうことを考察し、そしてこの統合機能を規定する条件を論究して(第1編第4章[4])内・外両枠組から「自我」と「自己」をテストし、それ等を綜合して、この条件を検討し、適応における統合機能の重要性を実証したわけである。

そこで、この統合機能の観点から、各群における上記の結果を考察すれば以下の如くになる。

1) 正常者群

自我の自律機能全般にわたる健全度が最も高く、これは諸側面の機能がロ・テスト解釈論からみて望ましい形で発現していることに裏づけられたものである。又他方、そうした自我機能の意識的客体化も、3群中最も正確になされており、現象的自己は、外的枠組から

とらえられた自我の諸機能を、"ずれ"の少ない形で反映している。そして更に、この「自己」は内在化された価値基準により是認されている度合の高いものであり、理想的自己像(第1編第3章108頁以降に述べた"自我理想"的意味合いを担うものと考えられる。)と矛盾を強くはらんだものであるよりはむしろ、これとより調和的であり、現実のありのままの「自己」がともかく受け容れられようとする傾向にあることがうかがわれる。不満感の強い貶価的な自己評価よりも、現実の「自己」を尊重し肯定的に価値づけようとする自己態度を有するであろうことが、第3部の結果でも読みとられうる。これ等は、上述した適応的統合機能を遂行する上で、「自我」側及び「自己」側に各々必要な条件として考えたものを全体的に満たすことになり、こうした「自我」と「自己」であってこそ、前者が後者を自らの拠り所とし又積極的な指針として、生物・心理・社会的な在としての個人

の可能性を統合的に発現させる方向に、より十全に機能することが期待されるわけである。もっとも、本研究では、この正常者群を、所謂"最適の人格"(optimal personality)[152]を意味するものとして設定したわけではなく、神経症、分裂病を加えた3群は、本研究全体を通じての、適応差に関する最も基底的な基準が自明なものとして扱っているが、これ等は、最も現実的な意味でのある適応差を代表するものとして選ばれたわけであり、絶対的によりは相対的な適応の違いを示すものと考えている。従って、正常者群のテスト結果も、当然に"最適"を意味するものではない。それ故、第2部で見られたところの、自由で能動的かつ統制を失わない社会関係及び対精神内界との自由で統制のある疎通的関係、衝動防衛の適応的成功、自然な情緒の動きの内的自覚と自由な情緒反応、正確な現実検討力、精神機能全体の豊かさ・洗練さ等、自我心理学的に見た、一次的及び二次的な自律的準統組織の

発達とその機能の健全性，そしてこの結果に基づいて見られた，「自己」の客観性，肯定的価値づけ，社会的是認の感情の意味も，厳密には，他の不適応な群との比較から相対的に認めうれたものに他ならない。しかし，[36] よりこの様な傾向が顕著である程，Eriksonが指摘する様な，心理社会的適応感（well-beingの感情），他人からも是認されているとの感じを抱くことにより安心して前進し個性を発現して行きうる感じ，更には身体的くつろぎをも伴う同一性の感情（identity-feeling）がより多く対応して生じることと思われ，又，自己確実感（self-certainty）の確立されている度合も高いと考えられよう。

2）神経症群

ここでは，まず自我機能の全般的な健全度そのものが正常者群より劣り，機能の諸側面に関しては，ロ・テスト結果からN群との間にそれ程明瞭な差が認められたわけでもなかったが衝動性への接近，内的制禦等についての

結果から第1編129頁以降に述べたところの、衝動防衛のための反対充当エネルギーの過剰消費とそれに伴う対象充当エネルギー(object cathexis)の減少と云ったエネルギー経済的問題、そしてこれに関連して、結局衝動、現実、超自我間の葛藤が中心問題となり、自由な内的疎通の機能及び活溌な対象関係が障害され現実の断片化(fragment of reality)が生じると云った神経症的自我障害の特徴はある程度読みとれよう。これは精神機能の全体的な豊かさ・活溌さに関する、又現実吟味に関するロ・テスト結果によっても裏づけられている。

こうした「自我」から生成される「自己」は「自我」の現状を全体視するという意味ではそれほど正確さを欠くものでもなく、S群に比すればはるかにN群に似て両者間の一致度の高いことが認められたが、たゞそれに終るのではなくこの群独特の傾向が示されていた。即ち、まず、理想的「自己」像との差が極

めて大きい現実的自己の評価がなされ，又他方，S群をはもとよりN群と比較しても，ロ・テストでは同じレベルとして示された自我機能に対する自己評価がかなり下まわることから，非常に肯定的に自分自身（の自我機能）を容体視しており，しかも内在的な価値基準によって是認されない不満な，「自己」像が認められる。これはN群に見た様に，仮りにP君等のものと同程度と判断される（外的枠組から）自我機能であっても，それにこだわって自己不全感に陥るよりはむしろそれを受容しともかくそれを盛り立てて前進して行こうとする態度とは逆に，高い内的基準からすれば否定的に価値づけざるを得ないものとして（或いは逆に不健全性を認めざるを得ない現実の自分自身からすれば理想的姿は「度現実」と相反するものとして）現実の「自己」を非難め，内的基準と隔った不健全そのものに強くこだわり渋滞した態度，自己尊重及び「ともかく前進しよう」とする能動性を忘れた態度を示すも

のと考えられる。こうした不健全性へのこだわりから来る否定的な意味での自意識の過剰さ（self-consciousness）は即ち同一性の拡散（identity diffusion）を意味するものであるとErikson[36]は述べている。

この様に見れば，「自我」側の全般的な健全度の低化傾向，「自己」側において口・テスト結果とのつき合わせにより確認されたところの，自己尊重，と（内在化された）社会的価値基準による被是認感を欠く傾向により，適応的な統合機能のための条件が十分満されないこととなり，この様な関係にある「自我」と「自己」からはN君程どの統合的適応を期待できないであろう。但し，「自己」側の客観性に関する条件はかなり満たされており，不健全化した自我を，その不健全性にかなりこだわりすぎる形ではあるが，「自己」は一応の正確さを以って反映していると考えられる。Freud, S[60]及びRenichel, O.[39]は神経症が持つ現実重視の傾向を述べ，これは本来外界

の現実の方を衝動よりも重視することを意味するものであるが，これは現実一般を正しくとらえようとする働きに結びつくものと解される．いずれにしても，この様なりに一応の正確さを持った「自己」が生み出されているということは「自我」自身がこの「自己」を自らの鏡映像として用い，その機能全体を統一的に整えようとする志向性を有していることすなわち統合への努力を意味する一面がうかがわれると思う。

しかし，にもかかわらず，この様に不健全性に強くこだわる否定的な自己評価を生ぜしめるものは一体何であろうか．これは第1編の129頁以降及び第2編第1部の総括においても触れたところであるが、自我心理学で述べられるところの、精神エネルギーの自我備給における攻撃的要素と所謂エロス的要素の配分の問題及び超自我と自我理想の形成の問題等が関係づけられると思う。前者は主にFedern[37]によって述べられるところであるが、対象愛

及びこの対象愛の基盤となるべき健全な自己愛、精神内界との弾力的な疎通の機能等はエロス的衝動が中性化されて生じたエネルギーによってもたらされるが、これに対して、防衛や自己に対する攻撃的破壊的関係及び親和的感情の乏しい対象関係などをもたらすのは攻撃衝動が中性化されて生じた自我備給（Ego-cathexis）エネルギーであると考える。そして両者の配分を規定するのは自我の一次的自律装置に関係の深い生得的素質及び後天的な自我形成過程にかかわる様々な要因（significant others との関係のあり方）であるとするが、神経症の場合、いずれにしろ結果的には、攻撃的エネルギーの高い配分度から結果されると推察される様な現象を呈する。（衝動防衛の強化、健全な自己愛の欠如等）

又他方、超自我の問題は、一般に論じられるところであるが、神経症では、森田氏の神経症理論[102]では体質的素因をも考えようとするが、超自我が強く（きびしく）形成されすぎて

いると云われる。そのため、自我は衝動と現実との葛藤をより多く圧験させられることになり又超自我の強い懲罰性は一たび生じた葛藤状況から自我が抜け出るのを遅らせこれを長びかせる。従ってN群の場合の様に比較的早期にこの葛藤から自由になり、防衛に成功して自律的適応機能に転じて行くことが困難となり自我形成はそれだけ妨げられる。その結果やはりN群の様に'重要な他者'との同一視を次々と能動的に試みそれ等を取捨選択して自由に統合して行くことによって形成される自我同調的な(ego-syntonic)性格を担った"自我理想"は、この様に自律度の低い不自由な自我と'盲目的'な道徳性を強い罪悪感をもたらしやすい超自我のために、その形成が障害され、自我は健全な意味で自らの目標としその形成を推進してくれるべき自我理想を持つことが困難となる。それ故、神経症の場合、本研究で調べた「理想的自己」の中には原初的な懲罰的性質、即ち超自我的要素がかな

り投影されていると考えられ，逆にV群の場合には，超自我への耐忍性を相対的な意味でより多く備えた自我を基盤として形成され又自我の成長発展に加担するところの自我理想的性質を多く有していると考えられる。
神経症における肯定的な自己評価のあり方には以上の様な事柄がかなり関連づけられると思う。

3）分裂病群
自我の自律的機能は各側面においてかなり障害（或いは発達が阻止）されているとみなされ，社会関係の能動的活潑さ，精神内界の無意識的衝動面の統制とそれへの弾力的親和性，情緒の内的自覚及び分化した豊かな情緒反応，一次的及び二次的自我組織全体の豊かな調和的発達と活潑な全体的機能，現実検討力の適正さ等いずれをとってみても非常に低下し弱化していることがうかがわれる。従ってそれらを一応総和した機能全般の健全度は3群中目立って低い。他方，この様な「自我」

から生成せしめられたはずの「自己」は，それのみを見るかぎりN群と似通った形で一見内在的価値基準によって是認された自己尊重的に肯定視されたものであるかの様な様相を呈したが，上記の様な結果を示した「自我」と対応させれば，かいる自我の不健全性を殆んど意識的に客体化していない，云わば現実の自我から遊離したはなはだしく不正確なものであった。従って，外的枠組から客観的に把握された自我機能のレベルに比し極端に肯定的な方向に"ずれ"た自己評価を示したわけであるが，それは殆んど一貫して間違いなく（負荷項目の配置を，"でたらめな反応"をチェックしうる様工夫して行ったが，このチェックに該当しない。）肯定的な'現実'評価と，これと殆んど隔たりのない云わば未分化な'理想'評価によって特徴づけられるものであった。従ってこれはN群とほぼ同様であり，自己心理学的には望ましい「自己」のあり方を，S群が自分自身との関係づけと云う

課題をどの様に果そうとしたかは別として、質問紙で述べたことにはなる。

では二の様な「自己」はどの様にして生成せしめられるのであろうか。

中性化された自我備給のエネルギーが非常に貧困化し、精神内界の無意識的衝動面との関係では防衛が弱化し衝動の侵入に対して主体的な対策を構じることができず、他方対象関係でも所謂"現実との生きた接触"の喪失即ち対象喪失とHartmann[80]等が述べるところの現象を結果し、現実吟味も障害されている自我機能がこの様な「自己」を生ぜしめていることの意味が問題となって来る。Fenichel[39]は、衝動に従い現実を放棄しそして次の段階としては失われた現実に代る"にせの現実"(false realities)を形成するのを分裂病の特徴と述べており、これはHartmannやFrederm[37]等も指摘するところであるが、本質問紙にあらわされた「現象的自己」像も1つの"にせの現実"に他ならないであろう。分裂病の場合、オ1

編中8章で述べたところのBaughman や Combs 等が指摘する社会的望ましさ（social desirability）を配慮して意識的に「自己」報告を歪めることは、神経症の場合よりもずっと予想できにくい。それは上記の様に自我機能そのものが弱化し崩壊傾向を有しているところから容易に察せられようがいともかく自己防衛的な意味合いは少なく（無意識的な防衛機制を仮定しようとしても分裂病の場合には反動形成や合理化等高等な機制を働かせることは不可能だとされており、Hartmann 等が指摘するところであるが、拒否や投影等のごく幼児的な未分化な機制が選ばれるに過ぎないと考えられている。）、結局は快感原則に従って活動するところのエスの侵蝕を予防し得ない脆弱化し又断片化した自我機能の所産と考えざるを得ない。即ち、分裂病の自我は全体として機能の低下度が著じるしいわけであるが、Hartmann[80], Federn[32], Beres[14], Rapaport[129] 等が述べる様にすべての機能が一律に低下するので

なく，非常に不均衡な形をとると考えられており．一次的自律の自我装置はその中でも比較的侵されにくい傾向にあるとされている。分裂病群でも，本対象の選択にあたって既に統制したところであるが，知能そのものに特に他の2群から劣るところがないのも，これに関連づけられる1つの事実であろう。そしてこの様に知的能力そのものに欠陥がないにも拘らず，思考全般には，観念と対象との識別力の障害，言葉の記号性や代理性の消失，言葉そのものが物化し抽象的思考が不能となる等の障害が生じることをやはり Hartmann, Federn 等は指摘するが，これは自我機能の断片化を具体的に示すものである。

以上の様な自我における問題から，かいる自我は外的現実を放棄（或いは未分化な原初的防衛機制である'拒否'(46)の作用によって現実を拒否してしまう）すると同時に内的現実をも放棄することになり自分自身と自覚的なかかわり方をして自らを正確に客体視しに鏡映像と

しての「自己」を生成する働きを放棄すると考えられる。現実喪失は同時にいわば自己喪失であり、高く肯定的に価値づけられた形の「現象的自己」は、従って、自己という1つの内的乃至は主体的現実とのかかわりを通じてそれとの疎通の下にそして又それを質問紙を介して一応他者に疎通させようとする意図の下に表現されたものであるなりは、部分的には有効な機能を保持している断片化した自我が、現実原則よりも主に快感原則に従いながら、失われた現実にかわるところの〝にせの現実〟として生成せしめたものと考えるべきかと思う。この〝にせの現実〟なるものが何のために生成されるのか、又これが分裂症者を何らかの意味で助ける積極的な意味を持ちうるかどうかと云ったところは精神病理学的にも未だ十分説明されない問題でもあり、教育心理学の領域をやや逸脱するものであるかも知れない。

しかし、ともかく、本研究の結果からは、非

常に低下した自我機能と、それとは全く遊離した形の「自己」とが認められ、この様な自我が、こうした「自己」を生成する意味については以上に考察を試みたわけであるが、逆にこのような「自己」は本研究における理論的考察からすれば、自我にとり適応的統合機能のための指針乃至は現実的なより所となる意味を全く有していないと考えられる。自我にとって「自己」は正に遊離した"にせの現実"であるにすぎないであろう。この事は具体的なテスト場面での被験者の「理想的自己」の評価態度においても認められた。即ちこの群の被験者は大へん真面目にだが淡々とした他人事の様な態度で質問紙への記入を行って行ったが、たゞ殆んどの被験者が「理想的自己」を区別して評価する意味を納得できない様子を示し、"その評価は序でにやうされていること"以上の何者でもなかった様であり、'現実'と'理想'の両自己間の未分化さはN群よりも低いDS値によっても示されているが、

この様な被験者の態度は，〝二せの現実〟を更に2つに区別させようとする無意味な要求に対する反応を意味するものであろう。
こうした態度においてもS群はP群と対照的であり，この様な「自己」（正確には「自己」像でもない）を生ぜしめている自我自体が統合的な適応への志向及び努力をすでに放棄していると考えざるを得ない。

以上，各群における「自我」と「現象的自己」の関係が意味するところを適応的統合機能の観点より考察したが，結局この観点において各群の適応差が最も的確にとらえうることがわかる。
外的枠組から「自我機能」の全般的な自律的健全性を測定する仕方，及び内的枠組から「現象的自己」のあり方を一貫した質問紙への応答型としてとらえうる方法を累積的研究によって得，更にこの2つの方法を相補的，綜合的に用いることによって，「現象的自己」

に関する結果そのものが有する意味，及び，「自我」との関係において有する，適応的統合機能の観点からの意味が明らかとなり，これによって各群の適応差がよりよく理解された。

本研究における諸仮説は実証され，問題点が一応解明されて，本研究の全体的な目的は果されたことになる。

あとがき　（要約と今後の課題）

本研究では，主体的な「自我機能」と「現象的自己」という2つの枠組を総合的に用いて人格適応を理論的実証的に研究しようとした。

理論的研究編では，本研究でとり扱うこれ等2つの概念について各々詳しい理論的考察を行うと共に，両者の基本的区別を明確化した上で，両者の関係を，それ等の形成，構造（組織），機能の面から考察することを試みた。このためには自己心理学の知見のみならずそれよりもむしろ，自我心理学に関するより詳しい理解が必要と思われたので自我心理学の発展過程を概略的にたどりながら，その中心課題である「自我」概念の発展的な変遷をFreud, S. 以来の流れに従って追求したが，結局，これ等2つの心理学の最近に至る動向そのものの中に，主体的な機能過程である自我

と、そうした主体的機能及び個体の様々な社会体が意識的に客体化されたものであるところの「自己」とは互に密接不離な関係にありその関係が無視され得ないものであることを示唆するものがあるのを認めた。そして結局、両者の関係は、「自我」が自らの機能により生成せしめた「自己」を指針として適応的な統合機能(社会関係、社精神内界との関係を自由にかつ統制された形で単一化して行いつつ、生物-心理学的な個性を主観的ならびに客観的に社会から是認された形で持続的に発現せしめて行く機能)へ(を行うこと)にある云と、が認められた。即ち「自我」はその様々な自律的諸機能の形成過程を通じて、自らの鏡映像とも云うべき「自己」を形成して行き、その様に「自己」を生成せしめること自体の中に適応的統合への志向性が含まれていると考えられるが、生成された「自己」そのものは、従ってその段階までの「自我」の発展的な到達点をそのまゝ反映しており、これ自体が統合機能

にとっての不可欠な動因でもあり，又この機能を規定する意味を担っていると考えた。

この様な、「自我」と「自己」との関係づけに基づく統合機能の観点を実証的研究に導入し，外的枠組より「自我」の全般的な自律機能をテストする方法と，内的枠組より「現象的自己」のあり方を試べる方法を累積的研究によって確立し，2種類の資料を累積することをまず試みた。これは，32人すべて正常者群，神経症群，精神分裂病群と云う3群の適応度を異にする対象につき，各テスト法がどの様に適応差を反映しうるかを，自我心理学及び自己心理学に基づいた仮説検証の形で実験し分析したが，その結果，一応仮説に従った一貫した反応型を各群が示すことを認め，又結果的にその様な各群の特徴をとらえうる方法が得られた。但し，あくまでも一定の反応型が両枠組のテストから夫々得られたと云うにすぎず，それ等の結果は，実験仮説に反するものではないにしても，それ等の

反応型の意味は明らかでなく（殊に「自己」に関する結果はそうであった），又適応差を十分明確に反映するものでもなかった。

そこで次の段階として，上記の適応的統合機能のあり方を検討しうる様な形で，2つの枠組のテストを相補的綜合的に使用する方法を考え，その方法の下に得られた「自我」に関する資料及び「自己」に関する資料の関係を，統合機能を遂行するに必要と思われる条件に関して立てた仮説に基づいて検討した結果，適応度を異にする3群間にはその条件の充足の仕方に各々違いのある，特徴的な「自我」－「自己」関係が認められ，この様にしてとらえられた統合機能の違いは，これまでの平行的に累積していた「自我」及び「自己」の両資料が有する各々の意味を明らかにすると共に，適応差をより的確に又敏感に反映することがわかった。以上，診断と治療の両方を含む理論的及び実践的な臨床心理学至験から私自身が必要性と感じた（ところの）外的枠組及び内的

枠組から個人を理解しようとする方法を、最初は、専ら比較的なじみの深いロ・テストと「現象的自己」をとらえるための自己評価法とを併用することから出発したが、実践的至験及び理論的研究を重ねることによって、適応的統合機能の観点から両方法を総合的に用いる方法を考えるに至り、そのためのロ・テスト分析法と自己評価をとらえる質問紙法はより確かな法のとして得ることができ、又総合的使用の有用性を確かめることもできた。今後に残された問題としては、右テスト法をより組織化すると共に、更に多くの又多種類の対象について行うこと又神経症等については治療的変化をとらえる形の実験を行うことにより、たゞ単に群差をテストするのみならず具体的な個人を力動的に理解するための有効な方法としうるようもっと研究を深め発展させることを考えている。